
ヘルの大冒険

新居テル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヘルの大冒険

【Nコード】

N7311S

【作者名】

新居テル

【あらすじ】

「ひよんなことから」ヘルニアの呪い”なる意味不明な呪いにかかってしまった18歳の少年ヘル。その呪いを解くためには7つのアイテムを集めることが必要らしい。旅の道中で様々な事件に巻き込まれながら、仲間を増やししながら、敵と戦いながら、ヘルは自らの運命に立ち向かっていく…。という努力・勝利・友情がモットーの某少年漫画雑誌にありがちな冒険物語です。かなり長期連載になりそうな予感で、やっとつながったみたいな伏線もたくさん出てくると思いますが、長い目で読んでくださると助かります。

冒険の始まり（前書き）

構想6年といえは聞こえはいいですが、ただ自分の作品を世に出すのに踏ん切りがつかなくただけのチキン野郎の作品ですからして、温かい目で読んでいただけると幸いです。何となく、マンガっぽい感覚で読んでみてください。

冒険の始まり

操られていた。

そう言っただけでほとんど差し支えない。

自分が今、何をしているのか。

どこへ向かっているのか。

なぜこのような行動をとっているのか。

ヘルはその一切を理解していなかった。

ヘルは何かに導かれるように、ただただその洞穴の奥へと歩みを進めていた。

ガラランガラン！！

突然の轟音が洞穴内に響き渡った。

そして、それを合図にするかのようにヘルの意識が現実に復帰した。

「あれっ…俺、こんなトコで何やってんだ!？」

気が付いたらいつの間にか洞窟の奥にいたという意味不明な現状に直面したヘルの第一声は至ってシンプルかつ古典的なものであり、同様の状況に陥った人間の第一声としては常套句と言っても過言ではない台詞であった。

そして、二言目には、

「痛っ…いつてえ…」

遅れてやってきた痛覚に対する抗議の声を発した。

どうも右足の甲が痛い。

その激痛がどうやら何か堅い石のようなものを蹴っ飛ばしたのでは

ないかという可能性をヘルに示唆している。

当然ながらヘルに心当たりはなく、意味も分からず暗闇の中で激痛にもだえていると、背後からかすかに足音が聞こえてきた。

その音のする方へ耳をそばだてるヘル。

その足音は徐々にはつきりと鮮明になっていき、それは確実に何者かが近付いてきていることを意味していた。

「おいおい…何の嫌がらせだよ」

ヘルは右足の痛みも忘れて、来るべきその何者かの襲来に備えて身構えた。

カラン…コロソ…カラン…コロソ…

一定のリズムを刻みながら足音はさらにその距離を詰めてくる。

ヘルの緊張がピークに達したその時、

「おぬし…そこで何をしておる？」

現れたのは一人の老婆だった。

深く折りたたまれた皺に直角ほどに曲がった腰。

老婆の持つランプから放たれる薄明かりに照らし出されたその風体にヘルは語気を強めた。

「何だよ、脅かしやがって…いや、それが俺にもさっぱりでさあ…」

逆に教えてほしいくらいだよ」

「……………」

老婆はヘルの返答など上の空といった様子であたりを見回していたが、何かを見つけると突然、人が変わったように騒ぎ始めた。

「むむっ…これはまさか…ああ、何ということじゃ…」
「どうした、ばあさん…この世の終わりみたいないな顔しやがって？」
「これはおぬしの仕業じゃな？」

物凄い険相でヘルを睨みつけている老婆が指さす方へ目線を動かすと、そこには首の取れたお地藏様が転がっていた。

「げっ…」

ヘルはすぐに合点がいった。

先ほどの轟音と右足の激痛の正体に。

「正直、あんまりよく覚えてないんだけどな…この状況から察するに俺の仕業みたいだ」

「何ということ…そもそもこの洞穴自体、何人たりとも立ち入れないよう嚴重に封印してあったはず…それをおぬし…どうやってここへ入り込んだのじゃ!？」

「だからさつきから言ってるだろ…それはこっちが聞きたいくらいだつて!」

「むう…どうやってても白を切りとおすつもりじゃな…よかるう…わしについてくるのじゃ」

「あ？」

ヘルの困惑もお構いなしに老婆はすたすたと元来た道を引き返していった。

「ほれ、早くせんと迷子になってしまつぞい」

状況が飲み込めずその場に立ちつくすヘルを振り返って急かすと、

そのまま闇の中へ消えていった。

「何だかよく分かんねえけど、面白そうなことになってきたな……」

ヘルは恐怖心よりも好奇心にかき立てられて、その老婆の背中を追った。

冒険の始まり（後書き）

貴重なお時間を割いて読んでくださった方、ありがとうございます。
この作品に対する称賛から酷評まで幅広いジャンルのご意見・ご感想をお待ちしております。

ヘルニアの呪い

老婆の薄明かりを頼りにヘルは洞穴の出口に向かって歩いていった。記憶をどう遡ってもこんな道を通ったというデータは見つかりそうにもなく、どう考えても初めて通る道だった。

老婆はいえば、その間、一言も喋ることはなく、ただ淡々と先導役を遂行していた。

やがて外の光がヘルの目に飛び込んできて、ヘルは安堵感に包まれた。

しかし、老婆の声がまたヘルを不安感の只中にいることを思い出させる。

「こつちじゃ、ついてこい」

「へいよ」

老婆が向かう先には小さな神社のような建物が存在していた。ほとんど赤の残っていない鳥居をくぐりぬけ、辿り着いた境内を見渡してもヘルにはついぞ見たことのない景色が広がっていた。そもそも現在地からして分からない。

「入るのじゃ」

老婆は神社の奥の小屋にヘルを招き入れた。

ヘルは溜まりに溜まった質問事項をぐつと飲み込んで、その小屋の敷居をまたいだ。

ヘルの通された小屋は小さな畳部屋が一つだけという簡素な造りであったが、そこに置かれている掛け軸や骨董品の数々は相当年季の

入ったものばかりに見えた。

「ちよつとここへ座って待っておれ」

適当に用意した座布団をあてがうと、老婆は小屋の外へ出て行ってしまった。

「何がしたいんだよ、まったく…」

ヘルは小声でつぶやきながら、言われるがまま座布団に座って老婆の到着を待った。

10分後。

部屋に戻ってきた老婆の手には何やら怪しげな棒のようなものが握られていた。

よく見ると、それは剣の柄のような形状をしていた。

「待たせたのう」

老婆は悪びれる素振りもなく言った。

「ああ…あんまり退屈過ぎてここにある掛け軸でも盗んで逃げ帰っちゃおうかと考えてたトコだよ」

「ほっほっ…威勢のいいガキじゃのう…じゃが、その方がかえって都合がいいわい」

「ばあさんの都合なんて知ったこつちやねえよ！」

「ほっほっ…まあ、そう言いなさんな。さあ、つぐこべ言わんと早くこの“ヘルニアン・スピア”を握ってみるのじゃ！」

そう言って持ってきた柄のような物体をヘルに差し出す老婆。

「ヘルニアン…何だつて？」

「“ヘルニアン・スピアー”じゃよ…さあ、さあ！」

老婆はいぶかしがるヘルに無理やりその“ヘルニアン・スピアー”なる物体を握らせた。

すると、次の瞬間、

ブオン！！

ヘルの握った柄の先から光の槍のようなものが伸びたではないか。

「なっ…」

不思議な出来事に言葉を失うヘル。

それとは対照的に老婆は冷静につぶやいた。

「やはりな…そういうことじゃったか…」

「一人で納得してんじゃねえよ…俺にも分かるようにちゃんと説明しやがれ！」

興奮気味のヘルに対して老婆は静かに語り始めた。

「大昔の話じゃ…当時、このあたりの村には不治の疫病が蔓延しておつてのう…村は壊滅の危機を迎えておつた…そんな時じゃ…一人の呪術師がこのヘルニアン地蔵様にその疫病を閉じ込め、村を救うことに成功したのじゃ…それから数千年…二度とあのような悲劇が起きぬよう、わたらの家系が代々ヘルニアン地蔵様を封印したこの祠を守ってきたのじゃ…それなのに！…おぬしはそのヘルニアン地蔵様を！！…」

「わかった、わかった！…ばあさんたちが必死に守ってきたお地蔵

様を壊しちゃったのは謝るよ…だから、とりあえず落ち着いてくれ…」

徐々にヒートアップしてきた老婆は、ヘルノ謝罪も耳に届かない様子でなおも話を続けた。

「じゃが、ヘルニアン地蔵様を壊したのじゃ、おぬしもタダでは済まぬ…実は数百年前にも同じことがあったのう…その時ヘルニアン地蔵様を壊しおった青年は“ヘルニアの呪い”に侵されてしまうたのじゃ…呪いは徐々に身体を蝕んでゆき、最終的にその青年を死に至らしめたという…ここまで言えばおぬしも気付くじやろう…そう、おぬしもその青年同様…“ヘルニアの呪い”に侵されておるのじゃ

「！」

「!?!」

ヘルニアン・スピアー

「おぬしもその青年同様……ヘルニアの呪い”に侵されておるのじや！」

「……めちやくちや面白そうな話じゃねえか！ その話、もつと聞かせてくれよ！」

「いや、おぬし“ヘルニアの呪い”じゃぞ！？ おぬし呪われておるんじゃないぞ？」

ヘルの予想外のリアクションに戸惑う老婆だったが、ヘルのテンションは上昇の一途をたどった。

「だから喜んでんだよ！ こんな面白いこと普通に生きてたらそうそうないぞ！ で、そのヘルニアン……スピアー……だっけ？ そいつは一体何なんだ？」

すると、ヘルに同調するかのように老婆も喜々として語り始めた。

「“ヘルニアの呪い”に侵された人間にしか使えない特別な武器じやよ！ ほれ、わしが握っても何ともないじやろ？」

そう言つて“ヘルニアン・スピアー”を握つて見せる老婆。確かに何も起きない。

「要は“ヘルニアン・スピアー”の柄を握ることで呪いの力が槍に変換されるという仕組みになっておるのじや！」

「へえ……じやあ、さっきの光みたいなのがその呪いの力つてわけか……」

「その通りじや！ じやが、ここからが“ヘルニアン・スピアー”

のスゴイところじゃ！ おぬし、その柄の部分が取り外せるようになっておるじゃろ？」

「ああ、確かに」

どうやら柄の部分が引き出しのような構造になっており、下に引っ張ることで空洞が現れる仕組みになっているようだった。

「そこに何でもよい…まずは砂でも入れてみるのじゃ！」

興味津々のヘルは言われたとおりに砂を“ヘルニアン・スピアー”の柄の引き出しの部分に封入し、引き出しを閉めた。

「うむ…そして、そのまま柄の部分を握ってみるのじゃ！」

「ああ…こんなカンジか？」

目を輝かせながら、ヘルはこの命令にも従った。すると、

ブオン！！

先ほどと同様にヘルの握った柄の部分から槍のようなものが伸びた。ただ、違うのはそれが光の槍ではなく、どこからどう見ても、

「砂の槍…??」

「その通りじゃ…この“ヘルニアン・スピアー”は柄に入れた物質の性質を帯びた槍を作り出すことができる！

今は砂を入れておるから“ヘルニアン・スピアー/サンドモデル”といった具合じゃな！」

嬉しそうに力説する老婆に対して、ヘルも嬉しそうにある疑問をぶつけた。

「その武器がめちゃくちやカツコイイことはよく分かったけどよお…どうしてそんな武器が必要なんだ？」

「うむ…良いところに気がついたのう…実は“ヘルニアの呪い”は解くことができるのじゃ！」

「マジか、ばあさん！　ますます面白くなってきたじゃねえか！　で、どうすればいいんだ？」

「うむ…呪いを解くために必要な7つのアイテムを揃えればよいのじゃ！」

「7つのアイテムを探す旅に出るわけだな…めちゃくちや熱いじゃねえか！　そんでその旅の最中に敵が出てきたりして、そんな時にこの“ヘルニアン・スピア”が必要になるんだな？」

ヘルの興奮はピークに達していた。

「うむ…恐ろしいほどに理解と飲み込みが早くて助かるわい…」

「で、その7つのアイテムってのはどうやって探せばいいんだ？」

ヘルは老婆を急かすように話の続きを催促した。

「…うむ、7つのアイテムを探すためにはこの…“ヘルニアン・ストーン”が必要となってくるのじゃ！」

老婆は前にも増して嬉しそうにしながら、小部屋に飾られていたソフボール大の石を持ち出した。

「“ヘルニアン・ストーン”！！　どんどん面白そうなアイテムが出てくるな！　いいぞ、ばあさん！　で、この“ヘルニアン・ストーン”がどんな働きをしてくれるって？」

「うむ…この“ヘルニアン・ストーン”が呪いを解くためのアイテ

「ム元へとおぬしを導いてくねるのじや!」
「?」

ヘルニアン・ストーン

「この“ヘルニアン・ストーン”が呪いを解くためのアイテムの元へとおぬしを導いてくれるのじゃ！」

「なるほどねえ…で、具体的にはどんな風に導いてくれるんだ？」

「うむ…この“ヘルニアン・ストーン”と7つのアイテムは不思議な引力のようなもので引かれ合っており…つまり、“ヘルニアン・ストーン”の引っ張られる方角と強さによってアイテムのだいたいの位置が掴めるようになっておるのじゃ！」

「なるほどっ！　つまりこの石がアイテム専用のリーダーみたいな役割を果たしてるってわけだな！　でもよお、ばあさん…7つのアイテムとそんな力で引き合ってたらわけわかんねえことにならないか？」

「“ヘルニアン・ストーン”と一度に引かれ合うアイテムは1つだけじゃよ…ただし、1つ目のアイテムと“ヘルニアン・ストーン”が触れ合ったとき、その引かれる対象が2つ目のアイテムに変わる…それを繰り返して7つのアイテムを揃えたとき…おぬしの呪いは解けるのじゃ！」

「完全に理解したぜ、ばあさん！　つまり呪いを解くためには、“ヘルニアン・ストーン”の導きで7つのアイテムを探す旅に出ればいい…そして、旅の最中に襲い来る敵にはこの“ヘルニアン・スピア”で応戦すればいい…そういうことだな！？」

「ああ、その通りじゃが…」
「よし！　そうと決まれば善は急げだ！　早速、旅の準備を始めるぞ！」

テンションのメーターがすでに振りきれってしまったヘルは面喰らっている老婆を尻目に早くも旅立ちの準備を整え始めた。

「ちよつと待て…おぬし、呪いを解くための旅じゃぞ!? 当然、1日や2日じゃ済まん…うまくいっても1・2年…最悪、二度とこへは戻れぬやもしれん…それでも行くのか?」

「ああ、こんな面白いこと、もう一生巡り合えねえかもしれないから…俺はずつと退屈してたんだ…両親も友達もいねえ天涯孤独の俺には引きとめてくれる人もこの村に留まる理由もねえ…だから、こんな嘘みたいな話でも俺は乗るぜ…騙されたと思って楽しんでくるさ!」

「騙されたと思って、のう…よし、分かった! そんなお前さんにもう一つアイテムをプレゼントしてやるわい」

「まだ不思議アイテムがあんのか!? ばあさん、あんた一体何者なんだ!?!」

「ほっほっ…代々ヘルニアン地蔵様の祠を守ってきた、ただの老いぼれじゃよ…しばし待たれよ」

そう言うと、老婆は不敵な笑みを浮かべながら再び小屋の外へと出て行った。

そして、待つこと5分。再度現れた老婆の手には何やら怪しげな紫色の草が握られていた。

「待たせたのう…ほれ、“ナオリ草”じゃ」

「“ナオリ草”?」

「うむ…“ナオリ草”はこの“ヘルニアン神社”に代々伝わる薬草でのう…これを食べればどんな傷もたちまち治りそうになるのじゃ!」

「いや、完治しねえのかよ!」

「ほっほっ…まあ、食べてみれば分かる…これが最後の4枚じゃ…きつとおぬしの旅の役に立つじやろつて…」

「ああ…サンキュ、ばあさん!」

「うむ…おぬしの旅の無事を祈っておるぞ」

「ああ、目一杯楽しんでくるよ…そんなもって呪いも解く！」
「ほっほっ…楽しむのが最優先で呪いを解くのは二の次か…まあ、それもよからう…」

無邪気にピースサインを送るヘルをほほえましく見つめながらも、老婆は小声でこっ付け加えた。

「…じきに楽しむどころではない事態に陥るじゃろうからのう…」

「ん？ 何か言ったか、ばあさん？」

「いんや、何も…気をつけて行つてきなされよ」

「ああ、ばあさんも達者でな…」

ヘルは老婆から授かった“ヘルニアン・ストーン”“ヘルニアン・スピア”“ナオリ草”をポケットに忍ばせ立ち上がると、まるで散歩にでも出かけるような振る舞いで神社の鳥居を再びくぐった。老婆はその後ろ姿が見えなくなるまでヘルを見送った。あたりには生ぬるい風が吹いていた。

プリフ登場

ヘルが旅立ってから5日が経過した。
その間の収穫はというと、

「畜生…案外アイテム探したのは大変なんだなあ…」

というヘルをつぶやきから察する通りであるが、近況はというと、

「“ヘルニアン・ストーン”の反応は日に日に強くなっていったんだ！ 1つめのアイテムはこのきつと近くにあるに違いない！」

ということなので、旅は至って順調と言えなくもなかった。
奴を見つけるまでは…。

「ん!？」

その日の夕方。突然の“ヘルニアン・ストーン”の急激な反応にヘルの胸は期待感でいっぱいとなった。

「これは…間違いない！ 1つ目のアイテムはすぐそこだ！」

ヘルは“ヘルニアン・ストーン”の反応する方へ思わず走り出して
いた。

どうやら前方に見える巨大な木のあたりを示しているようで、ヘルはその巨木に向けて全力疾走を続けた。
が、その木の根元に到着したヘルの目に飛び込んできたのはアイテムなどではなかった。

「!?!?…おい、どうした!? お前、大丈夫か!?!」

なんとそこには血だらけで倒れている少年の姿があるではないか。
年はヘルと同じ18前後。

上半身は裸。

下半身には作業着と地下足袋のようなものを履いており、黄色いスカーフを首に巻いているのがアクセントとなっているが、今はそのほとんどが鮮血で赤く染まってしまっている。

「ん…?」

ヘル呼びかけに辛うじて目を開けたものの、息絶え絶えをここま
で体現している人間をヘルは見たことがなかった。

「おい、お前! 何があつたんだ!? 誰にやられた!?!」

「くっ…何だかよくわかんねえけど…ハアハア…どうやら俺の人生
はここまでらしいな…ハアハア…流星の俺も…この状態では勝ち目
はねえ…ハアハア…殺せよ…ラッキーだったな…ハアハア…手柄は
お前にくれてやる…ハアハア…」

「はっ!?! ラッキーとか手柄とか、何わけわかんねえ言つてんだ、
お前!?! ダメージくらいすぎて頭オカしくなつてんな…俺はお前
を殺したりなんかしねえ…俺がお前を助けてやるよ!」

「俺を助ける…だと?…ハアハア…お前…俺の仲間なのか?」

「はあ? またわけわかんねえこと言つてやがるな…俺とお前は今
日が初対面だよ…お前も俺の顔なんて見たこともねえだろ?」

「ああ…そうだな…ハアハア…だが、今の俺は…世界中の誰と会つ
ても初対面を感じられんだよ…」

「もう何を言つてもまともな返答は期待できねえな…話はこいつを
食べさせた後だ…」

そう言つてヘルがポケットから取り出したのは、旅立ちに際して老婆から受け取つた“ナオリ草”であつた。

「おい、お前…騙されたと思つてこの草食つてみる…何でもどんな傷でもたちまち治りそうになつちまう不思議な薬草らしいぞ」

「いや…完治しねえのかよ…」

「くっ…こんなときだけまともなツッコミしやがつて…とにかく食つてみる！」

そう言つてヘルが“ナオリ草”を差し出した瞬間、

「へっへっへ…やっと見つけましたぜ、ブリフさん…」

「流石のあんたでもこれほどの傷を負つてちゃあ、まともな戦闘はできないでしょう…」

「あんたには恩もあるが…上の命令だ…悪く思わんでくれよ…」

見るからにマフィア風情を漂わせた人相の悪い3人組がヘルの背後に陣取つていた。

「知り合いか？」

ヘルは至つて冷静に傷だらけの少年に尋ねた。

「さあな…ハアハア…出会う奴みんな初対面に思えるつてさっき言つただろ…ハアハア…どうもあちら様は俺に対して初めましてじゃなさそうだけどな…ハアハア…さっきからこんなことばかりなんだ…ハアハア…これで初めまして17人目…」

「人気者だな…」

「イカツイ男にだけな…」

全く動じる気配のないヘルと傷だらけの少年の会話をマフィア3人組が黙って聞いているはずがなかった。

「おい、お前！ 一体何者だ!？」

「いやいや、名乗るほどの者でもございやせん…ただの通りすがりの呪われ人間です…」

「クソガキが…ナメやがって…」

凄まれても全くビビった様子のないヘルにとうとうしびれを切らしたマフィアの一人がナイフ片手にヘルに向かって突進してきた。

「!？」

デビュー戦

「待つてました！ “ヘルニアン・スピア／リーフモデル”！」

ヘルはマフィアの突進を見ると満面の笑みを浮かべながらポケットから“ヘルニアン・スピア”を取り出した。

あらかじめ草を装填していたのか、ヘルの握った柄からは緑色の槍が伸びていた。

「ほう…お前も不思議な武器を持つてるんだな…だが、この俺様の攻撃を避け切ることなどできんわ！」

雑魚キャラ特有のセリフを吐きながら、ナイフの切先をヘルに差し向けるマフィアその1。

「“グリーンリボン”！！！」

技名らしき台詞を叫んだヘルは“ヘルニアン・スピア”を振り上げると、その草の槍をマフィアその1の持つナイフに巻きつけ、それを跳ね上げることで見事マフィアの手からナイフを離すことに成功した。

「なにっ!?!」

「へへへん、大成功だぜ！ この5日間あらゆる場面を想定して“ヘルニアン・スピア”を試してたからなあ…お陰さまで使い方もばっちり！ 技名も色々考えてあんだからな！」

啞然とするマフィアその1に対して得意げにこの5日間の成果を発表するヘルであった。

「ほほう…面白い武器を持ってんじゃないかねえか…じゃあ、こんな場面は想定してたか？」

バキユン！！

台詞をすべて言い終わらないうちに、マフィアその2がニヤリと笑いながらピストルをヘルに向かってぶっ放したではないか。

カン！！

「当然…」

乾いた音があたりに響き渡った。その音の正体は…

「ヘルニアン・スピアー／アイアンモデル”… “鉄の鎧” (アイアンコート)！」

「一瞬で防弾用の鉄板を用意したとお！？」

驚愕のマフィア2に対してヘルは自慢げに解説した。

「ヘルニアン・スピアー”は何も槍の形状しか持っていないわけじゃあない…練習次第でどんな形にも変化させることができるんだ！ 昨日気付いたばっかなんだけどな、これ！ アイアンモデルを板状に発現させれば弾丸も防げるってわけさ！ “鉄の鎧”と書いて“アイアンコート”と読むセンスも抜群だろ！？ ばあさん…本当に面白えよ、この武器！」

「なかなかやるじゃねえか、ボウズ…だが、こんなシンプルな攻撃は想定していたかな？」

劣勢に立たされたマフィア軍団はついにその3が重い腰を上げた。

マフィアその3は軽やかなステップワークで一気にヘルとの間合いを詰めてきた。

どうらや丸腰のようだ。

「体術使用か…フン、想定範囲内だ！…“ヘルニアン・スピアーノサンドモデル”…“砂嵐”！！」

ヘルは2度目のモデルチェンジを行うと、砂の槍を発現。それをランダムに振りまわした。すると、

「しまった…砂が目に入って何も見えない…」

砂埃が煙幕の代わりとなつて、ヘルはマフィアその3の視界から消えることに成功した。

「へっ…標的が見えなきゃ何もできねえだろ！ “ヘルニアン・スピアーノリーフモデル”…“つるのムチ”！！」
「ぐはっ！！」

ヘルは再びリーフモデルに戻すと、技名のとおり、それを鞭のようにしならせマフィアその3の腿裏にクリーンヒットさせた。

「へっへっへ…案外ちよろいもんだな…マフィアつつつてもこの程度か…まあ、いいデビュー戦になったよ、キ・ミ・た・ち！」

初勝利の余韻に浸るヘルだったが、マフィア軍団はこの程度ではへこたれなかった。

「よお、ボウズ…その武器がスゲエのはよく分かった…」

「てめえがいろんな場面を想定して訓練を積んできたこともよおく分かった…」

「でもなあ…3対1って場面を想定したことあるか？」

そう言うと、マフィアその1は予備のナイフを握りしめてヘルに向かって突進。

その2はピストルの照準をヘルに合わせてスタンバイ。

その3は丸腰のまま可憐なステップでヘルとの間合いを詰めてきた。

「ええつと…その想定はまだ…ちよつと時間ちようだい…今から考えるから…」

「誰がやるか！」

今日初めてのヘルの焦り顔にマフィア3人のツツコミがシンクロした。

「よくも俺たちをコケにしてくれたなあ！…」

その1の切先とその2の弾丸とその3のパンチが同時にヘルを襲った。

ヘルはモデル選択もままならぬまま、それらすべての攻撃を受け…

フリーフィンゲ・ソード

「よくも俺たちをコケにしてくれたなあ!!」

その1の切先とその2の弾丸とその3のパンチが同時にヘルを襲った。

ヘルはモデル選択もままならぬまま、それらすべての攻撃を受けるかと思われた次の瞬間、

「ぐわ~~~~!!!!」

吹き飛ばされたのはマフィア軍団の方だった。

相当の衝撃を覚悟して目をつむっていたヘルだったが、何のダメーヂもないのを不思議に思い、目を開いた。

そこに映ったものは、

「デビュー戦にしてはよくやったんじゃないか…思ったよりも善戦してたからしばらく傍観してたが…ちよつと助け舟出すのが遅すぎたか？」

先ほどの血だらけの少年だった。

「いんや、ベストタイミングだよ…それよりどうだ、“ナオリ草”の効能は？」

「看板に偽りなしだ…本当に治りそうだよ…」

「そいつは良かった…本当に効くんだな、アレ…」

先ほどまでピンチを迎えていたとは思えないほど、平然と会話するヘルと元・血だらけ少年。

対するマフィア軍団は驚きを隠せない様子だ。

「ブリフ…さんがなぜ復活している？」

「さっきまで致命傷を負っていたはずなのに…」

「これじゃあ、俺たちに勝ち目なんか…」

ブリフと呼ばれるその少年は自信に満ち溢れた表情で首元に巻かれた黄色のスカーフをほどいて右手に持った。

そして、UFO召喚の動作よろしくそれを頭上で振りまわし始めたではないか。

「何やってんだ、お前？ まだ頭オカしいの治ってないんじゃないかねえのか！？」

「まあ、戦闘素人は黙って見てろって…」

はてな顔のヘルにブリフは得意顔を向けた。

「あ…あのポーズは…」

完全に血の気の引いているマフィア軍団の見つめる先でブリフの振りまわし続けたスカーフは徐々にその形を変えてゆき、最終的には剣のような形状に落ち着いた。

「“ブリーフィング・ソード”…」

マフィアその2がつぶやいた。

「そう…この武器にはそういう名前が付いてるらしいな…昨日6人目の初対面の奴に教えてもらった…自分の名前を含めて、すべての記憶を失っても…こいつの使い方だけは身体が覚えてた…きつとこ

「いつは俺のすべてなんだ…」

ブリフは光り輝くその剣を振りかざしながら、ノスタルジックにつぶやいた。

「ひえええ…“ブリーフィング・ソード”を持ったブリフさんになんか勝てるわけねえ…ずらかるぞ！」

マフィアその2の号令でこわもて3人組は一目散に逃走を謀った。

「お前らもそのリアクションかよ…もう大概飽きちまったぜ…お前らに恨みはねえが…このまま逃げ帰られて俺が復活したことがこいつらの親元にバレたら面倒…な気がする…悪いが、ここでくたばってもらうぜ！」

呆れ顔でマフィア3人衆の逃走劇を眺めていたブリフだったが、一瞬だけ真剣な表情を作ると、風のようにその場からいなくなってしまった。

「速っ！！！」

ヘルが思わず漏らしてしまうのも道理である。

ブリフはその数秒後にはマフィア軍団に追いついており、さらに数秒後には3人をきっちり成敗して、ヘルの元に帰還を果たしていた。

「何秒かかった？」

「さあな…自分で数えやがれそんなもん」

「そうかい…俺の全力はこんなもんじゃないハズなんだけどなあ…たぶん」

少し悔しそうにしながらブリフは“ブリーフィング・ソード”を先ほどのように頭上で振りまわし始めた。

剣からスカーフへと原点回帰したその黄色い布切れは再びブリフの首元のアクセントとしてその存在価値を示した。

「で、お前…記憶喪失なのか？」

諸々の騒動がひと段落ついたとみて、ヘルはようやく質問することができた。

「ふっ…質問の順序がめちゃくちゃだな…普通は名前…」

「ブリフ…だろ？ さっきの怖そうな人たちが連呼してたからな…俺はヘル…」

「一応、そういうことにしといてくれ…俺も奴らにそう呼ばれたからそうなんじゃないかと思ってるだけで実際のところはよくわからねえ…なんせ昨日より前の記憶が一切ないから…」

1つめ

「昨日より前の記憶が一切ないからな…」

ヘルはブリフの倒れていた巨木の影で涼みながら追加質問した。

「じゃあ、あの怖そうなおっさんたちは何なんだ？ 随分、お前のごとびびってるみたいだったけど…」

「さあな…それを覚えてないから記憶喪失なんだよ…まあ、何かしらの因縁があつたことは間違いないねえんだろうけどな…じゃねえと17回も襲われる意味がわからねえ…」

「まあ、そんだけ強けりや問題ないんじゃないかねえの…何回襲われようとか…」

「大問題だよ…あんな弱つちいのとばつか戦ってたら勘が鈍つちまうからな…」

「それはそれは…大層な自信ですこって…」

「今の俺にはこいつしかねえんだよ…こいつだけが記憶を失う前の俺と今の俺を繋いでるような気がしてな…何かオカしいか？」

「いんや…別に…」

巨木の木陰で膝を突き合わせながら、しばし黙りこくる二人であった。

数分後、沈黙を破ったのはブリフの方だった。

「俺の話はもういいな…今度はお前の話を聞かせろ！ “ブリーフ イング・ソード”の原理も分かってない俺が言うのもなんだが、何なんだあの不思議な武器は!？」

「そうだなあ…説明してやるのは構わねえけど…ツツコミは最後に

まとめて受け付けるから、とりあえずは黙って聞いてるよな！」

「善処しましょう…」

「実はなあ…」

ヘルは“ヘルニアの呪い”関連の話を老婆から聞いたものそっくりそのままブリフに披露してやった。

ブリフも約束通り黙ってヘルの話に耳を傾けていた。

「…というわけで俺は7つのアイテムを探す旅に出てるってわけだ！…どうだ、嘘みてえな話だろ？」

「さあな…俺にはよくわかんねえよ…なんせその話が嘘か本当か判断し得るだけの記憶と知識が俺にはないんだからな…」

「へっ…お前に聞いた俺が間違ってたよ…で、ツツコミ受け付けますか？」

「そうだな…どうでもいいこと言ってもいいか？」

「なんだ、言ってみろ？」

「…その話から察するにきつと俺が1つめのアイテム持ってるんじゃないかねえか？」

「あっ…」

ヘルはすっかり忘れていた。

“ヘルニア・ストーン”の導きによってブリフと出会っていたことを。

「お前、そんなどうでもいいことをなんでもっと早く言わなかったんだ！？」

「さて、誰かさんにツツコミは最後にまとめてお願いしますって言われたような気がするんだが…なんせ俺の記憶はアテにならねえからな…」

「とにかく検証させてくれ！ お前が1つ目のアイテムを持つてるかどうか！」

「どうぞ、ご自由に…」

ヘルはブリフの許可を得て“ヘルニアン・ストーン”によるアイテム検索を行った。

その結果、“ヘルニアン・ストーン”と引きあっていたのは…

「マジか…」

「まあ、そんな気もしてたけどな…」

ブリフの首元に光るアクセント。

黄色いスカーフこと“ブリーフィング・ソード”であった。

「これを俺にくれって言ったら…怒るよな？」

ヘルは恐る恐る聞いてみた。

「さあな…自分でも予想もつかねえ…ただひとつだけ言えることはこいつは俺のすべてだってことだ…」

「だよな…困ったな、一体どうすれば…」

「もうひとつ、どうでもいいこと言ってもいいか？」

「??？」

「俺がお前の旅に同行するってのはどうだ？」

「!?!？」

ブリフの突然の申し出に言葉を失うヘル。

「どうした、どうでもよすぎたか？」

「い、いやぁ…どうでもよすぎて断る理由が見つからねえな…でも、

いいのか？」

「言っただろ、俺には物事を正しく判断し得るほどの記憶と知識はないんだよ…あるのは『命の恩人に対する感謝の気持ち』…それだけだ…」

「！！ へっ…それだけありゃ十分だ…」

こうしてヘルは1つめのアイテムとともにブリフという強力な仲間を得て、2つめのアイテムを目指す旅を続けることとなったのである。

ツブレ荘

ヘルとブリフが出会ってから何事もなく5日が過ぎた。

“ヘルニアン・ストーン”は“ブリーフィング・ソード”に触れるとまばゆい光を放ちながら1つめのアイテムとの磁石の関係を解消し、今は2つめのアイテムと引き合っている。

その反応も日に日に強まっていて、目的の物が近いことを匂わせていた。

その日の夕方。陽もすっかり傾いて二つの長い影が寂しい村の入り口に伸びていた。

「ウエルカムトウニシ村：ねえ」

「まったく歓迎されてる気はしねえけどな…」

ヘルが村の入り口にある寂れた看板を読み上げ、ブリフが看板に偽りありを訴えた。

ブリフがなぜそのような訴えを起こしたかというところ、

「この村には誰も住んでないのか…」

「さあな…少なくとも活気に溢れてないのは確かだな」

第一村人がさつぱり発見できなかったからである。

二人は村の門をくぐると、完全にシャッター街と化した商店街を歩き始めた。

「この分だと宿も全滅かもしれねえなあ…」

閉店のお知らせが書かれた張り紙を見ながら、ヘルが絶望感に満ち

た声で言った。

「野宿はもう流石に飽きたぜ…こんな廃れた村にもつぶれそうな宿
一軒くらいはあるだろ…」

すると、泣き言を言うブリフの背後から、

「宿をお探しですか？」

髪はボサボサ。

服はヨレヨレ。

無精ヒゲを生やし、垂れ下がった目じりが特徴的な一言で言えば冴えない中年男性が話しかけてきた。
まず反応したのはブリフだった。

「おお、第一村人発見！」

「もしかしておっさん宿やってんのか？」

「はい…この村唯一の宿ですいません…」

「すいませんって…俺なんかマズイこと言ったか？」

「さあな…謝られてるんだから許してやればいいんじゃないか」

「そついうもんか？」

冴えない中年男性の異常なまでの低姿勢に戸惑うヘルとブリフだったが、

「宿はすぐ近くとなっておりますので、是非ご利用下さいませ」

必死に営業する男の熱意に負け、本日の宿を決定することにした。

宿へと向かう道中。

ブリフが何かに気がついてヘルに話しかけた。

「なあ…『すぐ近く』ってだいたいどれくらいまでの距離のことを言うか知ってるか？」

「さあな…人それぞれだろ…」

「だよな…なあ、おっさん…あんたにとって徒歩30分の距離は『すぐ近く』なのか？」

「いえっ、あのっ、そのっ…すみません…」

「すみませんって…お前なあ!!！」

宿の主らしき男に呼び止められてから、30分以上が経過しても未だに宿に到着しないという現状にたまりかねたブリフは怒りを爆発させたが、それをなだめたのはヘルだった。

「おい…」

「なんだよ？」

「謝られてるんだから許してやればいいんじゃないか…」

「…そういうもんだったな」

それからさらに5分後。

ヘルたちはようやく目的地への到達を果たすことができた。

そして、今度の第一声はヘルであり、それに応えたのはブリフだった。

「俺って実は超能力者だったのかも…」

「かも…」

「ここが私の経営するこの村唯一の宿…“ツブレ荘”ですいません」

語尾に謝罪の文句をくつつけながらも誇らしげに紹介する宿主の指さす先には、その名の通り、今にも崩れ落ちてきそうな出で立ちの木造建築が存在していた。それを見たヘルのひとこと。

「こんな廃れた村にも『つぶれそう』な宿一軒くらいはあったな……」
そんなわけでヘルとブリフは“ツブレ荘”への宿泊を余儀なくされることとなった。

「申し遅れましたが、私この“ツブレ荘”のオーナーのハンゾーと申していません」

「で、俺たちはどこの部屋を使えばいいんだ？」

「現在、使用できる部屋が2階の『納豆の間』のみとなっておりますので、そちらですいません」

「…了解」

あらゆる面でヘルが諦めたことにより、今晚はめでたく『納豆の間』での寝泊りが決定したのであった。

美女で野獣

“ツブレ荘”の朝は早い。

その理由は、

「東向きの窓になんでカーテンがかかってねえんだよっ！ これじゃ、日の出と同時にまぶしくて目が覚めちまうだろうが！」

というブリフの怒声にすべて集約されている。

「うるせえな！ 俺にとってはお前のその怒鳴り声の方がよっぽど睡眠の妨げだぞ！」

と言っヘルも目が冴えてしまい、もはや二度寝は不可能な状態である。

かくしてヘルたちは午前6時の起床を果たしたのであった。

“ツブレ荘”の朝食はマズイ。

その理由は、

「最近このニシ村は深刻な食糧不足に陥っておりまして…今はほとんどこのようなインスタント食品しか手に入らない状態です…すいません」

というハンゾーの謝罪にすべて集約されている。

「まさか宿に泊まってまでこいつらのお世話になるとはな…」

「俺、このカップめん4日連続だぞ…」

怒りを通り越して諦めの境地に達していたヘルたちはかくしていつ

もの野宿生活と変わらない朝食をとっていた。

すると、ヘルたちの頭上から宿を破壊しそうなけたたましい足音が聞こえてきた。

その破壊音は階段を駆け下り、ヘルたちのいる食堂にまで到達したので、その正体がスーツスタイルで現れた一人の美女であることが判明した。

「あんた…今日は珍しくお客がいるんだねえ！　しっかりもてなすんだよ！」

鏡とにらめっこしながらキビキビとメイクとヘアースタイルの最終確認を行ったビジネスライクウーマンは、イソイソとブランドバックを手にする、

「それじゃあ、あたしは今日も仕事で帰れないから、あとのことはよろしくな！」

「ああ、ケーコ…」

ハンゾーの呼びかけも虚しく、颯爽と朝の出勤を終えてしまった。嵐のような出来事にしばらく唾然としていたヘルだったが、とりあえずブリフに向けて疑問点を投げかけてみた。

「今の人はもしかして…」

「鬼嫁以外に見えたか？」

「だよな…美女で野獣だよ、ありゃ」

「…私の妻ですいません」

ハンゾー肯定によって、先ほどのキャリアウーマン風の美女と冴えない“ツブレ荘”オーナーのまさかの婚姻関係が明らかとなった。

「奥さんは何か別の仕事やってんのか？」

そして、ブリフの問いかけによってハンゾーの独白が始まった。

「はい…実はこの“ツブレ荘”ちょっと前までは繁盛していたんです…」

「いやいや、この廃れ具合からはちょっと前まで繁盛してた面影も見当たらないのですが…」

と思いきやすぐにヘルのツツコミによって独白はインターセプトされてしまった。

「いえ、本当に繁盛していたんです…それが突然、このニシ村への物資の搬入に制限がかかってしまいました…それからはこの“ツブレ荘”だけではなく、ニシ村全体が衰退の一途を辿っていてすいません…」

「なるほどな…これでこの村の廃れ具合も納得だ」

「でも、なんで急に物資の搬入制限なんか…」

ブリフの相槌にヘルの追加質問。

「“マンガテイ帝国”の仕業です…！」

ハンゾーの語気が強まったこともさることながら、語尾に「すいません」がついていなかったことにヘルとブリフは驚いた。

そして、尋ねた。

「“マンガテイ帝国”？」

「はい…このニシ村よりも少し北に位置する元は小さな国家です…3年ほど前から領土拡大政策を打ち出し、このあたりの村も随分“マンガテイ帝国”に統合されました…そして、」

「次のターゲットがこのニシ村ってわけだな、おっさん？」

話の結論はブリフが持っていった。

「はい…他の村も同様の手口だったと聞いています…物資の…」

「物資の搬入を制限して村を食糧難に陥らせ、貧困にあえぐ村を支援するという大義名分を得て吸収合併に持ち込むと…そうだな、おっさん？」

今度はヘルが結論を述べた。

「はい、その通りですいません…でも、私たちは負けませんよ！」

上からの圧力にも屈しません！ 絶対に統合なんてさせませんから
「！」

キャラに似合わず息巻くハンゾーだったが、ヘルは話が脱線していることに気付いていた。

「で、その話と奥さんの仕事とどういう関係が？」

アラビアンナイト

「で、その話と奥さんの仕事とどういう関係が？」

「はっ…キミたちに関係ない話を長々としてしまってますいません…ケークは今、隣の村…いや、今はもう“マンガティ帝国”の領土となっていますが、そこでお店を立ち上げて社長兼店長をやっていますせん」

ヘルの軌道修正でようやくこの独白のトリガーとなった質問を思い出したハンゾーは申し訳なさそうに語った。

「へえ…女社長ってことか」

「やっぱり夜のお店系か？」

妙に納得顔のヘルとフザケ顔のブリフ。

「いえ…インテリア系のショップをやっていると聞いています…開店してまだ2年しか経っていませんが、世界中からお客さんがやってきてかなり繁盛しているみたいです…昔はよく宿の手伝いをしてくれたのですが、今は店の経営で手いっぱいみたいです…はっ、愚痴っぽくなってしまいましたせん」

ハンゾーは寂しそうに独白を終えた。

「なあ、おっさん…奥さんがそのインテリアショップ開いたのって村への物資制限が始まったすぐ後だったか？」

ヘルの不思議な質問にハンゾーは驚きながらも答えた。

「は、はい…そうだったと思います…やはり私の宿に未来はないと愛想を尽かしてしまっただんですよね…」

「だとしたらもうとっくにこの宿はつぶれてるよ…多分な」

「へっ??」

ブリフの意味深な発言に意味が分からないといった表情のハンゾー。そこへヘルがダメ押しのひとつ。

「じきに分かるよ…多分な」

怒涛の朝食タイムが終わると、ヘルとブリフはそそくさと“ツブレ荘”をあとにした。

「またご利用下さいませ」

というハンゾーの見送りの言葉に聞く耳を持たなかったことは言うまでもない。

“ツブレ荘”を出発したヘル一行の行き先は“ヘルニアン・ストーン”のみぞ知るので、2つめのアイテム搜索続行のため、一晩でニシ村を離れることとなった。

そして、歩き続けること約1時間。

ようやく次の街に到着することができた。

「ウエルカムトウ “マンガタイ帝国” 付属イトウー村…ねえ」

「まったく歓迎されてる気はしねえけどな…」

ヘルが村の入り口にある煌びやかな看板を読み上げ、ブリフが看板に偽りありを訴えた。

ブリフがなぜそのような訴えを起こしたかというと、

「はい、荷物全部出して…これで全部？」

武装した憲兵が物々しい様子で入国審査を取り仕切っていたからである。

「この石は何？ この剣の柄みたいなのも危ない物じゃないだろうね？ 武器は持ち込み禁止だぞ！」

手ぶらのブリフはすんなり入国審査をパスできたが、不思議アイテムを多数所持するヘルは手こずった。

「まさか！ これが武器に見えます？ ただの柄ですよ！ 柄だけでどうやって武器にしるっていうんですか？ これが武器だって疑うんなら、彼が首に巻いてるスカーフだって武器かもしれないですよ？ なあ？」

「そうですね…このスカーフも武器かもしれませんよ！ 調べてみますか？」

「分かった、分かった…そんなのまでイチイチ調べ上げていたらキリがないからな…さあさ、通った、通った！」

このようなイキサツでヘルとブリフは無事に“マンガテイ帝国”への入国を果すことができたのであった。

“マンガテイ帝国” 付属イトウー村を旅するヘル&ブリフは“ヘルニアン・ストーン”の導きで村の繁華街を闊歩していた。そして、ついにその時がやってきた。

「おっ！ きたぞ、この反応だ！ 俺がお前を見つけた時と同じ急

激な反応だ！ つまり…」

「2つめのアイテムはすぐそこだな！」

「『名答！』」

“ヘルニアン・ストーン”の反応の高まりに比例してテンションも高まっていた二人は歩調を早めてアイテムの元へと突き進んだ。そして、辿りついた先は…。

「おい…本当にここに2つめのアイテムがあるんだよなあ？」

ブリフの声が若干上ずっている。

「ああ、この石が故障でもしてない限りな…」

ヘルの声も心なしか震えていた。

「だとしたら俺たちのするべきことは強盗か？」

「ああ、血の滲むようなバイト生活でも送らない限りな…」

ヘルとブリフが立ちつくす店の看板にはこのようなキャッチフレーズとともに店名が記されていた。

『100万以下のものは仕入れません！超高級宝石店・アラビアンナイト』

トニー登場

2つめのアイテムを求めて辿りついた超高級宝石店・アラビアンナイトの店先で呆然と立ち尽くすヘルとブリフは善後策について協議中だ。

まずはブリフの提案。

「おいお前：覆面持つてるか？」

「持ってたとしても使いたくはねえな：俺はまだ前科は欲しくないぞ」

「だな：まあ、何にせよターゲットが定まらねえと強盗もバイトもできねえよ」

「ちよつくら下見と行きますか」

何はともあれまずはアイテムの確認をといた結論に至った二人は、意を決してその高級感あふれる宝石店の自動ドアに向かったその時、

「ちよつとキミたちいくつ？ 18歳？ そんなお子様にはまだこの店は早いよ！ 2年後のご来店をお待ちしております！」

反論する隙もなかった。

突如現れた警備員二人組によってヘルとブリフは無言を言わず店から追い出されてしまった。

「こりゃ本格的に強盗コースか？ 俺も流石に2年は待てねえぞ」

「お前はその前に服を着ろ：上裸で高級宝石店は2年後なら逮捕だ」

犯罪行為に手を染めることを決意するブリフとそれ以前の問題に気付いたヘルであったが、その直後、アラビアンナイトから出てきた

男女二人組を目にして作戦会議は中断された。

「なあ…今朝、宿のおっさんに言ったこと、全部撤回した方がいいか？」

「かもな…」

そこには“ツブレ荘”オーナー・ハンゾーの美女で野獣な妻ケーコの姿があり、その隣にはヘルたちとちょうど同い年くらいのホスト風のイケメンボーイを侍らせていた。

「宿の経営もままならないダメ亭主に愛想を尽かして自らの店を立ち上げ、儲かったお金で男遊びに励み、お気に入りのホストに超高級宝石をプレゼント…に1万円!」

「おいおい…そいつはフェアじゃねえな」

自らの仮説で賭博を申し込むブリフだったが、残念ながら破談に終わった。

二人がそんな掛け合いをしてる間にケーコとイケメンホストは並んで村のメインストリートを歩き始めていた。

ヘルとブリフは芸能記者本能に火がついたのか、そんな二人のあとをつけていった。

しばらくすると目的地に着いたのか二人の歩みが止まった。

「それじゃあね、トミー…また、近いうちに会いましょう!」

「そうですね…またお会いできるのを楽しみにしてます!」

爽やかな笑顔を残して、トミーなるイケメン少年は『ホストクラブ・光GENJI』というネオン看板の掲げられた店内に消えて行った。

ケーコはそれを見届けると、そのすぐ隣のお店に入って行った。その様子をサイレントモードで監視していたヘルとブリフはようやく緊張感から解き放たれて口を開くことができた。

「いやあ、えらいもん見ちまったな…」

「まあ、見たところであのおっさんに報告する義理もないけどな」

「とにかくあの鬼嫁に俺たちの存在がバレなくてホントよかったぜ」
「確かに…見つかって口封じに野獣モードで殺されたらまったもんじゃねえ」

「そうよねえ…あのオバサン、言葉づかいも汚いしおっかないわよねえ」

「そうそう…化粧で誤魔化してるけどよあ、実はあの顔、シミソバカスだらけだぜ、きつと…って、ん？」

「ブリフ…お前…バカ…」

以上の台詞の発言主をおさらいすると、ヘル ブリフ ヘル ブリフ ケーコ ブリフ ヘルである。
つまり、そういうことなのである。

「うえっ…美女で野獣…いつの間につ…!!」

ついさつき店内に消えたハズのケーコがいつの間にか自らの背後にいたことに対する驚嘆の声を上げるブリフ。
その1秒後には、

「すみませんでしたあ…!!」

白昼堂々、ダブル土下座を敢行するヘルとブリフであった。

「ハハハハハハ…いいのよ、いいのよ…あなたたちのリアクショ

ン面白かったから、それで許してあげる…あたしこそ驚かせちゃつてごめんなさいね…お詫びにコーヒー御馳走してあげる！ ついてきなさい！」

予想に反して豪快に大爆笑するケーコは二人の危惧していた野獣モードではなく姉御モードでの対応で、二人を先ほど入店したオシヤシな喫茶店に招待した。

「へい、姐さん！ どこまでもついて行きますっせ！」

「ブリフ…お前、いい下っ端根性してんなあ…記憶失う前はどっかの組織の末端にいたに違いないぞ…」

当然、ヘルとブリフに拒否権など存在せず、ケーコに導かれるまま喫茶店のドアを開いた。

私立孤児院　ハトリ園

「ここ、あたしのやってるお店なのよ」

凜とした雰囲気をもとってそう言い放ったケーコはヘルとブリフを空いている席まで案内した。

「あつ、社長！　お疲れ様です！」

入店から着席までの道中、店の従業員たちは最敬礼で我が店の最高責任者を出迎え、

「お疲れ様！　今日もみんな頑張ってるわね！」

ケーコもそれに最高のカリスマ性を持って応えていた。

「ケーコさん：ハンゾーさんの話によると確かインテリアショップを経営しているんじゃない？」

着席して最初のヘルの発言はこれだった。

「あら：あのダメ亭主、そこまで喋ってるのね：実はこの店は副業なのよ！　本業はこの店のさらに隣にあるインテリアショップってわけ！」

「会社立ち上げて2年やそこらで副業にまで手を伸ばせるなんてスゴイですね、姐さん！」

「そんなことないわ：商売はね、人と人の繋がりなの：それを教えてくれた人が身近にいたから…」

ブリフの下っ端根性マックスのよいしょ発言に今までとは雰囲気を変えてノスタルジックに語るケーコ。

その心境の変化にいち早く気付いたヘルはこう返した。

「早くその人に恩返しできるといいですね…」

「!?!?!…そうね…」

ケーコはヘルの意外な発言に驚いたのか相槌を打った後、しばらく考え込んでいるようだったが、最終的にこう続けた。

「近いうちにね…」

その後もケーコの副業喫茶店でしばらくくつろいでいたヘルたちが店を出た頃にはすでに昼の3時を回っていた。

「いやあ、姐さんの店のコーヒーうまかったな！　ありや、繁盛するハズだぜ！」

すっかりケーコに心酔しているブリフをよぞにヘルは何やら深刻な顔をしていた。

「なあ…これは喜んだ方がいいのか？」

「そりゃ、そうだよ！　あんなうまいコーヒーをタダで飲めたんだぞ！」

「そうだな…じゃあ、お前も一緒に喜べ！　“ヘルニアン・ストーン”の反応が遠ざかったぞ！」

「へっ??？」

なんとヘルたちが喫茶店でのんびりやっているうちに2つめのアイ

テムがどこか別の場所に移動してしまったのである。

「これで強盗もバイトもしなくて済むし…喜んでいいんだよな！」

というプラス思考のヘルに対してブリフの質問。

「で、俺たちは今度はどこへ向かえばいいんだ？」

「この反応の方角と強さから推測するとおそらく…ニシ村かな」
「へっ??？」

かくしてヘルとブリフはニシ村へとUターンすることが決定したのである。

それから約1時間後。

二度目のニシ村入村を果たしたヘルとブリフは“ヘルニアン・ストーン”に従って、さらに村を南下していた。

そして、ヘルを持つソフトボール大の不思議石が示しているであろう場所を二人が視界が捉えた頃には日没間近となっていた。

「間違いない…“ヘルニアン・ストーン”が示しているのはあの建物だ」

「そうかい…次は超高級何店だ？」

二人は疲弊しきった様子で目的地の建物の門の前で立ち止まった。敷地内には真っ白な二階建ての鉄筋造りが聳え立ち、その向こうから子供の声がかすかに聞こえる。

そして、その門の横に設置された大理石に彫られている表札にはその施設の名が記されていた。

「私立孤児院・ハトリ園」……」

「超高級宝石店からここへお引越とはね」

二人が門の前で立ち往生していると、敷地内から1人のビジネスマンらしき男が何やらブツブツ呟きながら現れた。

「まったく、あと少しでうまくいくところだったのによお……あのガキたちやあ、ビービー泣きやがって……せっかくあの女はうまく騙せてたのによお……」

謎のビジネスマンは謎の呟きを残し、ヘルたちに目もくれずにそそくさと立ち去っていった。

「なあ、プリフ……今度はどんな仮説に1万賭ける？」

「やめとこうぜ……フェアな賭けになんねえよ」

ヘルとプリフはこんな会話をしながら、“ハトリ園”なる施設の敷地内に足を踏み入れた。

ハトリ登場

ハトリ園の建物の入り口は門の真裏にあった。

その為、ヘルたちは敷地内をしばらく散策する必要があり、その敷地内はすべて子供たちの遊び場となっていたのが運の尽きであった。

「あつ、変なお兄ちゃんたちが遊びにきたよ！」

どこからどう見ても不審人物であるヘル&ブリフコンビはたちまち子供たちの注目の的となってしまうたのである。

「なあ…今から門の外まで走って逃げるか、こいつら全員気絶させるか…どっちがいいと思う？」

「後者を選ぶ奴がいたら見てみたいね…」

ブリフの提示した二択にヘルが答え、その通りの行動を二人は実行した。

しかし、子供たちのリアクションはヘルたちの斜め上をいった。

「うわあ、鬼ごっこが始まったよ！みんな、お兄ちゃんたちを捕まえるんだ！」

子供たちを振り切って全力の大脱走を試みるヘルとブリフを引っ捕らえるべく、なんと約10名の子供警察官チームは散り散りに走り出したではないか。

「おい、何かあいつら勘違いしてねえか…」

「してるな…でもよお…子供の勘違いを本当にしちまうのが大人の役割じゃねえかな…」

「!?!」

ブリフの無駄にイキツた台詞に無駄に感銘を受けたヘル。
こんな無駄な二人がとる行動は決まっている。

「よおし、みんな！俺たちを捕まえられるもんなら捕まえてみなっ
！」

こうしてヘルとブリフは“ハトリ園”の子供たちとの鬼ごっこに興
じることとなった。

すでに日没を迎えていたが、子供たちの遊び心は尽きることはなく、
演目は鬼ごっこから今はかくれんぼに変更になっていた。

そして、今ヘルとブリフは“ハトリ園”の建物の陰に身を潜めてい
るというわけである。

「なあ…俺たちがここに来た目的って子供たちとかくれんぼするこ
とで合ってるよな？」

「ああ…そういうことにしておこうぜ…今だけはな」

諦めの境地に達していた二人の間にはしばらく沈黙の時間が流れて
いたが、何かに気付いたヘルの突然のテンション急上昇によって場
の空気が一変した。

「おい、ブリフ…あいつの名前、確かトミーで合ってたよな？」

ヘルがそう言いながら覗きこんでいるのは“ハトリ園”の小窓であ
る。

ブリフもヘルに倣って覗いてみる。

「どうだかな…ありや源氏名かもしんねえぞ」

さも興味なさ気に答えるブリフ。

二人の視線の先には、昼間にケーコと同伴していたイケメンホストの私服バージョンと新登場の若年女性が机を挟んで何やら話しこんでいる光景があった。

耳をすませるヘルとブリフ。

「もう10年になるのね…」

「そうですね…でも、ミサさんがこうして立派に後を引き継いで下さってますから、両親も安心して天国で暮らしていけますよ…」

「立派にだなんて…あなたのお父さんとお母さんに比べたらまだまだ全然よ…ここでお二人から受けた御恩は絶対に一生忘れない…それに帝国からの援助がなくなった2年前からはハトリくんの寄付のお陰で運営できているようなもの…あなたには本当に感謝してもし切れないくらいよ…」

「いえいえ…僕の方こそミサさんにはお世話になりましたから…ミサさんがいなくなったら僕ら兄妹どうなっていたことか…」

「何言ってるの…恩人の子供たちを見捨てられるわけないじゃない…それにしてもなんでハトリくんばかりがこんな悲しい目に…」

「ミサさん…仕方ありませんよ…10年前の両親の交通事故も3年前の妹の水難事故も…全部、誰の所為でもありません…運命を恨むことももうやめました…だから、顔を上げてください…」

「ハトリくん…」

なごやかな雰囲気が始まった昔話が湿っぽくなってきたあたりで、見るに見かねたヘルたちは覗き行為を中止した。

再びの沈黙の後、盗み聞きした話を整理するヘルとブリフ。

「要するにこの“ハトリ園”を経営していたトミーの両親が10年前に交通事故で亡くなって、代わりにこのOGであるさっきのミサさんが後を継いでトミーとその妹も“ハトリ園”に入った…」
「そして、妹さんが水難事故で3年前に他界するという悲劇を乗り越え、ホストとして稼いだお金を援助のなくなった園の存続のために寄付しながら今に至ると…」

「この仮説に…いや、何でもねえ…」
しんみりとした表情のヘルであったが、その背後から天使のささやきが聞こえたのはその直後だった。

「お兄ちゃん、みい〜けつ!〜!」

本日の宿

「お兄ちゃん、みい〜けつ!!!」

二人は背後から聞こえる無邪気な声でようやく思い出した。

「そういえば、かくれんぼの最中だったな……」

鬼に見つかったヘルとブリフは施設の入り口に再集合した。
どうやらここでお開きのようだ。

「なあ……そろそろ門の外まで走って逃げるか、このままここに宿泊するか……どっちがいいと思う?」

「後者を選ぶ奴がいたら見てみたいね……」

ブリフの提示した二択にヘルが答え、その通りの行動を二人は実行しようとした。

しかし、

「さあ、みんな! ハトリお兄ちゃんも帰ったことだし、そろそろ夕食の時間よ!」

いきなりミサが玄関の戸を開け、子供たちに室内への帰還を促したではないか。

当然、彼女の視界にはヘルとブリフもばっちり捉えられていた。
そして、当然二人が不審者に映ったことは言うまでもない。
その証拠に、

「って、ちょっとあなたたち! 一体どこから入ってきたの! 警

察呼ぶわよ!」

ミサは先ほどのハトリとの会談の時とは打って変わって険しい顔で
そう言い放った。

「チビッコ警察にさっきまで追われてたところなんで、そればかり
はご勘弁を…」

「何、意味分かんないことやってんの!? 10秒以内に立ち去ら
ないと本当に警察呼ぶわよ!」

なるたけユーモラスに返したつもりヘルだったが、ミサには通用
しなかった。

ヘルとプリフがガチで逃走しようとしたその時、二人は再び天使の
ささやきを聞くこととなった。

「ミサ姉ちゃん、大丈夫だよ! この人たち、僕たちと一緒に遊ん
でくれたの!」

「そうだよ、かくれんぼと鬼ごっこしてとっても楽しかったの!」

チビッコ警察官の最年長2人の報告に続いて、次々と二人の潔白を
ミサに訴える子供たち。

そのあまりの勢いにはじめは驚いていたミサだったが、次第に優し
い顔つきになっていき、最後には微笑みとともにこんな言葉をヘル
たちに投げかけていた。

「この子たちと一緒に遊んで下さっていたのですね…そうとも知ら
ず大変なご無礼をはたらいてしまいました…本当にすみません…お
詫びと言ってはなんです、今日はこのままここにお泊りになっ
ただけなんでしょうか?」

ミサのあまりに突拍子もない提案にはじめは驚いていたヘルとブリフだったが、次第に驚いた顔つきになり、最後には驚愕の表情とともにこんな言葉をミサに投げかけていた。

「へっ??」

「ですから今晩はここに泊っていただけませんか？ 見たところ、この村の方ではありませんよね？ 本日の宿が決まっていなかったのでしたら、是非ここに！ もちろんお金はいただきません！」

「そうだよ！ お兄ちゃんたち、泊っていきなよ！」

「また遊んでよ！」

ミサだけでなく、子供たちからの熱心な誘いに戸惑いを通り越して喜びの感情を覚えるヘルとブリフ。

「なあ…今日はこのままここに宿泊するか、またあの今にもつぶれそうな宿に泊まるか…どっちがいいと思う？」

「後者を選ぶ奴がいたら見てみたいね…」

ブリフの提示した二択にヘルが答え、その通りの行動を二人は実行することに決めた。

「ありがとう！ この子たちも喜ぶわ！」

「でもよお、いいのか…こんな見ず知らずの怪しい二人組をいきなり泊めちまったりして…もし俺たちが悪い奴らだったらどうするんだよ？」

喜色満面のミサに対して、ヘルは当然と言えば当然の疑問を投げかけた。

すると、ミサはさざりと答えた。

「その人が本当にいい人かどうかを見分けるにはね…子供たちを見てるのが一番早い…子供ってスゴイのよ…人の本質を見抜く能力に関しては大人なんかよりもずっと優秀なんだから…その人を見て子供たちが笑えばいい人、泣けば悪い人…ただそれだけ…今のあなたたちの笑顔がさっきのあなたの質問に対する答えよ…」

「なるほどね…」

ヘルはつい数時間前、“ハトリ園”の門前で出会った謎のビジネスマンの謎の呟きを思い出しながら、ちよっぴりほっこりした気持ちになりながら、その真っ白な鉄筋造りの中へ入って行った。

そして、玄関で靴を脱ぎながら、ブリフの問いかけにヘルはこう答えた。

「選んじまったな…後者を」

「ああ、見せてやりたいねえ…数分前に自分に」

ハトリクライシス

“ハトリ園”の朝は早い。

その理由は、

「うえええええん！」

という赤ん坊の泣き声にすべて集約されている。

「なあ、ブリフ…あのミサって女、どこまで計算だと思っ？」

「さあな…でもよ、世の中の女のすべての行動は計算に基づいてる
って昔聞いた記憶があるぜ…」

「なあ、ブリフ…お前、確か記憶喪失じゃなかったっけ？」

「へっ??？」

と言うヘルもブリフも泣き叫び続ける赤ん坊たちの対応に追われ、
もはや二度寝は不可能な状態である。

かくしてヘルたちは二日連続の午前6時の起床を果たしたのであつた。

“ハトリ園”の朝食はマズイ。

その理由は、

「最近このニシ村は深刻な食糧不足に陥っててね…今はほとんどイ
ンスタント食品しか手に入らない状態なのよ…ごめんなさいね」

というミサの謝罪にすべて集約されているならまだしも、

「お兄ちゃん、白いご飯にマヨネーズかけるとすっごいおいしいん
だよー！」

「お味噌汁にはねえ…ケチャップとマスタードがオススメだよ！」
という無邪気な子供たちのトッピングに原因があることは九分九厘、間違いがなかった。

「畜生…昨日は夜遅くまで遊びに付き合わされて、朝は日も昇らないうちから赤ん坊のお世話をさせられて、最後のトドメはこのユニーク朝ごはんかよ！これならまだあのつぶれそうな宿の方がマシだったぜ！」

イライラが頂点に達していたヘルをなだめたのはまたしてもプリフだった。

「まあまあ…恨むんなら、俺の二択問題に即答しちまった昨日の自分を恨むんだな…」

怒涛の朝食を終え、ようやく子供たちの呪縛から解放されたヘルとプリフは慌ただしすぎてしばらく封印していた大事な本分を思い出していた。

「なあ、プリフ…俺たちがここに来た目的って宿泊がてら子供たちのお世話をすることで合ってるよな？」

「ああ…そういうことにおいたんだよ…今まではな」

「じゃあ、今からは2つめのアイテムを探すことが目的だったってことで話進めていいか？」

「ああ…“ヘルニアン・ストーン”の反応がまた遠ざかったなんて言ってももう喜ばねえぞ」

「それは残念…だとしても俺にはお前を喜ばせることはできないかもしれないねえな」

そんなわけで、ヘルとブリフは大急ぎで“ハトリ園”を出ることとなった。

「もう出掛けてしまうの？　もうちょっとゆっくりして行けばいいのよ…」

ヘルは「ここにいたら1分たりともゆっくりできませんからね！」
と言う代わりに

「なあ、ブリフ…お前の記憶ってのは案外アテになるのかもしれないなあ…」

「だろ？　特に世の中の女に関しての記憶には自信があるんだぜ」というブリフとの会話にとどめた。

「お兄ちゃんたちもう言っちゃおうの!？」

と寂しがる子供たちに後ろ髪をひかれながらもヘルとブリフは“ハトリ園”をあとにした。

前日に子供たちと一緒に作った装飾付きの手鏡が二人の首から新たに下げられていたことをここで付け加えておく。

“ハトリ園”を出発したヘル一行は三度“ヘルニアン・ストーン”の道案内によってニシ村を北上していた。

2つめのアイテムの場所が二転三転している現状から考えられる可能性は、

「2つめはお前の“ブリーフィング・ソード”みたいに誰かが身につけてる物なんだろうな」

というヘルの説が最有力であり、その持ち主は、

「俺たちの行く先々に登場したあのトミーってホスト以外に考えられないだろ」

というブリフの推理通りと考えてほぼ間違いないだろう。

歩き始めて約1時間後。

ニシ村のはずれに差し掛かったヘルの携帯する不思議石の反応が再び大きくなった。

辺りには人はなく、建物と言えは遠くに時計台が見えるのみで、ただただ道が続いているだけだったが、その導きに従って駆け足で進むと、

「トミー!?!」

二人は道のだ真ん中でうつぶせに倒れているトミーことハトリを発見したのである。

午前6時

少し時間をさかのぼること午前6時。

ヘルたちが“ハトリ園”の赤ん坊たちに安眠を妨げられていた頃、村はずれの時計台下ではお揃いのオレンジ戦闘服を着た謎の兵士が大勢集まっていた。

その数、約200名。

「レト様、我が部隊は全隊員が集まりました！」

「ウイツス！ 報告ご苦労！」

下っ端らしき兵士の報告にやけに野太い声で労をねぎらうリーダー格の男はさらに続けた。

「エオス、セレネ！ お前らの部隊は全員揃ったのか！？」

「はっ…もちろんでございます！」

と甲高く答えたのは、火の玉のような紋章を胸につけた男で、

「ほっ…我が部隊も全員揃っております、レト様！」

とさらに甲高く答えた男は胸に火の玉を逆様にしたような紋章をつけていた。

「ウイツス！ これで今日の作戦に参加する全部隊が揃ったわけだな！ それでは、これより“ニシ村侵略作戦”を開始する！ お前から全員、今まで通り抜かりなくやるんだぞ！」

「はっ！」

「ほっ！」

レトという名を持つ低音ボイスの野生児キャラを筆頭とした謎のオレンジ軍団は時計台を離れ、村の中心部へと向かおうとしていた。その時、村から時計台のオレンジ軍団に向かって1人の男が歩いてきているのにレトは気付いた。

スラツといた出で立ちに端正な顔立ち…『ホストクラブ・光GEN JI』のトミーことハトリである。

「ウイッス！ 懐かしい顔だな！ どうしたハトリ！ こんな時間にこんな村はずれまで散歩でもしに来たか！？」

「とぼけないで下さい…話は全部聞いてます…」

あっけらかんとした語り口のレトに対してハトリの口調は真剣そのものだ。

怒気すら感じられるほどに。

「ほう！ 誰が口を割った！？」

「さあね…ただ、僕もあなたたちの手口を知らないわけじゃあないのでねえ…」

「なるほど…昨日、ニシ村在住の我が部隊の衛兵の無線機が紛失したという報告は受けとったが…まさかそれがお前の仕業だったとはなあ！？」

「さあ、何のことでしょう…」

二人の会話から火花が飛び散っているようだった。

それほどまでに敵対心剥きだしのレトとハトリであった。

そんな様子を見て、エオスという名を持つ火の玉紋章の男が会話に割り込んできた。

「はっ…レト様！」

「ウイツス！ なぁに、心配するな！ 俺がハトリごときに負けると思うか！？」

「ほっ…しかし、作戦の開始が遅れます」

レトの自信満々の問いに答えたのは逆火の玉紋章のセレネであった。

「エオス！ アポロ様にはこう報告にはしておけ！ 『午前6時作戦開始！ 特に問題もなし！』とな！」

「はっ！」

レトの命令に敬礼で答えたエオスは、そこから目にも止まらぬスピードで走り去って行った。

「いいんですか…嘘の報告なんてしてしまつて？」

ハトリは相も変わらず挑発口調だ。

「ウイツス！ 俺がいつ嘘なんかついた！？ 何の問題もない！
ライオンの群れに飛び込んできたアリー一匹ごときな！」

「！！」

レトはそう不敵に言い放つと、まばゆい光を残してハトリの視界から消えた。

「後ろだ！」

レトの声にハトリが振り向くと挨拶代わりとばかりにレトの拳が飛んできた。

「ぐあっ！」

ハトリはレト不意打ちを避けきることができずまともに受けてしまった。

「相変わらず生意気な口聞きやがって！ 俺の“光速移動”を見切れるのは“オレンジ部隊”でもアポロ様、エオス、セレネくらいだぞ！」

得意顔のレトは再びまばゆい光とともに超高速で動き回り始めた。しかし、ハトリは目をつむったまま動かない。

「それでこの俺をおちよくってるつもりか!？」

持ち前の重低音で怒りをあらわにするレトはハトリの背後に回って蹴りを入れようとした。
が、

「後ろ…ですよね？」

「!?!」

ハトリは鬼のような形相で後ろを振り返ると、その勢いでレトにまわし蹴りを食らわした。

「なにい!?!」

レトは吹き飛ばされしばらく動かなかったが、気を取り直すとフラフラになりながらも立ち上がった。

対するハトリはレトの怒りの火に油を注ぐようにこう言い放った。

「これで4人目ですよ…あなたご自慢の“光速移動”を見切ったの

「!」
「<」
「」
「…」

ソーラーブラスト

「4人目ですよ…あなたご自慢の“光速移動”を見切ったの…」
「くっ！ マグレが出たか！」

悔しさを顔全体に滲ませたレトは三度“光速移動”を敢行。
しかし、

「あなたもしつこい…」

先ほどのリプレー映像を見ているかのようにハトリの回し蹴りが再びレトの脳天を直撃した。

「くっ…」

「マグレは二回も続きませんよ…何回も連続して同じ技を使うからです！ 同じ技が何度も通用するほど僕は甘くないですよ！」

唇を噛むレトに対して言葉の追い打ちをかけるハトリ。

「いいだろう！ お前の言う通り、別の技を出してやる！ 後悔しても知らねえぞ！」

ハトリの挑発に乗ったレトは空に両手の掌をかざし始めた。

「“ソーラーブラスト”ですね…その技も知ってますよ」

「そりゃあ、知ってるだろうよ！ 我が“オレンジ部隊”でも俺を含めて3人しか使えない秘技中の秘技なんだからな！ だが、“ソーラーブラスト”は光のスピードで飛ぶ熱の波動！ 技を知ってるだけじゃあ、避けるのは不可能だぞ！」

そう野太い声で宣言したレトは空にかざしていた両手を前に突き出した。

そして、

「くたばれ！ ハトリい！」

という地響きにも似た叫びとともにその掌から“ソーラーブラスト”を放った。

レトから放たれた光の波動は一瞬でハトリを襲った。

が、

「避けられないことも知ってますよ…だから…“リフレクト”！」

レトが“ソーラーブラスト”を放つと同時にハトリが両手を頭上から振り下ろすと、そこには光の壁のようなものが出来上がり、それはレトの放った光の波動を遮るばかりかすべて反射して、空の彼方へと弾き飛ばしてしまった。

「なっ…“リフレクト”はアポロ様にしか使えない“オレンジ部隊”最高の防御技では…」

目の前で起きた出来事が信じられないとばかりに驚愕するレト。

その落胆の様子を勝機とみたハトリはさらに畳みかける。

「僕も半年間、タダである男に仕えてたわけではないですからね…あなたの思ってるいろんな技の使える人数…全部にプラス1しておいた方がいいですよ…」

不敵な笑みを浮かべながら、ハトリはレトのように掌を空に向けか

ざし始めた。

「ハトリ！ まさか…！」

「当然ですよ… “リフレクト” が使えるんですからね…！」

低音ボイスで慌てふためくレトに銃口を向けるように両掌を突き付けるハトリ。

そして、

「ソーラーブラスト”！！！！”」

辺りがまばゆい光に包まれ、その後しばしの静寂が生まれた。

「これで4人目ですね… “ソーラーブラスト” の使い手は…」

ハトリはその静寂を切り裂いて、勝ち誇ったようにその場に力尽きたレトに向かって勝利宣言を行った。

その一部始終を見ていた“オレンジ部隊”の隊員はしばらく啞然としていたが、

「ほっ！ 全員、かかれ！」

という甲高いセレネの大号令でハトリに向かって一斉に攻撃を開始した。

「まったく… あなたたちには用はないのに…」

ハトリ呆れ顔で呟くと、再び両の掌を空に突き出した。

「ソーラーパワーイン！ “ソーラーガトリング”！」

太陽の力を溜め込んだハトリはその手を振り回し、光の波動を辺りに飛び散らせた。

「ぐわあああ！！」

そして、その尽くがハトリに勢いよく襲いかかったオレンジ戦闘服の兵士たちにヒットした。

その光景を目にした他の兵士たちはすっかり怖じ気づき、その場に立ち尽くしたまま金縛りにあつたように動けなくなってしまった。

「それでいい…なるべく無駄な戦闘はしたくないんです…」

「ほっ…」

ハトリの優等生発言にセレネが唇を噛んだその時、まばゆい光とともにエオスが現れ、戸惑いの声明を出した。

「はっ…一体何なんだ、この状況は…？」

「遅かったですねえ…待ちくたびれましたよ…」

再び闘志を燃え上がらせるハトリ。

「はっ…これはお前がやつ…」

「違いますよ…エオスさん…あなたに言ったんじゃない…」

「はっ??？」

エオスの発言を中断させてまで台詞を割り込ませたハトリはさらにこう続けた。

「僕はあなたに言ったんですよ……」レインボーガード隊員 マンガティ帝国・七色守護隊
……「オレンジ部隊」隊長……アポロ・ウディティール！」

ハトリ vs アポロ

「僕はあなたに言ったんですよ…」 マンガティ帝国・七色守護隊^{レインボーガードイアンズ}」

…「オレンジ部隊」隊長：アポロ・ウディティーレ！」

「はっ！？ アポロ様にはさつき問題ないと伝えただけ…この場にいらっしやるハズが…」

そう言いかけたエオスの目が驚愕に見開かれた。
その視線の先には…。

「エオスよ…何が問題ないって…？」

「アポロ様…！？」

ひと際目立つオレンジ色の戦闘服を羽織った男が大量のオーラを放ちながらそこに立っていた。

「嫌な予感がして駆けつけてきてみりゃあ、エオスよ…お前の言う問題ないってのはこんな無様な状況のことを指すのか？」

「はっ…レト様がいらっしやっただけで問題はないかと…思ったのですが…」

アポロの追及に冷や汗をかくエオス。

そして、アポロは威厳に溢れた声でこう言った。

「エオスよ…問題ないってのはなあ…この俺様が駆け付けた今のよ
うな状況のことを言うんだ…よおく覚えとけ！！」

「はっ！」

そして、さらにハトリの方に向き直ると、アポロ落ち着いた声で嬉

しそつに言った。

「ハトリよ…2年ぶりか…お前はいつかレトを超え、俺様の右腕となる男だと期待していたのだが…残念だよ！」

「何を残念がる必要がありますか…僕はたった今、あなたの期待通りにレトさんを超えたじゃないですか…」

ハトリは凜と佇むそのオレンジ男にまずは挨拶とばかりに意気がつた。

「ふっ…ハトリよ…故郷が侵略されるのを黙って見過ごせるハズがない…とでも言いたそうな顔だな…」

ハトリの挑発をあざ笑うかのようにニヤリと笑うアポロ。

「最初からこうなることは分かってたさ…とでも言いたそうな顔です…ね…」

不敵な笑みを返すハトリ。

「ああ、分かってたさ…3年前、お前みたいな正義感の強い若造が我が“オレンジ部隊”に入ってきた時から…」

「妹を亡くした僕は大切なものを守る人間になりたいと思って“七色守護隊”（レインボーガーディアンズ）の門を叩いた…なのに…そこで待ち受けていたのは理想とは遠くかけ離れた現実…マンガ王による領土拡大政策を率先して強行するこの“オレンジ部隊”に僕が半年間も耐えられるハズがなかった…」

「そして、領土拡大の波が故郷ニシ村に押し寄せてくる、来るべき日に向けてトレーニングに励んでいた…とまあ、そんなところだろう…ハトリよ？」

「すべてはこの日のため…アポロさん…あなたを超えるためです！」
「ふっ、ハトリよ…この俺様が見初めたその才能…とくと見せてもらおうか！」

アポロはハトリとの会話にキリをつけると、いきなり“ソーラーブラスト”の体勢に入った。

ピュン、ピュン、ピュン

そして、瞬く間に閃光がアポロとハトリの間を1往復半した。

「ノーモーションでの“ソーラーブラスト”…そして、その直後にも関わらず完璧な“リフレクト”…流石です…」
静寂が辺りを包む中、切り出したのはハトリだった。

「ハトリよ…“リフレクト”を使うだけならまだしも、その反射でこの俺様を狙ってくるとは…俺様の目に狂いはなかったようだな…」
「アポロさん…僕が“オレンジ部隊”に入って唯一良かったと思えることは…あなたから多くの技を盗めたことです…お陰でここまで強くなれた…そして、今日…あなたを超える！」

「ふっ、ハトリよ…自惚れてもらっちゃあ困る…お前がいくら強くなるうとそれは2位以下での争い…だが、それでも俺との対等の勝負を望むならいいだろう…“ソーラーブラスト”の使い手同士、手っ取り早い方法があるからな…」
「なるほど…」

二人は以上のような会話より共通の認識を持ち、それを実行に移すべく、太陽に手をかざした。
そして、

「ソーラーブラスト」！！」

同時に放たれた光の波動は二人の間地点でまばゆい閃光を放ちながら激突。

そして、数分後…辺りは静寂に包まれたのである。

ニシ村侵略計画

午前9時。

ヘルとブリフが道端で倒れているハトリを発見した後の時刻まで時計の針を進めることにする。

「アポロさんは！？…村は…村は今どんな状態なんですか！？」

ハトリの復帰第一声はヘルの胸ぐらを掴んでの村の安否確認であった。

「おい、トミー…まだ病み上がりの身体なんだ！あんまし暴れるなよな！」

興奮と焦燥の真っ只中にいるハトリをヘルがなだめる。

「くそう…あと少しで“治りそう”なのに…」

「そりゃあ、そうだ…なんせ薬草名が薬草名だからな…」

「その変な薬草に命を助けられたのはどこのどいつだ…」

ハトリが地面を拳で叩き、ブリフがニヒルな笑みを浮かべ、ヘルが不服そうに呟いた。

「そんなことよりもだ…この状況はなんだ？…流石の俺も仮説が立てられねえぞ…」

「そうですね…今すぐには動けそうもありませんし、命を救って下さったあなた方には事情をお話する義理もある…」

ブリフの促しによって、ハトリは真剣なまなざしで“ニシ村侵略計

画”の全貌を語った。

そして、それを静聴するヘルとブリフもまたハトリに負けないほど真剣なまなざしを有していた。

「物資の搬入制限をかけて活気を失わせた村に支援を持ちかけ、話の乗ればそのまま支配下に置く…」

「それでも支援の話に飛びつかない場合には武力行使って…」

「どんだけ無茶苦茶やりやがんだよ!!」

ハトリの講演を聞き終えたヘルとブリフはいつものように要点まとめりレーを行い、最後の感想はユニゾンした。

「それが彼らのやり方なんです…」

うつむくハトリにヘルが疑問をぶつける。

「そんなこととしてその“マンガティ帝国”の国民全員何とも思っていないのかよ？」

「手段や動機はあとからいくらでも情報操作が可能です…“マンガティ帝国”の国民はこの領土拡大政策の存在すら知らされていません…彼らには貧困にあえぐ町村の支援のために吸収合併しているのだという誤情報だけを流し、国外からの情報にはすべて検閲をかけてから国内に伝えられるという徹底ぶり…“マンガティ帝国”の国民は知らない間に周辺地域からの憎悪の対象に仕立て上げられているのです…」

ハトリの解説に二人の表情がさらに険しくなった。

「なあ、ブリフ…こんな話を聞いちゃった後だからか無性に食後の運動がしたくなってきたんだが、お前も一緒にどうだ？」

「奇遇だな…俺もちょうど首元の“ブリーフィング・ソード”が疼き始めたところだ…」

殺気立つヘルとブリフを不思議そうに見つめていたハトリだったが、二人の瞳の奥に何かを感じ取り、表情を引き締め直すと、

「さあ…もう休憩は十分です！」

スックと立ち上がると、よろめきながら村の中心街へ向けて走り出したではないか。

「お、おい…俺の経験上、“ナオリ草”が完全に効果を発揮するにはあと少し時間がかかるぞ！」

と忠告しながら急いでその後を追うヘルとブリフ。

「全力疾走の半分以下のスピードですが、これだけ走れば十分です…」

と言いながらもマラソンランナー並みの脚力でズンズン遠ざかって行くハトリとそれに全力疾走で追いつがるヘルとブリフであったが、しばらく進むと巨大な鉄柵の前でハトリの足がピタリと止まった。

「“光速移動”はまだ無理だとしてもこれくらいは…」

そして、謎の言葉とともに両手を空へ挙上。
次の瞬間、

「“マルチック・シュート”！！！」

ハトリは目の前の鉄柵に全力のキックをお見舞いしたではないか。

ジュ…

すると、強固なはずの鉄格子はハトリの蹴りを跳ね返すどころか音もなく崩れ去り、鉄柵には大きな穴が残された。

そして、離れ業をやつてのけたハトリはようやく追いついてきたヘルとブリフに視線をくれて事もなげに言い放った。

「こっちの方が近道なんですよ…」

開いた口がふさがらないヘル・ブリフペアなど気にも留めず、自ら生み出した鉄柵の空洞部分を通過して村の中心街へと急ぐハトリであつた。

ハンゾーとケーコ

ハトリに付いてニシ村の中心街を目指すヘルとブリフは前方に見慣れた木造建築を発見した。

「なあ、ブリフ…あの建物に見覚えあるのって俺だけか？」

「いんや…あんな今にも“潰れそう”な建物がこの世界に2つとあると思うか？」

「だよな…」

ゼーハー言いながら話し合う二人の見つめる先には、オレンジの戦闘服集団と美女で野獣なあの人が何やらひと悶着しているようだった。

「だから何べん言ったら分かるんだい！？　ここはこいつにとつて大切な場所なんだよ！　銑鉄所なんかにさせてたまるかい！」

「はっ！　あんたも話の分からない人だ…こんなオンボロ宿を経営するよりよっぽど儲かると思いますがね？」

この甲高い声の持ち主は午前6時に時計台にいた火の玉紋章の工才スである。

「オンボロ宿でもなあ…こいつなりに精一杯頑張ってたんだよ！　なあ？」

「は、はい…商売は人と人との繋がりでですから、誠心誠意やらせていただいでしません…」

ケーコの後ろに隠れてハンゾーもちゃっかり騒動の渦中に存在していた。

「ほっ！ 誠意だけでお金が儲かりや 苦勞はしませんぜ…」

そして、この一段と甲高い声の持ち主は逆火の玉紋章のセレネである。

「苦勞？ 上等じゃねえかつ！ 苦勞も誠意もなく稼いだお金なんてこつちから願ひ下げだねっ！」

「はっ！ 強情な女だ…仕方がない、最後の手段だ…やれ！」

全く怯む様子のないケーコにしびれを切らしたエオスはオレンジの部下に最後の手段とやらの執行命令を下した。
それを受けたオレンジ戦闘服の男はケーコの腕を引つ張り、強制連行を試みた。

「んなっ…何すんだよ!？」

ケーコも必死に抵抗するが、流石に腕つ節では男に敵わない。
とうとうオレンジ軍団に捕えられてしまった。

そして、オレンジ兵士は追い打ちをかけるように腰から下げていたピストルをケーコのこめかみに突き付けた。

「はっ！ この土地の権利書を持ってこい…さもないとこの女の命はないぞ！」

最上級の悪人面でハンゾーに決断を迫るエオス。

「あんた！ 絶対に渡すんじゃないよ！ そんなことしたら一生呪ってやるからっ！」

「ああ…ケーコ…」

我が妻の必死の叫びもこのダメ亭主の耳には届かない。
ハンゾーは普段の頼りなさにさらに輪をかけたようなオドオドっぷりを露呈していた。

「はっ！ あともうひと押し必要だな…やれ！」

ハンゾーの絵に描いたような動揺っぷりを見たエオスはオレンジの部下にもうひと押しと押しとやらの執行命令を下した。

それを受けたオレンジ戦闘服の男はケーコのみぞおちを4発立て続けに殴った。

「うっ！…！！！」

あまりの衝撃にその場にうずくまるケーコ。

「ほっ！ これで売り渡す気になっただろ？」

「は、はい…も、もちろん売ります！」

「あんた！…ゲホツゲホツ…売っちゃダメだ…」

セレネの催促に対して即答するハンゾーに気力を振り絞って喝を入れるケーコ。

「ケーコ…どうしてそこまで？」

ハンゾーの涙の問いかけにケーコは熱く語ってみせた。

「長年の夢だったんだろ！…この宿建てるまでにあんたがどれだけ必死で頑張ってきたかあたしは知ってる！…それだけ大事なもんを簡単に手放すなんて言うなあ！ 男ならてめえの大事なもんくらい

死ぬ気で守ってみせろよ！」

すると、ケーコの魂の叫びが通じたのかハンゾーの表情は過去最高レベルにまで凜々しく変化していた。

「分かりました…ケーコ…キミの言う通り…大事なものを簡単に手放しちゃいけないですね…」

「あんたあ！」

「はっ！この村の奴らは強情な奴ばかりだ…」

ハンゾーの決意に表情を明るくさせるケーコと舌打ちをするエオスであったが、次のハンゾーのセリフによってその立場は逆転することとなる。

「この“ツブレ荘”を売り渡しましょう！」

「！…！」

大事なもの

「この“ツブレ荘”を売り渡しましょう！」

ハンゾーのこの発言によりケーコとエオスのリアクションが逆転した。

「はっ！ それが賢明な判断だと思いますねえ……」

「あんた！……あたしがさっき言ったこと聞いてなかったのかい！？」

なおも銃口を突き付けられるケーコの必死の問いかけに今度はハンゾーが熱く語って見せる。

「聞いていましたとも……だから、“ツブレ荘”を売るんです……大事なものを守るために……」

「だから、あんた……言ってることとやってることが……」

「宿は手放してもまた建て直せばいい……でも！……キミを手放したら！……私にはもう何も残らない……私だって男です！ 自分の大事なもののくらい死ぬ気で守ったっていいじゃないですかっ！」

「……！」

途中で涙ぐみながらも誠心誠意の意志表示を行った夫に妻の瞳も潤んでいた。

「ほっ！ 理由なんてどうだっていい！ とにかく早く権利書を渡してもらおうか！」

せっかくの雰囲気ை台無しにするようなセレネの要求にハンゾーは内ポケットから書類を取り出した。

「これがこの宿の権利書です…これを渡したらケーコは返してもらいますよ…」

ハンゾーはその折りたたまれた用紙をエオスにゆっくりと差し出した。

その手は震えている。

そして、権利書がエオスの手に渡るその寸前、

「あ、痛っ！」

ケーコの噛みつき攻撃をくらったオレンジ兵士の悲鳴がこだました。同時にケーコが権利書をインターセプト。

そして、そのままライターで火をつけてしまったではないか。

「ケーコ！」

「ほっ！　なんてことしやがる！　これじゃあ、お前たちも…」

驚くハンゾーと怒るセレネ。

「へっ…あんたらに奪われるくらいなら燃やしちまった方がまだ権利書も浮かばれるってもんだ！」

「はっ！　こうなったらもうこの建物に用はねえ！　お前らの思い出諸共吹き飛ばしてやるわ！」

啖呵を切ったケーコに怒り心頭のエオスは自ら動いた。

掌を空に向け太陽光を吸収。

そして、その手をそのまま“ツブレ荘”に向けて伸ばしロックオン。

「させないよ！」

そこへ立ち塞がったのはもちろんケーコだった。
気力を振り絞ってエオスの前で両手を広げるケーコからはどこでも動かないような意思が感じられた。

「け、ケーコ！」

ハンゾーにはもはや妻の名を叫ぶことしかできない。

「はっ！ つくづく死にたがりな女だ！ セレネ…邪魔だ！ 消せ！」

エオスは煙たそうにケーコ抹殺指令を下した。

「ほっ！」

それを受けたセレネは金切り声で御意すると、ケーコに銃口を向けた。
そして、

ドゥン！

1発の銃声がニシ村に鳴り響いた。

そして、次にニシ村にこだましたのは、

「あ、あんだああああ！」

ケーコの悲痛な叫び声だった。

「あんだ！ あんだあ！」

「ケーコ……」

愛する妻の呼びかけにもその名を呟くことしかできない夫。

「バカ野郎！……バカ野郎！」

愛する夫が血を流して倒れている姿にただただ罵倒語を並べることしかできない妻。

「ケーコ……私は嬉しいんだ……キミの言う通り、大事なものを死ぬ気で守ることができて……」

「バカ野郎！ あたしの言うことちゃんと聞いてたかい！？ あたしは死ぬ気でって言ったんだ！……ホントに死んじまう奴があるかよ……」

「それでも私は……嬉しいんだ……」

そう言うと、ハンゾーはその言葉通り、満面の笑みを浮かべながら力尽きた。

「あんたああああああ！」

本日二度目のケーコの叫び声がこだました。

身体を揺すってみてもハンゾーはピクリともしない。

「ほっ！ 自ら銃弾に飛び込んでくるとはなあ……俺たちに刃向かうからこういう目にあうんだ！」

「はっ！ 今度こそこの宿を吹き飛ばしてやるぜ！」

ほくそ笑むセレネと再び“ソーラーブラスト”の構えをとるエオスの目の前に再度ケーコが立ちはだかった。

「はっ！ この期に及んで何を守る必要がある？ この宿のオーナーはもうこの世にいないんだぞ！？」

「さっきから言ってるんだろ！ この宿はあいつの夢だ！…誰にも壊させはしない！」

ケークは目に涙を一杯に溜めながらも決して零すことはなかった。しかし、

「はっ！ そんなに死にたいんならこの宿諸共、今すぐ旦那のところに送ってやるよ！」

エオスは容赦なく“ソーラーブラスト”を放とうとした。

「ソーラー…ぶっ！！」

が、技名を言い終わらないうちに閃光が横切り、エオスは10メートルほど吹き飛んだ。

それでもエオスはすぐに立ち上がると自分を蹴り飛ばした人物を確認するべく顔を上げ、そしてまるで幽霊でも見たかのような驚きの表情を浮かべた。

そこには…

「ケークさん、大丈夫ですか？」

「トミー？？」

参上

「ケーコさん、大丈夫ですか？」

「…トミーがどうしてここに？」

想定外の登場人物に驚きを隠せないケーコ。

「事情の説明は後です！ それより旦那さんを…早く病院に連れて行った方がいい…」

ハトリは傍らで倒れているハンゾーを指さした。

「でも…」

ケーコはハトリを一人この場に残す不安感を表明したが、ハトリの力強い台詞に深手を負った夫を近くの医者まで担ぎ込む任務を負うことを決意した。

「大丈夫…すぐに片を付けますから！」

ケーコとハンゾーが去ったことにより、再びオレンジ軍団とハトリが対峙する構図が出来上がった。

しかし、ハトリの突然の登場にエオス、セレネをはじめとする“オレンジ部隊”の面々は未だ動揺を隠せずにいた。

「ほっ！ 何でお前がここに！？」

「はっ！ さっきお前はアポロ様との“ソーラーブラスト”勝負に敗れたハズ…」

「あなたたちと喋っている暇はありません…アポロさんはどこですか？」

ハトリは火の玉紋章コンビの驚きにはリアクションひとつとらなかつた。

「ほっ！ ハトリ…お前、レトさんを倒したからって調子に乗ってるな！」

「はっ！ 俺たちだって伊達に“オレンジ部隊”の3番隊長と4番隊長を任せられちゃいねえ！ アポロ様と戦いたけりゃ、まずは俺たちを倒していきな！」

「いいでしょう…あなた方の手口があ頃と変わっていないのなら、あの人はどこで何をしているのかだいたい予想がつきます…今すぐここであなた方を倒して向かえばまだ間に合うハズ！ 短期決戦でいかせてもらいますよ！」

ハトリが掌を太陽に透かしてみたのをゴングにエオス・セレネペアとのバトルが今まさに始まるうとしていたその時、

「おいおい、面白そうなことしてんじゃねえか…」

「俺たちも混ぜてくれよ…」

ガキ大将よろしく飛び込んできたのは、もちろんヘル・ブリフペアである。

「遅かったですね…待ちくたびれましたよ…」

「その台詞の続きは『もう少しで僕が全員片付けてたところですよ』か？」

ハトリが目線も合わせずに言い、ヘルもそれに応えた。

「はっ！ 何だお前たちは！？」

初顔合わせのエオスが当然の疑問に対して、ヘルとブリフはユニゾンで答えた。

「こいつの…同志だ！！」

「ほっ？」

「トミー…行ってこいよ…」

「お前の相手はここにはいねえだろ？」

はてな顔のセレネには構わず、ヘルとブリフはハトリを促した。

「そうですね…では、ごゆっくり食後の運動をお楽しみください！」

ハトリはそう言うと、目にも留まらぬスピードで走り去った。

「はっ！ ハトリ、お前…俺たちから逃げる気か！？」

慌ててその後を追おうとしたエオスの前を通せんぼするブリフ。

「違いよ…あいつは逃げたんじゃねえ…戦いに行っただ！」

「それに…どうしても戦いたいつてんなら俺たちが相手になってやる！」

「はっ！ “オレンジ部隊”の隊長クラスにどこの馬の骨とも知らん小僧どもが挑むか！」

「ほっ！ 面白い！ 返り討ちにしてやるわ！」

ハイトーンボイスコンピの挑発にヘルはあくまでマイペースに、されど闘志を燃やしながら、

「そんなじゃま…トミーのお言葉に甘えて食後の運動でもしますか！」
「だな…」

「はっ！ じゃあ、俺はこのツンツン頭を殺る！ 生意気で殺り甲斐がありそうだ！」

いつもよりも若干低音にシフトした声でヘルに宣戦布告するエオス。

「おい、ヘル…ご指名だぞ…」

と無気力に言うブリフにヘルも無気力に返した。

「ああ、ブリフ…お前もな…」

ブリフの目の前には逆火の玉紋章の男が立ちはだかつており、いつもの超高音ボイスで宣戦布告した。

「ほっ！ じゃあ、俺はこのスカーフ野郎だな！」

かくして、ニシ村侵略計画の命運を握る、ヘルvsエオスおよびブリフvsセレネの戦いの火ぶたが切って落とされたのである。

矛盾

「お前… 剣士だな？」

廃墟と化した村をバックにセレネと向かい合うブリフは唐突に言った。

「ほっ！ 帯刀してないのによく分かったな！ バレてしまったのは仕方がない！」

セレネはそう言いながら太陽に手をかざすと、その右手に何やら光の剣のようなものが現れた。

「ああ… 剣士の勘だ… そしてその俺の剣士の勘が言っている… お前じゃあ俺には勝てねえとな！」

ブリフは光の剣にはノーリアクションで勝利宣言を行った。

「ほっ！ 随分な自信だな！ だが、この光の剣“ライトブレイド”は触れるものすべてをその太陽熱でたちまち焦がしてしまう最強の武器！ つまりこの“ライトブレイド”で突き通せないものはないのだ！」

セレネはそう言って傍らの木材を軽くひと刺し。

すると、木材は炎の中に放り込まれたかのように炎上し、一瞬で木炭へと様変わりしてしまったではないか。

「ふっ… それでも俺の剣士の勘のジャッジは変わんねえな！」

それでも、あくまで平常心のブリフ。

「ほっ！ これだけでは驚かないようだな！ なら仕方がない！
いでよ… “ライトブロッカー03” ！！」

金切り声で叫びながらセレネが手を太陽にかざすと、今度は左手に光の盾のようなものが現れた。

「ほっ！ この光の盾 “ライトブロッカー03” は俺が “ライトブレイド” から改良に改良を重ねて作り上げた自信作！ こいつに触れるすべてのものはさっきの木材のように一瞬で炭になる！ つまりこの “ライトブロッカー03” を突き通せるものはないのだ！」

セレネはそう言って傍らの木材を光の盾に突き刺そうとした。すると、木材は炎の中に放り込まれたかのようにたちまち木炭へと様変わりし、最後には消し炭と化してしまったではないか。

「ふっ… 『それがどうした？』と俺の剣士の勳は言っているな…」

このパフォーマンスを見てもやっぱり平常心のブリフ。

「ほっ！ あくまで強気の姿勢は崩さないようだな！ なら、お前のその自信の源を見せてもらおうじゃないか！」

「ふっ… いいだろう…」

ブリフは自信たっぷりに笑うと、おもむろに首元のイエロースカーフに手を掛けてそのまま解いた。

そして、マフィア戦でも見せたようにUFOでも呼ぶかのようにそれを頭の上で振り回し、大空の彼方まで届くような大声で叫んだ。

「 “ブリーフィング・ソード” 召喚！！」

「ほっ！？」

セネレはブリフの一挙手一投足を唾然として見守っていたが、ようやく気を取り直してひとこと。

「…何も起こらないぞ？」

不思議そうにセレネが見つめる先には同様に不思議そうな表情のブリフがいた。

その右手には、元のスカーフの形態を保ったままの黄色い布切れが握られている。

「さあて…俺は一体どうしてこんな黄色いスカーフをに握りしめているのでしょうか…」

こんなハブニングにもやっぱり平常心のブリフ…とはいかなかった。流石に冷や汗が隠しきれない。

「ほっ！ 剣士が剣を失うってのはどういうことが知ってるか！？」

「さあ？」

「ほっ！ 雑魚の誕生ってことだよ！」

自分が優位に立ったことを確信したセネレは一気に片をつけようと“ライトブレイド”でブリフに斬りかかった。

が、ブリフは持ち前の身体能力でそのすべてをかわしていく。

「ほっ！ 確かに身のこなしは一流だな！ だが、反撃できないよっじゃ勝負は見えてるぜ！」

セネレはなお嵩にかかって攻め続ける。

そして、それをかわし続けるブリフ。

しかし、

「ほっ!?!」

という拍子抜けな掛け声を合図にその瞬間は突然やってきた。

“ライトブレイド”を振りまわし続けていたセレネの握力が限界を迎え、その光の剣が右手からすっぽ抜けてしまったのである。

「なっ!?!」

そのイレギュラーな軌道に流石のブリフも対応しきることができず、セレネの“ライトブレイド”はブリフの左肩をかすめてしまった。

「くっ…!」

高熱の剣をくらった痛みに言葉を失うブリフ。

そして、セレネは勝ち誇ったように言った。

「ほっ! こんな状況でもお前の剣士の勘とやらはお前の勝利を信じて疑わないかい!?!」

イエローサイクロン

「ほっ！ こんな状況でもお前の剣士の勘とやらはお前の勝利を信じて疑わないかい!?」

「…ノーコメント、だそうだ…」

ブリフは右手で左肩を押さえながら虚勢を張った。

「ほっ！ これでお前も終わりだな！ いでよ、“ライトブレイド”…！」

セレネは再び太陽に向け右手を伸ばし光の剣を獲得した。そして、ブリフに対して最後の攻勢をかける。

「くそっ… “ブリーフィング・ソード” さえあればこんな奴…」

“ライトブレイド” をかわし続けるブリフも左肩の影響が動きに先ほどまでのキレが感じられず、勝敗が決するのも時間の問題かと思われた。

が、セレネの攻撃をかわしながらブリフは考えていた。

なぜ“ブリーフィング・ソード” 召喚に失敗したのか？

記憶喪失の所為で俺がこいつの使い方を忘れちゃったのか？

それは違う。

記憶喪失後のマフィアとの戦いときにはちゃんと使えてたんだ。なら、あの時と今…何が違う？

召喚の時の回転の方向か？

それとも回数か？

ひょっとしたら高さの問題があったんじゃないか？

…ダメだ。思い当たるフシが一個もねえ。

そして、散々考えたブリフはある結論を出した。それは…

『考えるな。』

そもそも記憶喪失の俺が“ブリーフィング・ソード”の召喚方法を覚えてたことがオカしいんだ。

きっとそれは頭じゃなく、身体で記憶してたことなんだ。

俺はマフィアとの戦い以来、10日以上この“ブリーフィング・ソード”を使っていない。

だから、身体が忘れちまったんだ…こいつの召喚方法を。

なら、もう一回身体に思い出させればいい。

そんな時には頭からの情報なんて全部邪魔なだけだろ。

だから、ブリフは無になった。無の状態で黄色スカーフを再び手に取った。

そして、無の状態でセレネの“ライトブレイド”から身を守り続けた。

すると、

スー…ハー…スー…ハー…

ブリフの耳に誰かの安らかな呼吸音が聞こえた。

いや、聞こえたというよりも右手を通して感じたといった方が正しい表現かもしれない。

それはまさしく、

「ブリーフィング・ソード」の呼吸…」

ブリフはその呼吸音に寄り添うように頭上でスカーフを回転させた。すると、その布切れはみるみる洗練されていき、ブリフが待ち望んでいた姿に変貌を遂げた。

「ほっ！？」

ブリフに向けて空振りを続けながらその一挙手一投足を見ていたセレネは今度こそ驚きの声を上げた。

「…こいつは俺の剣士の勘からの伝言だ…ご愁傷様…」

「ほっ！ ようやくお前も雑魚脱出してわけだ！ だがな、そんなフザけた剣で俺の剣と楯を打ち破れると思うなよ！」

先制攻撃はセレネだった。

“ライトブレイド”でブリフに斬りかかる。

しかし、それを事もなげに“ブリーフィング・ソード”で受け止めるブリフ。

「ほっ！ バカなっ！ この“ライトブレイド”に触れて溶けない物質などあるわけがっ！」

生まれて初めての経験に動揺を隠せないセレネに追い打ちをかけるようにブリフはセレネ自慢の光の剣を跳ね上げてしまった。

勢いよく宙を舞う“ライトブレイド”。

「さあて、ここで問題です…」

信じられない光景に茫然自失といった様子のセレネにクエッションタイムを設けるブリフ。

「剣士が剣を失うということは一体どういうことでしょうか？」
「ほっ！？」

セレネの解答を待たずしてブリフは攻撃を開始していた。

“ブリーフィング・ソード”を両手で握って体幹を回旋させている。

「黄色嵐剣”（イエローサイクロン）！！」

技名の発表と同時にねじった身体の反動を利用して一気にセレネに斬りかかった。

「ほっ！ こいつを突き通せるものか！ “ライトブロッカー03”！！」

ご自慢の光の盾で応戦するセレネだったが、“ブリーフィング・ソード”はその障壁をいとも簡単に真っ二つに割ると、セレネに驚愕の表情を浮かべる間も与えず、斬りつけた。

ドンガラガツシャーン！！

ブリフは吹き飛ばされたセレネを見届けると左肩を押さえながら、こんな言葉を残してその場を立ち去った。

「黄色嵐剣”（イエローサイクロン）ねえ…俺の身体、まだまだ色んなこと覚えててくれそうだな…」

村人の痛み

一方、ブリフvsセレネのバトルフィールドから少し離れた場所でヘルvsエオスの一戦も始まるうとしていた。

「お前を倒すにはこれがいいな……」

開戦前、ヘルは破壊された民家の跡地から何かを拾い上げて言った。

「はっ!?!」

エオスの馬鹿にしたようなリアクションも気にせずヘルは演説を続けた。

「こいつには家を破壊された村人の痛みや悲しみが詰まってる……こいつでお前にその痛みや悲しみを思い知らせてやんよ!」

ヘルはそう啖呵をきりながら拾い上げた物質を“ヘルニアン・スピアー”に装填した。

それを不思議そうに見つめていたエオスだったが、

「はっ! つくづく生意気な小僧だ! 正義のヒーローに憧れてるか知らねえが、世の中そんなに甘かねえんだよ!」

ヘルのスタンスを一蹴すると、まばゆい光を残して忽然と姿を消してしまった。

「!?!」

完全にエオスを見失ったヘルは辺りを見渡すも気配すら感じることができない。

「はっ！ 後ろだ！」

「ぐわっ！」

そして、案の定、背後に現れたエオスの蹴りをまともにくらってしまった。

「ゲホッ、ゲホッ……」

「はっ！ この程度のスピードと攻撃でこの有様とはな！ お前、戦闘は素人同然じゃねえか！ そんな実力でこの俺に勝とうとしていたとは、所詮は威勢だけの若造ってわけか！」

一撃でうづくまるヘルを見下すように言い放ったエオス。

「なあ、あんた…ゲホッ…ジャイアントキリングって言葉、知ってるか？」

「はっ！？」

エオスの馬鹿にしたようなリアクションもやっぱり気にせずヘルは演説を続けた。

「その様子だと知らねえみたいだな…ゲホッ…それならこの俺が教えてやんよ…“ヘルニアン・スピアー／ガラスモデル”！！」

「はっ！」

ヘルは突如として“ヘルニアン・スピアー”のスイッチを入れると、先ほど装填したガラスの槍が伸びてエオスを襲った。

が、

「はっ！ 攻撃も単調でまるで素人！ これなら目をつむってでも避けられそうだな！」

俊敏性に優れるエオスに攻撃が当たるはずなかった。

「はっ！ 本来ならお前程度の實力の奴にこの技を使うまでもないんだが、今回はお前のその生意気さに免じて見せてやろう！」

エオスはそう続けると、太陽に両手の掌を向けるいつものポーズを取った。

そして、ヘルに向けて“ソーラーブラスト”の構えを見せた。

「それを待つてたぜ！ “クリスタル・エッジ”！！」

「はっ！ これで終わりだ！ “ソーラーブラスト”！！」

光の波動がエオスの掌から発射されると同時。

いや、それよりも少し早くヘルはガラスモデルとなっている“ヘルニアン・スピア”をまっすぐエオスに向けて伸ばした。

「ぐあああああ！！！」

ヘルの伸ばしたガラスの槍を蹴散らして光の波動はヘルに到達。

辺りにはヘルの絶叫が鳴り響いた。

しかし、攻撃をくらったのはヘルだけではなかった。

「はっ！ なかなかやるじゃねえか！ 一杯食わされたぜ！」

そう悔しそうに言うエオスの右肩にはヘルが懸命に伸ばしたガラスの槍が突き刺さっていた。

「はっ！ さてはハトリの入れ知恵だな！？ 俺に“ソーラーブラスト”があることも、それを放つ時に一瞬だけ身動きがとれなくなることも全部最初から知っていたな！？」

エオスの問いかけにヘルもボロボロになりながら答えた。

「さあな…ゲホツゲホツ…俺の放った“クリスタル・ヘッジ”が光の波動を屈折させて威力を弱めたことも…ゲホツゲホツ…俺が首から下げていた手鏡が攻撃を受ける時に光を反射してさらに威力を弱めたことも…ゲホツゲホツ…全部偶然ですよ…」

満身創痍のヘルの足元にはハトリ園の子供たちからのお土産である手鏡の残骸が残っていた。

「はっ！ そして、あわよくばさっきの攻撃で俺の息の根も止めようとしてたつてわけか！ なるほど！ 確かに戦闘能力に関しては素人だが、戦略頭脳に関してはそれなりのモノを持つてるらしいな！」

ジャイアントキリング

「なるほど！ 確かに戦闘能力に関しては素人だが、戦略頭脳に関してはそれなりのモノを持つてるらしいな！」

「お誉めに与かって光栄だね…ゲホツゲホツ…これでジャイアントキリングに一步近づいたかな…」

エオスの感嘆に精一杯の皮肉で応えたブリフであったが、その言葉とは裏腹に体力は限界を迎えていた。

「はっ！ だが、どれだけ良い戦略を立てられようがそれを実践する戦闘能力がなければ、いわば宝の持ち腐れ！ いくら威力を弱めたとはいえこの俺の“ソーラーブラスト”を受けたんだ！ 戦闘素人にとっては十分致命傷だろ！？」

「さあな…ゲホツゲホツ…こんなすげえ攻撃くらったこともねえからな…ゲホツゲホツ…致命傷かどうかも分かんねえや…」

「はっ！ それなら俺が教えてやるよ！ これが真正正銘、お前の致命傷だ！ “ソーラーブラスト”！！」

再び空に手をかざすポーズから光の波動を放つまでの一連の儀式を反芻するエオス。

「“ヘルニアン・スピアー／リーフモデル”…“防光林”（グリーンカーテン）！！」

しかし、対するヘルもその動きをいち早く察知し素早くモデルチェンジすると、エオスのビーム発射直前に草の防護壁を自身の御前に完成させた。

そして、その草木の活躍によってエオスの“ソーラーブラスト”は

すべて光合成の材料として吸収されてしまったのである。

「はっ！？ “ソーラーブラスト”への対応策が2つもあったのか！？」

「さあな…ゲホツゲホツ…誰も2つだけとは言ってないぜ…」

「はっ！ いいだろう！ その言葉が本当だろうとハツタリだろうとそんなのは関係ない！ 今度はどんな防御策も通用しないぞ！

俺の本気の連続技を見せてやる！」

そう意気込んだエオスは三度、太陽光に両手を晒してソーラーパワーイン。

「ゲホツゲホツ…望むところだ！」

ボロボロになりながらも意気込んだヘルも身構えた。

「“光速移動”！！」

エオスはその言葉を置き土産にヘルの視界から消失した。戦闘素人のヘルに超高速で動きまわるエオスの姿が目で追えるはずもない。

「はっ！ これではどこから攻撃が飛んでくるか分からないからな！ 流星のお前もどうしようもあるまい！」

ヘルの周りのどこからエオスの得意げな声が聞こえる。

「はっ！ これで本当に最後だ！」

やはり今回もエオスが現れたのはヘルの背後だった。

「ソーラーブラスト」！！」

ドツゴオオオオオン

村中に響き渡るような轟音がとどろいた。

「はっ…バカな…」

絞り出すような甲高い声を発しているのはエオスである。

「ふっ…どこから攻撃が飛んでくるか分かんないって？…ゲホツゲホツ…そんなの関係ねえよ…“鏡張りの壁”^{ミラーコート}は全方位からの光の波動を跳ね返してくれるからな…」

そう自慢げに語るヘルの周りを鏡が防御壁のように取り囲んでいる。それは間違いなく“ヘルニアン・スピア”から生み出されたものだった。

「はっ…まさか…自分の“ソーラーブラスト”を浴びせられるとはな…ゲホツゲホツ…恐れ入ったよ…」

エオスは潔く敗者の弁を述べるとその場に力尽きた。

「へっ…見やがったか！ 実力で劣る者が知力や戦略を駆使して優れた者を打ち負かす…これがジャイアントキリングってやつだ！」

ヘルは清々しく勝者の弁を述べると“ヘルニアン・スピア”の取っ手部分を取り外して中に封入されていた鏡のカケラを眺めがら咳いた。

「せつかくのお土産をこんなにして悪かったな……」

そして、どこへ向かうつもりなのかヨロヨロと歩き始めた。が、3歩と進まないうちにフラリとバランスを崩してそのまま倒れ込み、その場でヘル意識は消失してしまったのだった。

自由に幸せな生活

さらに場面変わって、今度はニシ村の村長宅にフォーカスを合わせてみることにする。

「ダメだ！ このニシ村は絶対に帝国の支配下にはならんぞ！」

激昂している黒ぶち眼鏡の中年男性は当然ニシ村の村長である。そして、もう一人。

「村長さんよ…何度も言っているように支配下に置くのではありません…あくまで貧困にあえぐ村に救いの手を差し伸べようという我が君主の尊いお考えの下に協定を組むのです！」

ひと際派手なオレンジ戦闘服をまとって怪しいセールスをしているのはマンガティ帝国“七色守護隊”（レインボーガーディアンズ）。“オレンジ部隊”隊長、アポロ・ウディティールであった。

「何が協定だ！ 最近の帝国の領土拡大政策の手口、噂には聞いておるぞ！ 植民地化した村や町には毎月のノルマに沿ってナリウムとかいった謎の合金を帝国に納めさせてるらしいじゃないか！ 私の知っているマンガ王は決してそんな無茶苦茶な政策はとらん！ 貴様らマンガ王に一体何を吹き込んだ！？」

「何をおっしゃってるんだが私にはさっぱりですね…これもすべて誉れ高き我が君主のご直言…そこには一片の疑いの余地もございません…」

「私は信じないぞ！ 何と言われようが、絶対にこの書類にはサインせんからな！」

「困りましたねえ…もし仮にナリウムの上納のような交換条件があ

「たとしてもあなた方にとっても悪い条件ではないでしょう？ 毎月のノルマを達成するだけで村人全員の自由で幸せな生活が保障されるのですから…」

「そんなの自由でも幸せでもない!!」

交渉の席にて、激昂のボルテージがマックスまで高まった村長は机を叩いて立ち上がった。

「何かしらの圧力を感じながらの暮らしなど、例え生活が安定していても自由ではない！ 苦しくても自分の好きなことを好きなようにやっている方が断然自由だ！ 幸せだ！」

そんな村長の魂の演説を聞いたアポロは今までのネゴシエーターモードから一変。

ハトリとの決戦に臨んだ時のような悪人モードに突如として切り替わった。

「ふっふっふっ…お見事、あなたの言う通りだ…だがなあ、村長さんよ…理想と現実とは別物ですよ…あなたももう気付いてんだろ？」

あなたがこの契約書にサインするまでは村の破壊は続けられ、あなたの言う村人の自由で幸せな生活は破壊され続ける…つまりだ…今現在、村人から自由で幸せな生活を奪ってるのは…村長さん、あなた自身なんだよ！」

「くっ…ついに本性を現しよったか…」

ドーン!!

村長が唇を噛むと同時にどこかから爆音が村長宅まで響いてきた。

「ほら、言わんこつちやない…あなたの決断の遅さの所為でまた犠

性が増えちまった…さあ、こんな爆音が二度と聞こえないうちにこの契約書にサインを」

「くっ…」

村長の額を流れる汗は苦汁の選択を迫られていることを意味していた。

「村長！ その契約書にサインしてはいけません！」

そこへ一人の若者がドアを蹴散らして登場した。

驚愕の村長が叫んだその少年の名はもちろん、

「ハトリ！？」

「ハトリだと！？…なぜお前がここに…」

「僕がここにいる理由ですか？ そんなの決まってるじゃないですか…あなたを倒してこの侵略を止めるためです！」

流石のアポロもこの手で仕留めたハズのハトリが目の前に現れたことに驚きを隠せないようだったが、ハトリはそんなのお構いなしに決意表明を行った。

「ふっふっふっ…どういうからくりか知らねえが、どうやら詰めが甘かったようだな…だが、ハトリよ…いいのか、こんなところで油を売っていて？ お前がここで俺と立ち話してる間にもお前の愛するニシ村はエオスとセレネの手によって破壊されているんだぜ？」

今までの敵キャラのそれとは比べ物にならないくらい悪そうな笑みを浮かべながら皮肉たっぷりに言ったアポロに対して、ハトリは力強く言い放った。

「あいにくですがアポロさん…村の破壊ならもつじき止まりますよ

「！」

「!?!?」

第2ラウンド

「あいにくですがアポロさん…村の破壊ならもうじき止まりますよ！」

「ふっふっふっ…世迷言を…お前以外にこの村の誰があの二人と互角に渡り合えるというんだ？」

心底おかしいといった様子のアポロにいつそう力強くハトリは言った。

「きつと今頃…彼らがエオスさんとセレネさんを倒しているはずですよ！」

「彼ら？ 一体誰のことを言っているんだ!？」

「さあね…僕も名前は知りません…でもまあ、強いて言うなら僕の…同志つてとこですかね！」

ドッゴオオオオオン

ドンガラガツシャーン!!

ハトリが名も知らぬ二人の活躍に想いを馳せたと同時に遠くで轟音が鳴り響いた。

「ふっふっふっ…いいだろう…ハトリよ…この計画を完遂するにはどうやらもう一度お前をくたばらせる必要があるみたいだな！」

「ええ…是非そうしていただけると有難いですね…第2ラウンドといきましょう！」

「ハトリくん…あの男と知り合いなのかね？ これは一体どうい…?」

さくさくと話を進める二人に完全に置いてけぼりをくらった村長が

不安そうに尋ねた。

「村長：細かい話は全部終わってからです！ 後は僕に任せて、村長は近隣住民に避難を促して下さい！」

「何だかよく分からないが、君なら信用できる！ ハトリくん…この村を任せたまよ！」

「はい！」

村長はハトリの清々しい返答を聞き届けると頼もしそうに部屋を出ていった。

「ハトリよ…これで邪魔者はいなくなった…俺たちも太陽の下、思う存分やり合おうじゃねえか…」

「そうですね…天気は雲ひとつない快晴…最高のリベンジ日和ですよ！」

互いの利害が一致した結果、ハトリとアポロは屋外にて相まみえることとなった。

無言で対峙する二人の間には目には見えない火花が飛び散っており、そこには何とも言えない緊張感が漂っていた。

「ソーラーブラスト」！！

「ソーラーブラスト」！！

何の前触れもなかった。

二人は今までのように空に手をかざすことなく得意技の競演を行った。

ドッゴオオオオン！！

二筋の光の波動は中間地点で激しい激突を果たし、そのまま均衡し

て動かなくなった。
そして、物凄い爆音と共に2人のソーラーブラストは消えてしまったのだ。

「…さっきの“ソーラーブラスト” 対決はレトと戦った後で威力が弱まってましたからね、とでも言いたげだな…ハトリよ…」

先に舌戦を仕掛けてきたのはアポロだった。

「そちらこそ、これだけ晴れていればノーモーションでの“ソーラーブラスト” など朝飯前だ、とでも言いたげですね…」

ハトリも負けじとそれに応じ、二人は再び沈黙の虜となった。

「“光速移動”！」

「“光速移動”！」

またもや何に前触れもなかった。

二人はまばゆい光とかすかな残像だけを残して同時に姿をくらましたのだ。

ドン！ビシ！バシ！ドッカーン！

何やらパンチやキックの応酬などで戦っている効果音は聞こえてくるが、その詳細を目で追うことは誰にもできない。

数分後、肉眼での確認が可能になった二人は息を切らせながら互いの健闘を讃え合った。

「ハトリよ…ハアハア…ソーラーパワーのキャパシティだけではなく、スピードでも互角とはな…」

「ハアハア…互角には何の価値もありませんよ…“オレンジ部隊”を辞めて以来、ずっとあなたを超えることだけを目標にしてきましたから…それにあなたはまだ本気を出していない…そうでしょう?」

「何のことだ? ハトリよ…この俺様が互角だと誉めてやってるんだ…もつと素直に嬉しそうにしたらどうだ?」

「誤魔化さないで下さい…あなたが操れる“惑星大砲”（コズミックプラスト）は“ソーラープラスト”だけじゃない…ですよね?」

「!?!?」

コズミックブラスト

「あなたが操れる“惑星大砲”（コズミックブラスト）は“ソーラーブラスト”だけじゃない…ですよね？」

「ふっ…ハトリよ…お前も辿りついたか“惑星大砲”（コズミックブラスト）の領域に…」

「ええ、最初は驚きましたよ…身体に太陽以外の息吹が入り込んできたときはね…」

「流石だよ、ハトリ…レトやエオスは“ソーラーブラスト”ひとつ習得するだけで精一杯だったようだが、あんなのは“惑星大砲”（コズミックブラスト）の基本技…地球に降り注いでいるエネルギー量で言ったら、他の惑星の何億倍だ…そんなの会得できたところで何の自慢にもなりやしねえ！ “惑星大砲”（コズミックブラスト）の真骨頂はその先にある…」

アポロはそこまで言い終わると、“ソーラーブラスト”の準備期間のように両手を空に向けて伸ばした。

そして、かっと目を見開くと、その手をハトリ目掛けて伸展させ、叫んだ。

「“ムーンブラスト”！！」

が、アポロの手からはどんな光線も発せられない。

それでも、ハトリは何かを避けるようにヒラリと身をかわした。

すると、ハトリの背後の建物が突然ポコツと音を立てて凹んだではないか。

「ふっ…半信半疑ではあったが、ハトリよ…“ムーンブラスト”の性質を知っているとこのを見ると、信じるしかないようだな…」

「惑星大砲」（コスミックブラスト）は地球に降り注ぐ惑星のエネルギーを身体に溜め、それを掌から発散させる技…その性質は溜めた惑星エネルギーによって異なっている…そして、月の性質は“空気と圧力”…よって“ムーンブラスト”は空気砲となり、当たったものはクレーターができたように凹んでしまう…」

ハトリは得意げに解説を終えた。

「ハトリよ…その通りだ…ペーパーテストは満点だよ…だが、“惑星大砲”（コスミックブラスト）では座学よりも実践が重要…よつて…」

「ムーンブラスト”!!!」
「!!!」

唐突にアポロの台詞を遮って、ハトリは空気砲を放った。慌ててそれをかわすアポロとボコツと音を立てて凹む廃墟と化した民家。

「これで実技テストも満点くれますか？」

不敵な笑みを浮かべるハトリにアポロはやれやれといったカンジで応えた。

「ふつ…せつかちな教え子を持ったもんだ…だが、これではまだ満点はやれねえな…」

「どこか減点するところがありました？」

「いや…そうじゃないがな、ハトリよ…補習授業だ…」

そう言うと、アポロは再び例のポーズをとった。

ハトリもそれに倣う。

「マーズブラスト」！！
「ムーンブラスト」！！…なにっ!？」

前者のセリフはアポロのものであり、末尾にクエスションマークの付属された後者がハトリである。

ドツゴオオオオン！！

ハトリから放たれた無色透明の空気砲とアポロから放たれた正体不明の赤色ビームは二人の中間地点にて本日3度目の衝突を起こしたが、今回は均衡を保つどころかあっけなく勝負がついた。
すなわち、

「ぐわああ!!」

アポロの“マーズブラスト”はハトリの“ムーンブラスト”を飲み込み、そのままハトリ本人に直撃したのである。

50メートルほど吹き飛ばされ、そのまま動けなくなってしまったハトリの元に“光速移動”して来たアポロはハトリを見下ろしながら講義を開始した。

「ハトリよ…“惑星大砲”(コズミックブラスト)同士の衝突では、最弱の太陽を除いて必ず地球からの距離が遠い惑星の息吹、つまり“格”が上のブラストが勝つ…分かったかな？」

アポロがやってきたのに気付いたのかハトリはうつろな目を少し開けた。

「なるほど…勉強になりました…でも、ちょっと授業料高すぎませ

んかね…ゲホツゲホツ…」

全身に相当のダメージを負ったハトリのこれが精一杯のつよがりであつた。

「…火星の性質は“マグマ”…つまり“マーズブラスト”をくらえば全身に火傷と打撲を負って普通なら一発でくたばるハズ…なんだが、俺は同じ過ちを二度は繰り返さん…今度は最後の詰めまできっちり殺らせてもらつぞ…ハトリよ！」

超える

「今度は最後の詰めまできっちり殺らせてもらうぞ…ハトリよ！」

時計台での第1ラウンドの反省を踏まえ、最後のトドメまで抜かりなく刺すことを宣言したアポロは再び大空へ腕を伸ばした。

おそらく“マーズブラスト”を撃つてくると考えてほぼ間違いない。

「くっ…僕はあなたを超える…」

ハトリは最後の力を振り絞ってフラフラになりながらも立ち上がった。

満身創痍のファイティングポーズだ。

「ハトリよ…俺様の現時点での最高の攻撃を受けて、それでもなお、そんな目をしていられるとは流石は俺が見染めたことだけはある…」

アポロは元部下・ハトリへの称賛の言葉を並べながらマーズパワー補充中。

「ゲホツゲホツ…僕はあなたを…超えるんだ！」

第2ラウンド終了のゴングへのカウントダウンが始まってハトリの姿勢は変わらない。

しかし、その体力はとうに限界を超え、立っているだけでも奇跡的な状況であった。

身体中から炎が噴き出ているかのように熱い。

心臓の音がやけに大きく聞こえる。

すべての筋肉がもはや自分では制御できない。

それでも、

「ゲホツゲホツ…僕はあなたを…超えるんだ！」

確固たる信念に支えられた心だけは折れていなかった。

「ハトリよ…ついにそれしか言えなくなってしまったか…かわいそうに…そのお前の最後の命の灯を俺様が全力でもって吹き消してやるぜ！」

アポロはハトリを憐れむように両掌でハトリに照準を合わせた。

「僕はあなたを…超えるんだ！」

ハトリはここから先に自分が取った行動を自分でも覚えていないという。

ただこの時、心の奥から湧き出てくる感情を抑え切れずにハトリは悪戯な笑みを浮かべた。

「…急ににやけてどうした…ハトリよ？　とうとう本当にいかれちゃったらしいな…」

「黙ってて下さい…今掴みかけてるところなんです…未知の息吹をね…」

「…僕はあなたを…超える…」

このハトリの台詞は今までのどの台詞とも明らかにトーンが違った。そして、クライマックスはやってきた。

「じゃあな…我が優秀な部下、ハトリよ…“マーズブラスト”！！」

「これで僕は…あなたを超える！！」

アポロの赤いマグマとハトリの謎の緑ビーム。

2人の放った“惑星大砲”（コズミックブラスト）は爆音と共に激しくぶつかり合った。

その激突の結果は、“惑星大砲”（コズミックブラスト）の格の法則に忠実に則っていた。

「バカな…“ジュピターブラスト”だとっ！？」

そして、アポロの驚愕の声を最後に辺りは静寂に包まれた。

「…木星の性質は“毒とガス”ってのはどうやら本当らしいな…身体が自由がきかねえ…まさかお前が“ジュピターブラスト”を使いこなせるようになっていたとはな…」

会話の口火を切ったアポロはその場に倒れて動けない状態だ。

「使いこなしてなんかいませんよ…ゲホツゲホツ…ただ一瞬、未知の息吹を感じただけです…」

ただし、ハトリも同じようにその場に大の字になって転がっている。

「ふっ…火事場のクソ力つてやつか…それで“ムーン”から3段階も飛び級しちまうんだから大した才能だ…」

「これで本当にあなたを超えたことになるかは分かりませんが…ゲホツゲホツ…今度は素直に喜んでおくことにしますよ…」

壮絶な戦いを終えた二人はしばし長年のライバル同士のように語り合っていたが、

「…ところで、他の“惑星大砲”（コズミックブラスト）はどんな性質を持っているんです？」

ハトリのこの質問にアポロが答えることはなかった。

ハトリは喋らなくなったアポロを横目にひとこと呟くと、そのまま深い眠りについた。

「…自分で全部操ってみろってことですかね…」

超える（後書き）

ここまで読んで下さった方、ありがとうございます。あなたはエライ！とりあえずここでひと段落です。が、話はまだまだ続きます。というか、始まったばかりの予定です。色々と伏線を張ったつもりでいるので、続きが上がったらまた読んでいただけるとありがたいです。

クーデター

それから何日が経っただろう。

ヘルは窓から差し込む朝日と小鳥のさえずりに導かれて長い眠りからようやく目覚めた。

「ここは…?」

ヘルのリクエストにお答えして解説すると、ここはニシ村唯一の医療施設・ニシ村総合病院である。

「どうして俺はこんなところに…?」

病室らしき部屋のベッドから這い出したヘルのこの疑問には、物音を聞きつけてやってきたこの人物が答えてくれることとなった。

「あら！ やつと気がついたのね！ 5日間も眠ったまんまだったから本当に心配したのよ！」

「ミサさん…どうしてあなたがここに？」

「あら…ここまであなたたちを運んできてあげた恩を忘れたとは言わせないわよ！ 二人ともスゴイ傷だったんだから！」

「…二人とも??」

「ええ、二人とも…」

ヘルは私立孤児院ハトリ園の責任者ミサの指さす方に目をやった。そこには、大胆な寝相でベッドに横たわるブリフの姿があった。

「ハトリくんから聞いてるわ…あなたたちがあのオレンジの武装集団からこの村を守ってくれたんですってね！ 特にこのブリフくん

は一人で大勢の敵をやっつけてしまったらしいの…本当に感謝してるわ…やっぱり子供たちの目に狂いはなかったってことね！」

ミサは嬉しそうにそう言った。

ヘルも万事がうまくいったことを悟って満面の笑みを浮かべながら、

「そうだ！ あいつらにお礼言つといて下さいね！ この村を守れたのもこのお土産のお陰なんですから…」

ポケットから手鏡を取り出してから、それが粉々になっていたことに気がついた。

「まあ、随分と丁重に扱ってくれたみたいね…」

「ええ…大切な思い出の品ですから…」

この時、ヘルが冷や汗をかいていたことは言うまでもない。

そして、旗色が悪くなっていたことを感じ取ったヘルは、話題の変更を余儀なくされた。

「ところで、トミーはどうなったんです？」

「トミー？ ああ、ハトリくんのことね…あの子なら昨日、村のみなどと一緒に“マンガタイ帝国”に向かったわ！」

「なっ…」

「あの子のケガも相当な重傷だったんだけど…このままマンガ王の暴走を放っておくわけにはいかないって聞かなくて…」

「なるほど…ついに今回の諸悪の根源“マンガタイ帝国”に直接乗り込んでのクーデターってわけか！ 確かにあいつらしいっちゃあ、らしいな…」

「ええ…クールに見えて意外と熱血漢なトコもあるから…村のみんなもハトリくんに賛同して昨日、マンガ王政権の転覆を目指してこ

のニシ村から出陣して行っただわ…」

「そうですね…それならこいつが起き次第、俺たちもすぐ追いかけてクーデターに参加します！ どっちみちトミーには用もありますし！ ここを出発したのが昨日ならまだ間に合いますよね！？」

ヘルはブリフを横目で見やりながら再び闘志を漲らせている様子だった。

そして、それを見ていたミサはサラリとこんなことを言った。

「ええ、もちろん！ それじゃあ、今すぐに出発の準備をしなくちゃね！」

「いや、でもまだブリフが…」

「あの子ならもう随分と前に目覚めてるわ…十中八九、あたしたちの話に入るタイミングを探ってたんでしょうけど…嘘だと思ったらブリフくんの脇でもくすぐってみるといいわ…」

ミサの妙に説得力のある言葉通りにヘルがベッドに近づくと、ブリフは勢いよく掛け布団を跳ね上げて降参のひとことを述べた。

「ミサさん…あなたはエスパーですか！？」

「ふふ…長年、子供の相手をしてきたあたしに寝たフリなんて子供騙しが通用すると思うかしら？」

自信満々に胸を反らすミサであった。

こうしてヘルとブリフはハトリ率いる革命軍を追ってニシ村を出発することとなった。

「そういえばハトリくんから伝言があったの！…『村を救ってくれ

てありがとつ』『…ですって!」

別れ際、ミサからこのようなハトリの言葉を伝え聞いたヘルはフツと息を吐くと、

「なあ、ブリフ…今のは聞かなかったことにしないか?」

「そつだな…まだ礼を言われるのは早い…」

朝の光を全身に浴びながら決意を新たにするヘルとブリフであった。

サラ登場

「マーナ姫様、お待ち下さい！」

「イヤよ！ あんな所へはもう二度と戻らないわ！」

「何をおっしゃっているんですか！？ さあ、パンダ村の記念式典が2時間後に迫っております！ 姫様以外に統治初日スピーチを一体誰がなさるといいますか！？」

「知らないわ！ あたしの名前はサラ！ マーナ姫様じゃないって何度言ったら分かるの！？」

ヘルとブリフがニシ村を出発した翌日のことだった。

“ヘルニアン・ストーン”の反応は2つめのアイテム、ひいてはハトリがそう遠くない距離に存在していることを示唆していたが、どうやらのっぴきならない事態が二人の目の前で展開されているようだった。

「なあ、ブリフ…大人になっても鬼ごっこって楽しめるもんかねえ？」

「さあな…少なくともあの二人は楽しんじゃいねえみたいけどな…」

視界の彼方からどんどん近付いてくるその大捕り物を二人はただただ傍観していた。

「何を寝ぼけたことを！？ そんなことをして、アンナ・クリステイ！ 又様もお冠ですよ！」

「あたしは絶対に捕まらないわ！ このまま逃げ切ってやるんだから！」

追いかけているのは見覚えのある戦闘服のレッドバージョンを羽織ったイカつい野郎で、追われているのは煌びやかなピンクのドレスを纏った美少女である。

「なあ、ブリフ…お前なら今回はどんな仮説を立てる？」

美女と野獣の追いかけてこの詳細がようやく肉眼で捉えられた頃、いつものようにヘルがブリフに話を振った。
が、その時ヘルの目に飛び込んできたのは驚くべき行動を取っているブリフの姿だった。

「ブリーフィングソード召喚」！！
「んなっ!？」

ヘルの感嘆の声にも構わず、ブリフの黄色スカーフはみるみる鋭さを増していった。

そして、ヘルが静止の言葉を投げかけようとした時にはすでにブリフはトップスピードで走り出していた。

「ラブストーリーは突然に」斬り！！
「ぐわっ!?!」

前者はブリフの攻撃時の妄言であり、後者は野獣男の断末魔である。文字通りの秒殺劇だった。

「あ、ありがとうございます！ ホントにあなたは命の恩人です！」

最初は目の前で起きた出来事が信じられないといった面持ちだった美少女も自分にとって事態が好転したことを確信すると、ブリフに対して感謝の言葉を並べた。

「なあに…人として当たり前のことをしたまでよ…」

明らかにブリフの様子がおかしい。

いつもよりカツコつきたい成分が500%増。

その原因は先ほどの痛い技名に集約されていると考えてほぼ間違いなさそうだ。

「まあ、ステキ！ 正義感が強いよね！ あたしの名前はサラ！
あなたは？」

「ふっ、名乗るほどの者でもないが…人呼んで“黄剣のブリフ”…
でも、普段は気軽に“ブリちゃん”って呼んでねっ！」

「あはははっ！ 面白い人！ よろしくね、ブリちゃん！」

前言撤回。

カツコつきたい成分は5000%増といっても過言ではなからう。

「なあ、ブリフ…お前どこかでネジでも一本落っことしてきたか？」

遅れてやってきたヘルがその様子を見ながら呆れ顔で言っている。

「ヘル…俺は至って正常だよ…困っている女の子がいたら助ける…」

男として当然だろ？」

「やれやれ…お前がここまで女にだらしかなかったとはな…」

どこまでもイキるブリフと呆れるヘルであった。

「あおう…こちらの方は？」

しばらく二人のやり取りをやや隠れ気味に眺めていたサラが久しぶ

りに口を開いた。

「ああ、こいつは俺の相棒のヘルだ！ 気軽に“ヘルぼん”って呼んでやってくれ！」

「初めまして！ あたしサラっっています！ よろしくね、ヘルぼん！」

「…恥ずかしいからやめてくれ…」

サラの屈託のない笑顔に少し心が揺らいだヘルだったが、何とか気を取り直すと核心をつく質問をサラに突き付けることができた。

「嫌だったら話してくれなくていいんだけどさ…さっきはどうしてあんな恐そうな奴に追いかけられてたわけ？」

すると、サラは急に真剣な顔つきになり、そして以下のような衝撃告白を行った。

「実はあたし…誘拐されたんです！」

「!?!」

シッターカンパニー

「実はあたし…誘拐されたんです！」

「おいおい…また随分と物騒な犯罪名が出てきたな…」

静かに驚きを表明するヘルとは対照的に必要以上に騒ぎ立てているのはプリフである。

「サラちゃんを誘拐だとお！？ 犯人はどのどいつだ！？ 俺が懲らしめてやる！」

「それが…“シッターカンパニー”という国際テロ組織なの！」

本日2度目の衝撃告白にも二人のリアクションに大きな変化はなかった。

「テロ組織って…また一段と物騒な犯罪名が出てきたな…」

「国際テロ組織だと何だろうと構うもんか！ 俺が懲らしめてやる！」

「でも、そんな裏の組織がどうしてサラちゃんを？」

「それが…どうやらあたしがマンガティ帝国のマーナ姫様に似ているかららしいの…」

「確かにサラちゃんはお姫様みたいに可愛いもんな…」

「??…お姫様とそっくりなことと誘拐が結びつかないんだけど…?…」

3度目の衝撃告白に変な方向に合点のいったプリフと頭の整理がでないヘルであった。

「そうよね…やっぱり最初から話さなくちゃ…」

サラは深呼吸すると、絞り出すようにゆっくりと話し始めた。

「実はね…今“マンガテイ帝国”はあたしを誘拐した“シッターカンパニー”に乗っ取られているの！」

「！？…マンガ王が無茶苦茶な政治を行って無理矢理領土を広げようとしているって話は聞いたけど…」

ニシ村での一件を思い出すヘル。

「そのことは知っているのね…なら話は早いわ！ 現在“マンガテイ帝国”の政権を握っているマンガ王は偽者…マンガ王になりすましている “シッターカンパニー”のボス・ナリックなの！」

4度目の衝撃告白にはついに二人ともリアクションがとれなかった。

「…彼は世界的にも有名な科学者で、独自の技術力を駆使して様々な凶悪兵器を造ってきたわ…そして、厄介なのは“シッターカンパニー”のナンバー2である魔女・アンナ・クリスティーヌのマインドコントロール…」

「今度は魔女とマインドコントロールかよ…打って変わって都市伝説みたいな単語出てきたな…」

ヘルの疑わしそうな声色にサラは語気を強めた。

「いいえ、都市伝説ではないわ！ 魔女は実在する…彼女によって政府の重役すべてがマンガ王になりすましたナリックの傀儡と化して、国民の知らないところで民主主義とはもはや名ばかりの独裁政治が続いているの！」

サラの迫力に気圧されて何も言えないヘルとブリフだったが、演説はなおも続いた。

「…当初はマンガ王も彼女の魔法でマインドコントロールする予定だったみたいんだけど、なぜか王家の血を引くマンガ王・パティ王妃・マーナ姫の3人は魔法にはかからなかったらしいの！それで仕方なくその3人を幽閉してナリックがマンガ王になりすましてパティ王妃は失踪したということにしたの…」

「そして、サラちゃんを誘拐してマーナ姫の代わりになるようにマインドコントロールしたと…」

ヘルがようやくいつもの調子を取り戻し、結論を代弁した。

「…ってことは今もサラちゃんはその魔女にマインドコントロールされてるってことか!？」

ブリフもようやく的を得た質問ができる精神状態になったようだ。

「いえ…マインドコントロールの効力には時間制限があつて、普段はその前にアンナ・クリスティーヌにかけ直されるんだけど、今日はある人たちのお陰で効力切れまでアンナ・クリスティーヌから身を隠すことができたの!」

「じゃあ、今のサラちゃんは真正銘のサラちゃんなんだね!？」

「ええ！でも、マインドコントロールされている間の記憶のちやんと残ってて…ものすごく変なカンジ…」

ブリフの質問にサラが切なそうに答えた後、しばらく沈黙が続いた。こういう時に話題を変えるのはいつもヘルの役目である。

「ところで、“シッターカンパニー”は“マンガテイ帝国”を乗っ

取って一体何をしようとしてるんだ!？」

「そう、それが問題なの！ 実は……“シッターカンパニー”は新しい凶悪な破壊兵器を造ろうとしているの！」

「!？」

真の目的

「実は…“シッターカンパニー”は新しい凶悪な破壊兵器を造ろうとしているの！」

「破壊兵器って…もうこれ以上ないくらいに物騒な名詞が出てきたな…」

もう数えるのも面倒なくらいに衝撃告白のオンパレードだが、サラはまた独白に入った。

「…その兵器の名は”ザメシード”！ナリウムとアルミニウムの合金、ナリニウムからナリック独自の技術によって造られる史上最悪の破壊兵器…ナリックはこの“ザメシード”を引つ提げて世界を征服するつもりなの…」

「世界征服って…悪役として分かりやす過ぎる立ち位置だな…」

ヘルのツイートを挟んでサラの独白は後半戦に突入する。

「…ナリックの操るマンガティ帝国の領土拡大政策も傘下に治めた町村にナリニウムを造らせるため…彼らは国防軍を再編成して新たに“七色守護隊”（レインボーガーディアンズ）を組織、7つある部隊のそれぞれの長に“シッターカンパニー”の幹部を配置して力づくでの領土拡大を推し進めているの…」

ここまで話し終わるとサラは大きく息を吐いた。

「だいたいのあらましは分かったよ…でも、そんな急激な国政の變化に国民たちが気付かないなんて有り得ないと思うんだけど…」

ここからはヘルによる質疑応答タイムである。

「ええ…でも、マンガティ国民はみな18年前の内乱を鎮めた英雄・マンガ王の政策に疑念ひとつ感じていないのが現状…それほど“シッターカンパニー”の情報操作は徹底されてるってことね…もちろん“ザメシード”のことは国民の誰も知らない…領土拡大政策は貧困にあえぐ町村を援助するという形で行っていて、不都合な情報が国民の耳に入らないように外部からのあらゆる通信手段に対して秘密裏に規制を設けているの…」

「なるほど…そうやって国民を騙して利用し続けてるってわけか…」
「ああ…トミーの村でのことは氷山の一角でしかなかったってわけだ…」

サラの返答に納得のヘル&プリフであったが、ヘルの頭にふとある心配事が浮かんだ。

「なあ、プリフ…今回の件の諸悪の根源はその“シッターカンパニー”とかいう謎組織だよな？」

「ああ…今の話を聞いた奴なら100人中100人がそう思うだろうな…」

「だよな…だとしたらよお、“マンガティ帝国”自体に怒りの矛先を向けるのはお門違いってことだよな？」

「まあ、そういうことになるな…でも、それが…」

どうした、と続けようとしたプリフの脳裏にある人物の顔が不意に浮かび、無意識にその名前を叫んだ。

「トミー！ 確かあいつクーデターとか言って“マンガティ帝国”に攻め入るうとしてるんだよな！」

「ああ…そうなれば何も知らないマンガティ国民との衝突は必至…」

「それじゃあ、無駄な血が流れるだけだ！」

徐々にヒートアップしていく二人の少年の正義感は最後に以下のよ
うな結論で収束を迎えた。

「トミーを止めなきゃー！」

「一体どうなさったんですか、急に血相を変えて…？」

「サラちゃん、実はね…！」

その様子を目を見開いて静観していたサラに対してヘルは掻い摘ん
で事情を説明した。

「それはいけない！　すぐにそのトミーという方たちに真実を話し
てクーデターを止めなくてはっ！」

すべてを聞き終えたサラはすぐさまヘルたちの考えに賛同の意を表
明した。

「流石はサラちゃん！　話に分かるぜ！」

「ああ、トミーのところへ急ごう！」

ヘルたちがハトリの元への移動スピードをマックスまで引き上げよ
うと決意したその時、

クピ~~~~~

遠く空から巨大な赤い飛行物体が甲高い鳴き声とともに物凄いス
ピードで近付いてきた。

そして、

「キヤ！」

あっという間の出来事だった。

サラの悲鳴がヘルとブリフの耳に届いた時にはすでにサラの身体は謎の飛行物体に連れ去られ、大空を舞っていたのである。

「サラちゃん！？」

消えてもらわねばなるまい

「しまった！ 変な鳥にサラちゃんを連れていかれた！」

「ああ…サラちゃん！」

ヘル焦りの声とブリフの落胆の音が発せられた時には、赤い飛行物体は遙か彼方の空を飛んでおり、肉眼ではほとんど赤い点にしか見えない状況になっていた。

「何てこった！ 俺のサラちゃんがっ！ 俺のサラちゃんがっ！」

「落ち着け、ブリフ！ そして、サラちゃんはお前の所有物ではない！」

慌てふためくブリフと割合と冷静なヘル。

「がっはっはっはっ！ 行け、火の鳥ピーちゃん！ パンダ村まで
マーナ姫をしっかりと運ぶんだぞ！ がっはっはっはっ！」

そこへ今度は豪快な笑い声を響かせながら見覚えのある赤戦闘服に身を包んだしゃくれ大男が近付いてきた。

「誰だお前は！？ 俺のサラちゃんを返せっ！」

我を失いつつあるブリフが先頭に立ってその犯人らしき大男に対峙したが、返答をよこしたのはその後
るに控えていた赤色戦闘服の4人組であった。

「お前とは無礼なっ！」

と、まずしゃがれた声で口火を切ったのは長身のチャラ男であった。

「ここにおはすお方をどなたとこころえる!？」

続いてクールに言い放ったのは、ビジュアル系バンドのボーカルのような風貌の小柄なサングラス男である。

「かのマンガテイ帝国“七色守護隊”（レインボーガーディアンズ）、赤色隊長！ 燃える闘魂ことアントニオ・ピーター様にあらせられるぞ！」

そして、3番手でリーダーの紹介を行ったのが、両肘と膝にサポーターをつけた優男で、

「ええ〜い、頭が高〜い！ ひかえよろ〜い！」

と、締めくくったのが緑のバンダナ&リュックサックといういかにもなヲタクルックに扮した青年である。

以上のようにどこかで聞いた挨拶をよこしてきた謎の4人組は達成感に満ち溢れた表情で何かを期待するようにヘルとブリフを見ていが、リアクションがないので仕方なく何事もなかったかのように話を続けた。

「へっ…こんなこともあるつかと姫に発信機を取り付けといて正解だったぜ！」

耳に開けたピアスを光らせながらかすれた声で長身チャラ男が言っている。

「発信機だとお!? お前らがサラちゃんを誘拐した犯人だな! サラちゃんをどこへやった!？」

「サラちゃん??? ああ、マーナ姫のことか… 姫はこれから大事な御公務を控えているのだ! 公務に穴を開けるわけにはいかないのですね…」

興奮するブリフに対して優男が落ち着いた対応を見せる。

「それにしてもマーナ姫タンは萌え萌えですよねえ… あのキューटना容姿といいプリティな声といい… ねえ、フリード氏?」

「……………」

眼鏡のつるをクイツと上げながらヲタク青年が問いかけるが、V系グラサン男は無言を貫いている。

「ねえ、デインゴ氏?」

「アベディ… 二度とその気色悪い喋り方で俺に話しかけるな! 吐き気がする!」

ヲタク青年の呼び掛けに不良風チャラ男が罵り、

「ねえ、プツチ氏?」

「お前なあ… そういう個人的な感情は持つなって何度も言ってるだろう! 俺たち赤色部隊は任務で姫の護衛にあたってること忘れな! ああ、胸糞悪い!」

優男は説教をたれたが、

「がっはっはっは! こりゃ、ケツサクだ!」

リーダー格らしきアントニオ・ピーターなる大男だけは豪快に笑っているのみであった。

こんな訳の分からない5人組だが、その正体はというと、

「お前らだな：“マンガテイ帝国”を乗っ取って破壊兵器を造ろうとしている“シッターカンパニー”とかいう謎の組織は？”

というヘルの発言が的を得ていたと考えてほぼ間違いないだろう。それが証拠に赤色5人組は今までとは打って変わって急に真面目な表情に変わった。

「なるほど…偽マーナ姫様にすべて聞いたってわけか…胸糞悪い！」

「がっはっはっは！知られてしまっっては仕方がない！残念だが

お前らには消えてもらわねばなるまいな！」

「！！」

SSA

「残念だがお前らには消えてもらわねばなるまいな！ 行け、赤色1番隊！」

「！！！」

アントニオ・ピーターの豪快な号令によって赤色戦闘服をまとった4人が一斉にヘルとブリフに襲いかかった。

「4対2だとよ…問題は？」

「ねえな…」

対するヘルとブリフもそれぞれのオリジナル武器に手を掛けて戦闘態勢突入。

そこへ、

「待てえ！」

絶妙のタイミングで割りこんできたのは、またしても赤い戦闘服の5人組であった。

「サキクー！！」

「ヨー・ロビンソン！！」

「バボ・クリス！！」

「シャ・シャル！！」

「アル・ヴォーク！！」

「5人合わせて…サキク・スポーツ・アカデミー！！ 略してSSA」

ご丁寧メンバーそれぞれの自己紹介と略称まで名乗って登場した謎の5人組と先行してやってきていたアントニオ・ピーター率いる5人組はどうやら顔なじみだったようで、

「がっはっはっは！ 2番隊じゃないか！ ちょうどいい…こいつらを始末した後でお前らにも落とし前をつけてもらおうと思っただとところだ！ 何か言い訳はあるか？」

「まさか…あたいは自分のしたことに後悔なんてこれっぽっちもしてないよ！ ただひとつ後悔してるとすれば、それはこの赤色部隊に入ったこと自体だね！」

ピーターの珍しくシリアスな口調に、先ほどの登場シーンでサキクと名乗っていたリーダーらしきショートカットの女は心中に静かな怒りを宿したように答え、さらに続けた。

「あたいは今まで全身全霊をかけてマーナ姫様の身辺警護をやってきたつもりだ…それが国民の平和な暮らしのためになると信じて…でも、それは違った！ あんたらはあたいらをずっと騙してたんだ！ マーナ姫のことも破壊兵器のことも！ 知らないとは言わせないよ！」

「がっはっはっは！ お前たちにもバレていたとはな…そういうことならお前たちが姫を逃がしたのも納得だ！ サキク…お前はそういう女だからな！ がっはっはっは！」

「誤魔化そうともしないとは…いつそ清々しいね！ それにしてもあんたらがあの子に発信機を付けてたとはねえ…あんたの火の鳥があの子の逃げた方角へ飛んで行ったときはまさかとは思っただけ…やっぱりあんたらを倒さないとあの子を自由にすることもあの計画を阻止することもできないみたいだね！」

「がっはっはっは！ それはつまりそのどちらも不可能だということだ！ がっはっはっは！」

このようなサククとピーターのやり取りとじつと聞いていたヘルだったが、とうとうシビレを切らして口を挟んだ。

「だいたいの事情は分かった…サククさん、どうやらあなたは俺たちの同志みたいだ！」

「同志だって？ キミたちは一体…？」

突然の申し出に不信感を募らせるサククだったが、その質問にブリフはフライング気味に力強く答えた。

「少女を王女代理という鎖から解き放ち、破壊兵器の完成を阻止する者です…！」

初めは面食らっていたサククだったが、ブリフの真剣なまなざしにフツと笑みをこぼすと、

「なるほどね！ そいつは同志に違いない！ 分かったよ！ ここはあたいらに任せてキミたちはあの子を助けに行つてやつてくれ！ この道を少し東に行くとパンダ村という小さな村がある！ あの子はそこで王女としてスピーチをしているハズだよ！」

と、その場を請け負った。

その言葉を聞いたヘルとブリフは、

「任されたぜ！」

ふたつ返事でパンダ村へと進路をとった。

「そう簡単に逃がすかよ！ “ファイアーボール”… “アタック”

「!!」

その動きを見たブッチこと優男は掌からいきなり火の球を発現させ、それを頭上に放り投げ、落ちてきたところをバレーのアタックの要領でヘルとブリフに向かって打ち込んだではないか。

「“ブロツク”!!」

すると、先ほどの登場シーンでバボ・クリスと名乗ったまん丸の目をした女が炎アタックの弾道上に現れ、両手で弾き返した。

「ここはあたしらが任されてるんだからあ!!」

クリスのこの言葉を出発の挨拶として、ヘルとブリフはサラを救うべくパンダ村へと向かった。

因縁の対決

「がっはっはっは！ こうなっちゃってしまっちは仕方がない！ 向こうにも我々の幹部がたくさんいる！ そいつらがきつと何とかしてくれるだろう！ がっはっはっは！」

この不測の事態にもピーターは相変わらずの調子で高笑いをしていく。

「まったく、この人には緊張感とか責任感っていう概念はねえのかよ！」

「デインゴ！ 仮にも“七色守護隊”（レインボーガーディアンズ）の隊長様にそんな口きくなよな、胸糞悪い！ それよりも俺たちにはやらかなきゃなんねえことがあるだろうよ！？」

「マーナ姫タンの萌えポイントについて語り合うことですね、プッチ氏！？」

「……………」

イライラがピークに達しつつあるデインゴをなだめるプッチと見当違いのことをほざくアベディと無言のフリードであったが、それぞれに因縁めいた視線を送る人物がいた。

「デインゴ…まさかお前がそんな悪事に加担してたとはな…永遠のライバルとして俺は恥ずかしいぞ！」

まずチャラ男ことデインゴに話し掛けているのは、先の登場シーンにてシャ・シャルと名乗っていたサッカー少年スタイルの短髪である。

「お前みたいなヲタク野郎にマーナ姫：いや、サラちゃんは相応しくない！ サラちゃんみたいな清楚で可憐な美少女には俺みたいな誠実な男こそが相応しい！」

次にヲタク青年ことアベデイにダミ声で宣戦布告しているのは自称ヨー・ヨビンソンの細身男である。

「師匠：オラは師匠さに憧れでこの“七色守護隊”（レインボーガードイアンズ）さに入隊しただだ：師匠さはこの計画のごとさ知っただんですが？ 知らながつだと言っでぐだせえ！」

そして、涙声で訛りながらV系ポーカー男ことフリードを問い詰めているのは、アル・ヴォークと名乗る頬を軽く桃色に染めたあどけなさの残る顔立ちの小太り男である。

「プッチ…」

最後にプッチこと優男の名前を切なそうにつぶやいたのはまん丸おめめのバボ・クリスである。

「はあ！？ てめえ、しゃしゃってんじゃねえよ！ 誰の許可もらって俺の永遠のライバル名乗ってんだよ！」

「何をおっしゃりますか、ロビンソン氏！ 藻前より私の方が100倍マーナ姫タンを愛でておりますのに！」

「……………」

「クリス…」

それぞれの接触到それぞれの態度で対応するピーター率いる“七色守護隊”（レインボーガードイアンズ）1番隊の面々。その様子を見ていたピーターは相変わらぬ大らかさで、

「がっはっはっは！ こりゃいい具合に因縁めいてるな！ 対戦相手が分かりやすくいい！ がっはっはっは！」

「そうだねえ！ あたいもあなたにはこれ以上ないくらいに因縁を感じてるよ！」

「がっはっはっは！ 先刻、“オレンジ部隊”の隊長アポロが元部下の男に倒されたと聞いたが…俺はその二の舞にはならんぞ！ がっはっはっは！」

～アント

ニオ・ピーター vs サキク

「俺には才能がない…俺はいつもお前の才能に嫉妬していた！ でも…俺は努力することですっかりお前の天性の才能を超えられると信じている！」

「はあ！？ 何しやしゃってカツコつけてんだよ！？ てめえがいから努力したところで俺に勝てるわけねえだろうが！」

～デイ

ンゴ vs シャ・シャル

「そういう汚らわしい目でサラちゃんを見るなっていつも言ってるだろ！ 今日という今日は絶対に決着を着けてやるからな！」

「望むところですよ！ 藻前にはもう何本も死亡フラグが立っております！ マーナ姫タンにつく悪い虫は私が排除してみせますぞ！」

～アベ

デイ vs ヨー・ロビンソン

「師匠…何も言ってくれないんでずだね…分かりませだ…オラだちはオラだぢらじぐマイグさで語り合っべきでずだね！ 手加減はないでくださいよ、師匠！」

「……………」

「マー

ク・フリードvsアル・ヴォーク」

「久しぶりだね、プッチ：あの日あたしが言った言葉覚えてる？」

「…『あたしより弱い男は嫌い』：忘れれるわけねえだろ：俺は今日限りでお前より弱い男を卒業する！」

「プッ

チvsバボ・クリス」

かくして“ザメシード”計画とそれぞれの因縁が賭かった“赤色部隊”1番隊vs2番隊、5番勝負の戦いの火ぶたが切って落とされたのである。

ヒート

「ファイヤーボール”!!!」

サキクvsアントニオ・ピーターの戦いはサキクの先制攻撃から始まった。

先ほどブッチがヘルとブリフに向けて炎のアタックを放ったときと同様に掌からドッジボール大の灼熱ボールを生み出し、それをダイナミックなフォームで敵であるピーターに投げ込んだのである。

「はあ!!!」

しかし、ピーターは気合いの掛け声とともにそれをいとも簡単に弾いてしまった。

「がっはっはっは!!! 秋の新鮮なサンマをちょうどいい焼加減にするのに必要な火力を1ヒートとすると今は750ヒートか…一投目でこの水準とは腕を上げたな、サキク! がっはっはっは!!!」

「今のはほんの挨拶代わりだよ!」

「がっはっはっはっ! いい挨拶ができるようになったな! では、俺からも挨拶させてもらおうか…」

そう言うとピーターは目をつぶって精神を集中し始めた。
そして、

「元気ですか〜!? 元気があれば何でもできる! 行くぞ〜!
1・2・3・ダアーツ!!!!」

どこかで聞いたようなフレーズとともにピーターは口から炎を噴き

サキクから放たれたすべての赤球は明後日の方向へ向かっていたが、

「…あたいをただの猪突猛進女だと思ってるよと痛い目にあつよ！」

サキクのドヤ顔と同時に見当違いな方向を彷徨っていた炎球が突如方向転換。

ピーター直撃コースをとつたではないか。

「なにっ!?!」

ピーターは目前での急激な進路変更に対応しきれず、その赤球の餌食となった。

「がっはっはっは！ まさかお前が変化球をマスターしていたとはなあ、サキク！ いや、アツパレだよ！ がっはっはっは！」

「くっ…今のも合計で2000ヒートは超えていたハズ…なのにその余裕とは恐れ入ったねえ…お陰であたいの闘争心にもいい具合に火がついてきたよ！」

自身の渾身の攻撃をくらつてもなおケロッとしているピーターに呆れつつも嬉しそうなサキク。

「がっはっはっは！ それは俺も同じこと！ ここまで俺を熱くさせてくれる相手は久しぶりだ！ がっはっはっは！」

対するピーターの心もいい具合に燃え上がってきた。そこへ、

クピ~~~~~

遠く空から聞き覚えのある甲高い鳴き声を辺りに轟かせながら、10メートルはあるうかという巨大な赤い鳥がピーターの目の前に着陸した。

よく見ると羽の一本一本が炎で出来ているかのように燃え上がっている。

「がっはっはっは！　ピーちゃん、マーナ姫様をの運搬ご苦労だった！」

「また厄介なのが帰って来たねえ……」

「がっはっはっは！　俺の本来の戦闘スタイルはこのピーちゃんを操るものだ！　言ってみれば今までの戦いは単なる序章！　本当の勝負はこれからってことだ！　がっはっはっは！」

愛鳥である火の鳥ピーちゃんの帰還で俄然優勢となったピーターの高笑いを背中で聞きながら、サキクは燃え上がる闘志を瞳に宿して力強く宣言した。

「……あんたがもっと強くなるかと思うと……ますます燃えるねえ！」

努力vs才能

サキクvsピーターの熱戦の真裏で他の4つの因縁の対決もそれぞれ場所で行われていた。

「お前とこうしてタイマンでやり合うのも久しぶりだな……」

しやがみ込んでスパイクの紐を結んでいるのは2番隊のシャ・シャルである。

「ああ…ガキン頃以来だから10年ぶりくれえか……」

ガムを噛みながら髪型をセットし直しているのは1番隊のデインゴである。

「あの頃は毎日、日が暮れるまで1対1やってたよな…互角だったからなかなか決着がつかなかったけ……」

「はあ！？ あん時はずっとめえのボロ負けだっただろうが！

日が暮れちまつたのも、めえが勝ち逃げだとかしゃしゃってなかなか俺を帰さなかったからだろうがよお！」

「へ？ そうだったっけ？」

「つつたく…何年経つてもめえのそのウザってえ性格は変わんねえなあ！ あん時も散々言っちゃったが、もう一度言っぞ！ いくらめえが努力したところで天性の才能を持つ俺には絶対勝てねえんだよ！」

「うるせえ！ 練習は嘘つかねえ！ 勝つって言ったら勝つんだよ

！ この“赤色部隊”で再会できたのも何かの縁！ 行くぞ！」

すると、シャルルの右足からサッカーボール大の炎球が現れた。

そして、

「スリーエス」！！」

そのファイアーボールに対して思い切り右足を振りぬいた。

「はあ！？ 何だ、そのヘナチヨコシュートは！？ 相変わらずしやしゃり出るだけで実力の伴わねえ奴だな！」

デインゴは気だるそうにシュート態勢に入ると、シャルルの放った炎球をそのまま右足で撃ち返し、見事シャルルに命中させてしまった。

「へっ… “フイネア心炎炉” も満足に操れてりやしねえじゃねえか！」

「くそっ… 毎日生懸命練習してんのになあ…」

「はあ！？ 毎日練習して500ヒートかよ！ 俺が初めて“フイネア心炎炉”を使った時ですら700ヒートだったつてのによお！ これじやあ、ガキン頃と全く同じ結果になるのが見え見えだな！」

「くそっ！ まだまだ！ “スリーエス”！！」

再び赤の弾丸シュートを放つシャルル。

しかし、

「はあ！？ 550ヒートかよ！ こんなもん左足で十分だ！」

デインゴは敢えて非利き足での跳ね返しを選択。
見事シャルルに命中。

「くそっ！ 努力は絶対に天性の才能をも凌駕するんだ！ “スリーエス”！！」

「はあ！？ 600ヒートくれえでしゃしゃってんじゃねえよ！
努力なんぞ俺とてめえの生れつきの決定的な差を少し縮めるだけに
すぎねえ！」

前回同様に左足で跳ね返し、シャルルにヒットさせるディンゴ。

「くそつ…努力でその決定的な差を少しでも縮められるんだとした
らその積み重ねで…俺はお前に勝つことができる！“スリーエス”
！！」

「てめえも相変わらずしつけえな！ 650ヒートごときでしゃし
やんなつってんだらうがっ！」

その後の流れは前回と同様、スリーエス 跳ね返す シャールルにヒ
ットというデジャヴのような展開がしばらく続いた。
が、状況の変化は突然訪れた。

「くそつ…成長曲線って知ってるか、ディンゴ？ “スリーエス”
！！」

「1000ヒート！？ 知らねえな…俺には縁もゆかりもねえ単語
だ！」

まず、ここで初めてディンゴは右足を使う。

「ぐはっ…人が何かを習得しようとする時、その成長のスピードは
必ずしも一定じゃないんだ！“スリーエス”！！」

「1200ヒート！？ だからどうした！？ 何が言いてえ！？」

次に、ここで初めてディンゴの弾いた炎のサッカーボールがシャ
ールを捉えなかった。

そして、

「…つまり不断の努力を積み重ねていくと必ずどこかで…“スリー
エス”…！」

「なにっ！？…まさか…2000ヒートだとお！？」

「…急激に成長する時がくるのさ！ それまでの停滞が嘘だったか
のようになー！」

とうとうここで、デインゴはシャルルの弾丸シユートを弾き返すこ
とができなかったのである。

燃えvs萌え

「ロビンソン氏：藻前とこうしてマーナ姫タンを賭けて勝負するの
もこれで最後になりそうですな…」

こんなヲタ口調を操るのは1番隊のアベディ以外の何者でもない。

「ああ：お前の下らねえ挑発に乗って随分と無駄な時間を過ごしち
まったな！」

こんなダミ声を操るのは2番隊のヨー・ロビンソンを置いて他には
いない。

「漏れの記憶が正しければ今までの対戦成績はまったくの五分：こ
れが真正正銘、最後の決闘になりますな！」

「ああ：サラちゃんへの想いが強い方がこの戦いを制する！ つま
りこの決闘に勝った方がサラちゃんに相応しい男ということだ！」

二人の男は静かな闘志を燃やしながら互いに睨みあった。
そして、

「さあ、試合開始だ！ 俺のサラちゃんへの熱き想いを思い知れ！」

先に動いたのはロビンソンだった。

背中に剣のように背負っていたラケットを鞘のようなバックから抜き、掌からテニスボール大の火の玉を出現させると、それをトスア
ップ。

「サービス・エース“！！”」

右手に持ったラケットでアベディを狙って強打すると、赤テニスボールは寸分違わず標的へまっしぐら。

「550ヒートですか…ファーストサーブにしても威力が足りませんぞ！今日は“ファイネア心炎炉”の調子でも悪いのですか!?!」

アベディはその風体からは想像もできないような軽い身のこなしで、襲い来る火の玉をひよいと避けてしまった。

「なあに、まだまだ試合は始まったばかり！俺の原動力、サラチヤんへの熱き想いも徐々に高まってくるさ！」

「それなら漏れからもいかせてもらいますぞ！“モエール・キャロット”ダウン！」

ワルっぱく笑うロビンソンに対し、アベディは何やら人參を模したような謎のステッキをリュックサックから取り出した。

例えるなら魔法少女が使う魔法のステッキのような形状だ。

「またその悪趣味な武器か：“赤色部隊”は燃える心の熱さを“イネア心炎炉”を介して炎に変えてるんじゃないのか!?!」

「ロビンソン氏！漏れだって萌える心が原動力ですぞ！」

「だからお前のは漢字違いだつて！」

「そして、これが今日の漏れの原動力…マーナ姫タンの生写真！

先日のカトウー村での記念式典の時のものですぞ！」

「お前、いつの間に!?! それ盗撮だろ!?!」

「マーナ姫タンのためなら漏れはどんなことだってするのです！

漏れのマーナ姫タンへの萌える気持ちを思い知るのですぞ！」

アベディは身体をクネらせながらロビンソンに啖呵を切ると、リュ

ツクサクから取り出した写真を凝視。

「マーナ姫タン萌え〜〜!!!」

突然、気が狂ったように絶叫したかと思うと、人参型魔法ステッキを腰が引けた不格好なポーズでロビンソンに突き付けた。

すると、そのステッキの先から猛烈な勢いで火炎放射が放たれたではないか。

「くそっ…お前のその“ファイネア心炎炉”の使い方、絶対間違ってたんだろ！」

ロビンソンはそう文句を垂れながらも愛用のラケットで何とかその攻撃を凌ぎ切った。

「流石はロビンソン氏！ 1000ヒートくらいの攻撃なら軽く防いでしまうんですね！ でも、思い入れの強い写真ならもっと高いヒートが出るはずですよ！」

「おい、アベディ…常々思ってるんだけどよお…お前のサラちゃんへの想いってのは外見にしか宿ってねえのかよ？」

「当たり前じゃないですか、ロビンソン氏！ マーナ姫タンの萌え萌えな容姿は天下一品なのです！ 萌えのためにそれ以外に何が必要ですか！？ 詳細キボンヌ！？」

「そりゃ分かんねえよな、お前には…俺が本物の想いの強さってのを見せてやるよ！」

「それなら漏れだって！ 次のロビンソン氏との決闘のために3カ月かけて作り上げた漏れの最高傑作！ マーナ姫タン8分の1フィギュアで勝負ですよ！」

激しさと優しさの同居した複雑な表情で火の玉を大空へ舞い上げるロビンソンとリュックから自作の人形を取り出して凝視するアベデ

イ。

本日最後に二人が繰り出す想いのこもった攻撃は激しくぶつかり合った。

「サラポア・スマツシユ」！！

「萌え萌えビーム」！！

ドオオオオン！！

師匠 vs 弟子

「師匠：オラは師匠さを尊敬している…だからこそ、オラは師匠さに勝ちだいでずだ！」

「……………」

真剣な声色での2番隊ヴォークの決意表明に無言で答える1番隊フリード。

それをどう捉えたのかヴォークは、

「…発声練習さも終わったどころで、そろそろ本番さいぐだよ！」

胸ポケットから金色のマイクと小型のラジカセのようなものを取り出した。

そして、フリードも物音ひとつ立てずに同様のセットを持ち出した。すると、マイクを握ったフリードは人格が変わったかのように饒舌なMC風トークを始めたではないか。

「準備はいいかい！？ オーライ！ マーク・フリードのライブへようこそ！ これから一緒に盛りあがっていきましょう！」

フリードはテンションマックスでラジカセを録音モード切り替え、マイクを手に取るといきなり歌い始めた。

「~~~~」

そして、録音モードが終わるとスピーカーをヴォークの方に向け、再生ボタンを押した。

「ありがとう！ オープニングナンバー “熱唱”！」
すると、フリードの抱えているスピーカーからいきなり火炎放射が放たれ、ヴォークを襲った。

「750ヒート…師匠…オープニングナンバーだけあつてまだまだ喉の調子さが万全ではないみでえだな！」

「オーライ！ まだライブは始まったばかりだ！ 曲の良し悪しも然ることながら、10秒の録音時間内にどれだけ心を込めて熱唱できるかが大事なんだ！ ユーシー！？」

「もちろん今のが師匠の実力だとは思ってないですだ！ でも、今の曲もお見事でした！ では、師匠のあとで非常に恐縮ですが、オラも一曲歌わせていただきますだ！」

やたらと低姿勢なヴォークもフリードに倣ってラジカセを録音モードにすると、金のマイクで熱唱を始めた。

「~~~~~」

そして、例によってスピーカーをフリードに向けて再生ボタンプッシュ。

「師匠、これがオラのオープニングナンバーですだ！」

スピーカーから放たれた火炎放射はハイドに見事命中。

しかし、煙の向こうにはフリードが何事もなかったかのように立っていた。

「オーライ！ 600ヒートか…また一段とうまくなったな！ 声に伸びが出てきた！ 俺がこの間教えた裏声も完全に自分の物にしている…だが、まだまだ心がこもってないな！ 歌に1番重要な

は心だ！ それが分からないうちはお前に負ける気はしないな！」

「師匠、ご指導ありがとうございます！ 必死に歌い込んできたこの曲が効がないなんて流石です……」

「オーライ！ 今度は俺のターンだな！ 次はみんなも知ってるあの曲だ！ 一緒に歌ってくれるかい！？ オーライ！ センキュー！」

「まさか……先月、師匠がマックスヒート1500を叩き出した時に歌ったあの十八番を……」

フリードは無言とかな微笑みをヴォークの疑念への解答とし、黄金マイクを握った。

それを確認したヴォークも何かを決意したのか達観した表情となり、

「オラは……ずっと師匠さを尊敬してその楽曲さを歌ってきただ……でも、同時に師匠さを超えるにはいつまでも師匠の真似をじでいではないけども思ってた……いぐら心を込めたところで、その曲さを実際に書いた師匠に敵うバズもねえ……だから、今日は師匠さからの脱皮を謀るために、長年温めできたオラのオリジナルさを聴いてくださいえ……！」

「オーライ！ お前に俺以上の作曲センスがあるかどうか楽しみにしてるぜ！」

しばらくの静寂の後、二人の美しい歌声が辺りに響き渡った。

「
」
「
」

そして、シンギングタイム終了。

「さあ、みんな！ 俺の歌を聴いてくれ！ “十八番”…“熱唱”
！！」

「オラの渾身の一曲さ聴いてくだせえ！ “熱唱”！！」

二人同時に再生ボタンを押すと、スピーカーからは魂の込もったすさまじい火炎放射が放たれ、二人のちょうど中間地点で轟音とともに激突した。

元カレ vs 元カノ

「急にあんなこと言って…俺はまだ納得してねえからな！」

男は未練がましい生き物であり、その代表が1番隊のプッチである。

「サキクさんからあんなこと聞いて…プッチも敵の一味だって聞いて…その時にもうはつきりと決めたの…プッチとはもう終わりにしようって…だってそうするしかないでしょ！？ あたしたち敵同士なんだよ！？」

女はわがままな生き物であり、その代表が2番隊のバボ・クリスである。

「それがどうしたっていうんだ！？ 大事なのは俺たちの…」

「あたしたちの個人的な感情は関係ない！ こうなってしまった以上、この戦いは避けられない！」

「…！」

プッチの発言を遮ったクリスの悲痛なひとことが元恋人同士の因縁の対決のゴングとなった。

「…ソ〜レ！ “ジャンピングサーブ”！」

努めて明るく振る舞うクリスは“フイネア心炎炉”によって生み出した炎のバレーボールを頭上高く投げ上げると、そのまま跳び上がり強烈なスパイクを元カレにお見舞いした。

「“レシーブ”！」

しかし、プッチは両手を組み元カノのスパイクの勢いを完全に殺すことに成功した。

「500ヒート…俺たちまだやり直せ…」

「何度も言わせないで！ あたしは自分より弱い男は大っ嫌いなんだからあ！」

「分かったよ！ じゃあ、俺がお前よりも強いことを証明すればいいんだな！ …… ナックルサーブ！」

モチベーションも新たに今度はプッチが燃え盛る炎の球を元カノに打ち込んだ。

ゆらゆらと揺れながらクリスの守備範囲に飛んでいく赤バレーボール。

「レシーブ……しまった！」

当然、クリスも両手を組んでボールの勢いを殺そうと試みた。が、揺れるボールに的が定まらず、プッチにチャンスボールを与えてしまう格好となってしまった。

「俺はお前を諦めない！ “スプリング・スパイク”！」

愛を叫びながらふわりと跳び上がったプッチはクリスめがけて思い切り右腕を振りおろした。

「うわっ！」

レシーブで体勢を崩していたクリスはその攻撃をモロに喰らってしまった。

「…あたしだって本当はずっと一緒にいたかった…でも、もうそれはムリなの！　すべてを知ってしまったから…だから、あたしは今日ここで決着をつける！　もうこんな風に迷いながら生きていくのはイヤなんだからあ！」

「クリス…」

クリスの心の叫びに心を打たれるプッチ。
しかし、そんな二人の心とは裏腹に非情にも最後のラリーが始まるうとしていた。

「ソレ！　天井サーブ」！

まずはクリスが先ほどのパワフルなサーブとは打って変わって高々と打ち上げるサーブを放つ。

「200ヒート…これで俺のミスでも誘おうってのかよ！　“レシブ”！」

それをプッチが冷静に受け止め、勢いを殺すのではなく自らの頭上に打ち上げた。
そして、

「“1人時間差”！！」

落下地点に素早く入り込み、フェイントを交えながら燃え盛るバレーボールをクリスに打ち込む。

「嘘をつくとき瞬きを2回する…プッチの悪い癖なんだからあ！」

しかし、クリスはそれを見越していたかのような的確な対応を見せ、同じく頭上にレシーブを上げた。

「これで勝負!“バツクトス“!!」

そして、かつと目を見開くと今度は落ちてきた赤球をそのまま打ち返すのではなく、もう一度自分の真上に高々と打ち上げたのである。

「クリス…お前、まさか！」

驚きに目を丸くするプッチを尻目にクリスは落ちてくる赤い球に向かって大きく助走を取り、跳び上がって最大まで身体を反らせると、そのしなりを利用して落ちてくる炎のバレーボールを渾身の力で強く打った。

「ト
ト三段攻撃”!!!」

クリスから放たれたボールはますます炎の勢いを増してプッチに迫った。

「2200ヒート…負けるかあ!!」

プッチもレシーブの体勢をとって赤球の襲来を迎え撃つ。
そして…。

「…だから、言ったのよ…あたしより弱い男は嫌いだって…」

クリスは滲んだ遠くの空を見上げた。

この分だと一雨くるのも時間の問題かもしれない。

火の鳥

ピーちゃんの飛来により風向きが変わったサキクvsピーターのリダー対決に再びカメラを戻すこととする。

「あんたがますます強くなるかと思うと……ますます燃えるねえ！」

「がっはっはっは！ 確かにお前の燃える心は大したもんだ！ この俺をも超える素質を持っている！ だがな、ナリック様の驚異的な技術によつて甦った伝説の火の鳥、ピーちゃんを携えたこの俺はもはや無敵！ マックスヒートも3倍にまで跳ね上がる！ それでもそんな風に燃えていられるか？ がっはっはっは！」

「愚問だねえ！ 今のあんたの発言はあたいの心の火に油を注いだも同然だよ！」

「がっはっはっは！ それでこそサキク！ 我が“赤色部隊”の2番隊長だ！ がっはっはっは！」

ピーターはいつもの高笑いとともに愛鳥・ピーちゃんに飛び乗って手綱を握ると、

「元気ですか〜！？ 元気があれば何でもできる！ 行くぞ〜！
1・2・3・ダアーツ〜！」

右腕を突き上げながら首に繋がられた手綱キュツと引っ張った。すると、ピーターの口からではなく今度はピーちゃんの口から“闘魂プレス”の火炎放射が放たれた。

「はあ〜！」

サキクは前回よりも数割増しの雄叫びと共にその凄まじい火炎放射

を気合いで受け止めようとした。
が、

「ぐわっ!!!」

ピーター本人の“闘魂ブレス”とは比べ物にならない業火を弾き切ることは流石のサキクにもできなかった。

「くっ…これが4000ヒートの衝撃…」

「がっはっはっは！俺とピーちゃんのコンビネーションはこんなもんじゃないぞ！」

未体験の衝撃にしばし言葉を失うサキクにピーターは更なる攻撃を仕掛けるべく愛鳥の手綱を引っ張り上げた。

すると、火の鳥は突如スピードを上げて大空へ急上昇。
そして、

「行くぞ、ピーちゃん！“火の鳥の来襲”だ！」
ゴッソトパーテ

豆粒になった位置からサキクに向かって急降下してきたではないか。

「!!!…“ファイアーボール”！」

サキクはそれに気付くと自らの得意技で応戦した。

しかし、サキクの全力投球はピーちゃんの羽にすべて吸収されて無効化されてしまった。

クピ~~~~

「ぐわっ!!!」

ピーちゃんの突進はサキクにクリーンヒット。

巨大な翼に打たれたサキクは数十メートル先の大木まで吹き飛ばされ、そこで動かなくなってしまうた。

クピ~~~~

しばらくしてピーターを乗せた火の鳥はサキクの倒れている大木のそばに静かに着地した。

「がっはっはっは！ 残念ながらピーちゃんには炎系の攻撃は無効なのだよ！ 6000ヒートの攻撃をくらっちゃあ、流石のお前も一溜りもないだろう！ がっはっはっは！」

サキクはピーターの勝ち誇ったかのような高笑いを半分開きの力のない目で聞いていたが、握り拳を2つ作ってよろけながらも立ち上がった。

「…あたいは18年前の内戦のようなことがもう二度と起きないよ。うにこの“七色守護隊”（レインボーガーディアンズ）に入ったんだ…それなのに！ あんたらの世界征服まがいの計画に加担させられていたなんて…あんたらはあたいの気持ちを踏みにじったんだ！

絶対に許さないよ！」

「がっはっはっは！ 今更後悔したつてもう遅い！ いくら悔やんでも過去を無きものにするなど誰にもできないのだからな！

がっはっはっは！」

「確かに…過去を消すことは誰にもできない…でも、その過去の上に立ち、確かな今を繋ぐことによって未来はいくらでも変えることができる！ 例え過去の自分が間違った方向を向いていたとしても…そこから自分の目指すべき方向へ少しずつ進んでいけば…いつかは自分の目指すべき場所に辿り着けるはずだよ！ だから、あた

は“今”戦う！ 少しでも目指すべき未来に近付くために……」
「がっはっはっは！ 随分なご高説だったよ、サキク！ だが、“
ザメシード”はほぼ完成している！ あとは詰め作業だとナリッ
ク様も言っていた！ 今更いくらお前たちが足掻こうが全世界が俺
たち”シッターカンパニー”の支配下になるのはもはや時間の問題
なのだよ！ がっはっはっは！」
「……！」

マントルスロー

「今更いくらお前たちが足掻こうが全世界が俺たち”シッターカンパニー“の支配下になるのはもはや時間の問題なのだよ！　がつはっはっは！」

ピーターの悦に入った独白にサキクの怒りがとうとう爆発した。

「…そんな風に！…武力で世界を思いのままにできると思ってる奴らがいるから！…戦争はいつまで経ってもなくならないんだよ！…無駄な血が流れるんだよ！…あたいのオトンとオカンは18年前の内戦で爆弾にやられて死んだ！…オトンとオカンだけじゃなく、あの1発でたくさんの人々の命が奪われた！…あんたたちはよそ者だから！…あの内戦の悲惨さを知らないから！…そんな凶悪な破壊兵器を造ろうなんて気が起きるんだよ！」

「がつはっはっは！　素晴らしいよ、サキク！　その通りだ！　だがな、現に俺たちの武力による世界征服計画は今のところすべて順調に進んでいる！　つまりこの世は力こそがすべて！　武力さえあれば何でもできるといふことなんだよ！　がつはっはっは！」

「力がすべてか！…確かにそれはその通りかもしれないねえ！…それならあたいは！…今からあんたの大好きな“力”であんたを振り伏せてみせる！　その上で武力に頼らない新たな秩序の下に国をまとめてみせるよ！　それなら文句はないだろ！？」

元々の闘争心に怒りと使命感がプラスされたサキクの心は燃えたいぎつていた。

サキクは鋭い目つきでピーターを睨みつけて両手空高く掲げた。

すると、その掌の上に今までの“ファイアーボール”の3倍はあるうかという巨大な炎の球が現れた。

「がっはっはっは！ もちろん文句はないがな！ そんな大きさじゃ、ピーちゃんに火傷1つ負わせられないぞ！ 1・2・3・ダァーッ！」

クピ~~~~

余裕の表情のピーターが手綱を引くと火の鳥から激しい火炎放射が放たれ、両手を上げたまま無抵抗のサキクを襲った。

「がっはっはっは！ たださえボロボロのお前が3500ヒートの攻撃をくらって立っていられるハズが…なにっ!？」

そこにはボロボロのサキクが立っていた。

そして、サキクの真上で燃えている炎の球は数秒前の何倍もの大きさに膨れ上がっていた。

「まさか…サキク！ 俺の攻撃を吸収したのか…！」

「…あんたのパワー有り難く使わせてもらっよう！」

驚きのあまり高笑いを忘れたピーターを睨みつけながら、サキクがさらに気合いを入れると炎の球はまた一気に巨大化し、直径は10メートルほどにまで達した。

クピ~~~~

火の鳥の甲高い鳴き声が辺りに響き渡った。

しかし、今回は今までのものとは少し毛色が違う。

この若干の焦燥感を感じさせる鳴き声が意味するものは…

「…らっ…ピーちゃん！ 落ち着くんだ！」

ピーちゃんは明らかにサキクの掲げる巨大な炎の塊に怖じ気づいていた。

その証拠に突如として暴れ出した伝説の火の鳥はピーターを振り落として一目散に遠くの空へと飛び去ってしまったのだ。

「…愛鳥にまで見捨てられるとは惨めだねえ！…さあ、そろそろ十分な大きさになってきたよ！」

「！！！」

ピーちゃんに振り落とされ茫然自失のピーターにサキクは容赦なく頭上の巨大赤球を投げ込んだ。

「マントルスロー 巨炎球投“！！！”

ドッゴーーーーーン！！

辺りは焦げ臭さと静けさに包まれ、そこにはサキクだけが立っていた。

サキクはふうと一息つくど、顔を上げトボトボと歩き出す。

そこへ、

「流石はリーダーですだ！オラ感動じただよ！」

「最後の攻撃、軽く10000ヒート超えてたんじゃないっすか！？」

2番隊ことSSAメンバー、アル・ヴォークとヨー・ロビンソンである。

「あなたたち…！」

すべてを悟り、感慨に更けるサキクの元に更なる来客がやってくる。

「ホントに頼りない男だったんだからあ！」

「俺の努力の前にはいかなる才能も……」

「じゃしゃるな！」

「なんでえ……」

バボ・クリスも加えたSSAフルメンバーでのシャルルへのツッコミが決まったところで、サキクの表情がふつと和らいだ。

「よし！ このまま“シッターカンパニー”とやらのアジトに乗り

込むよ！ あんたたち！ 足引っ張るんじゃないよ！」

「お〜！」

サキクの号令に威勢よく答えたSSAの面々は“赤色部隊”を倒した勢いそのままに黒幕“シッターカンパニー”のアジトへと進路をとったのだった。

アンナ・クリスティー又登場

一方、サラが連れ去られているとされるパンダ村では統治初日の記念式典の準備が着々と進められていた。

「ホントに超世話がやけるんですけどお！ あんな小娘一人にどうして逃げられちゃうわけ！？ ってゆうかあたしにどんだけ迷惑かければ気が済むわけ！？ 超有り得ないんですけどお！」

と、コギヤル口調で怒鳴りつけている女の容姿は見るからにコギヤルであり、金髪・ミニスカ・ルーズソックスの3点セットがそろい踏みしている。

「申し訳ありません、アンナ・クリスティー又様！ 以後、このよくなことのないように万全を期して監視しますので今回のことはどうかお許しを…」

と、平身低頭、許しを請うている男の容姿は見るからに野生児であり、五分刈り・水色短パン・胸毛の3点セットがそろい踏みしている。

「ってゆうかその台詞、耳にイカだし…」

「アンナ様、それを言うなら耳にタコでは…？」

「はあ?? ってゆうかあなた、あたしに口答えするわけ？ 超有り得ないんですけどお！」

「も、申し訳ありません！ このようなことがないように以後…」

「ああ、もう！ あなたと話していると超ムカついてくるしい…ってゆうかあたしもう帰ります！ 超ダルいんですけどお！」

「で…では、お気をつけて！」
「んじゃ、もうあたしの足を煩わせないでほしいんですけどお！
アディオ〜ス！」

始終マイペースな魔女アンナ・クリスティー又はラメやらペイント
やらでカスタマイズした空飛ぶ箒に横乗り、颯爽と飛び去っていつ
てしまった。

その後ろ姿が見えなくなると、さっきまで叱られっぱなしで小さく
なっていた大男がいきなり野太い声を張り上げて暴れ出した。

「くそっ、あの魔女娘め！ こっちが低く出りゃいい気になりやが
って！」

大男が吠えたのを聞き付けて、その仲間達が心配そうに駆け寄って
きた。

「ブッチャーさん、大丈夫ですか？」

まず最初に言葉を掛けたのは長髪・水色スーツ・薔薇の花の3点セ
ットを揃えたイケメン風男子である。

「ジンか…まったくあの魔女娘め、わしを完全にナメとる！ わし
を一体誰だと思っついていやがんだ！ そもそもマーナ姫を逃がしたの
はわしら“水色部隊”じゃねえ！ それなのになんでわしがあんな
風に言われなきゃいけないんだ！」

「お気持ちお察しします…しかし、あの魔女に逆らっては何をされ
るか分かりません！ 今はおとなしく従うしか…」

「かっかっかっかっ！ また怒られてや〜んの！ ブッチャー、お
前はホントに情けない奴だぜ！」

次に高笑いしながら大男をけなしているのは、青色キャップ・つり目・短髪の何の3点セットかイマイチよく分からない男である。

「なんだとお！ 小僧、言わせておけば…」

「ブツチャーさん！ 今はこんなところで言い争いをしている場合ではありません！ もうすぐ式典が始まりますからね！ ゲーリーさんもブツチャーさんも落ち着いて今は与えられた任務を確実に遂行しましょう！ でないと、またあの魔女にヒドイ目に遭わされますよ？」

「へっ、相変わらず気取った野郎だぜ！」

「げばばば！ 流石は“氷の男”ジン…いつも冷静沈着だな！」

激昂する野生児ブツチャーと挑発するつり目のゲーリーを巧みな話術でなだめすかし、話を続けるイケメン・ジン。

「…ところでマーナ姫様は？」

「ああ、ミューが式典用の衣装に着替えさせてるところさ！」

「みなさん、どうもお待たせいたしました！」

ゲーリーの報告の直後、式典用のきらびやかなドレスに身を包んだマーナ姫（オブリキア）が現れ、その後ろには白い肌・小柄・青色水玉ワンピースな女の子が付き添っていた。

「みんなお待たせだミュ！ 今回の衣装はどうだミュ？」

「サテイ！ 相変わらず素晴らしい出来映えだよ！」

「ホントだミュか！？ ジンちゃんに誉められるなんて感激だミュ！」

ジンの手放しの称賛に頬を赤らめるサテイ。

「まあ、モデルがいつてもあるけどな！」

「モデルで見栄えに違いも出る…げばばば！」

「……………」

「さ…さあ、もうすぐ式典が始まりますよ！ みなさん、スタンバイを！」

ゲリーの発言に被せたブッチャーのダジャレで場の空気が一瞬凍りついたが、ジンのナイスフォローで何とか事無きを得たパンダ村
統治初日式典の舞台裏であった。

怪奇現象

パンダ村で統治初日の記念式典が始まるうとしていたその頃、SSAの活躍により長きにわたって登場の機会に恵まれなかった本編の主人公ヘルとその相棒ブリフはピーちゃんに連れ去られたサラを救出するべく、パンダ村に乗り込んでいた。

「ウエルカムトウ “マンガテイ帝国” 付属パンダ村：ねえ」

「まったく歓迎されてる気はしねえけどな…」

ヘルが村の入り口にある質素な看板を読み上げ、ブリフが看板に偽りありを訴えた。

ブリフがなぜそのような訴えを起こしたかというところ、

「キミたち！ ここは今、部外者以外立ち入り禁止なんだよ！ 痛い目にあいたくなかったら…ぐはっ！」

村の入り口で念入りな入国審査が行われていたからだが、ヘルとブリフは実力行使にてその関門を突破した。

「式典会場はあそこだな！」

「あの中に我が愛しのサラちゃんが…今迎えに行くからね！」

「一生やってる！」

無事に入村を果たしたヘル&ブリフは式典が行われているであろう人だかりへ駆け足で向かった。
が、

「くそっ…これじゃ、何が何だかさっぱりだ！」

「サラちゃん…もうすぐそこにいるというのに会えないなんて…ああ、神様…そんなに僕がお嫌いですか!？」

「少女マンガか!」

村人全員参加の一大イベント会場は大混雑で、とてもステージの様子が見える状態ではなかった。

「おい、ブリフ! あそこ見ろよ!」

そんな中、ヘルが何かを発見してブリフの肩を叩く。

ヘルの指さす方向には、

「おお! あそこだけやけに空いてんなあ! むしろほとんど人がいねえじゃねえか!」

1か所だけ不自然にスペースが空いていた。

二人は直径10メートルほどの空きスペースへ向けて人混みを掻き分けた。

しかし、

「おい、ヘル…お前の特技がパントマイムだったとは俺は初めて知ったぞ!」

「ああ…俺にこんな才能があったとはな…ブリフ、お前もやってみるよ! 案外できるかもしれないねえぞ?」

「あのなあ…そんな誰でも一朝一夕で身につけられんならとっくに…なっ!?!」

ポツカリと空いたスペースに一步足を踏み入れた所で怪しげな動きを繰り返していたヘルにちよっかいをかけたブリフはヘルの勧めで同じく誰もいない空間に一步足を踏み入れようとして…そこで全身に柔らかな抵抗を感じた。

それはまるで…

「何だこりゃ！？　ここに目には見えない透明の壁でも設置されてんのか！？」

「なっ？　案外できるもんだろ？」

突然の怪奇現象にワタワタするブリフとなぜか勝ち誇った顔のヘル。そこへ、

「ちよつとあんた！　どうしてここに入り込めてるんよ！？」

人混みを掻き分けて一人の少女が早足に近付いてきた。田舎っぽい顔立ちに編み込んだ髪を左右に2本ずつ飛びださせ、腰から竹刀を4本もぶら下げている。

「何だその言い様は…意味が分かんねえぞ！」

「なんであんたがターヤの“メンタルブロック”に入り込めてるんか聞いてるんよ！」

「“メンタルブロック”だあ？　それがこの見えない壁の正体か！？」

怪訝そうなヘルに田舎娘がテクニカルチームを交えて返答をよこしたので、ブリフが追加質問した。

「そう…この“メンタルブロック”によってターヤの半径5メートル以内に近づくことは誰にもできないんよ！　10年来の親友のうちとサリイだつて“メンタルブロック”の中に入ることは叶わないの…なんであんたは出会っていきなり入れてるんよ！？…そんなの有り得ないんよ！」

「確かに俺が阻まれた位置よりお前が阻まれた位置の方が1メートル

ルくらい中心に近いな！」

田舎娘の熱弁にヘルとの距離を確認しながら納得顔のブリフ。

「有り得ないって言われてもなあ……」

怪訝顔から困惑顔へシフトチェンジしたヘルの耳に、空白スペースの中心に陣取っていた人物から不意に声が飛んできた。

「カーミィ！ その人たち困ってるんだってえ！ すべてはうちが
“サケラレの呪い”に侵されてしまったのが原因……その人たちは何
も悪いことないんだってえ！」

「！？」

サケラレの呪い

「…すべてはうちが“サケラレの呪い”に侵されてしまったのが原因…その人たちは何も悪いことないんだってえ！」
「げっ!？」

振り返ったその声の主のあまりのケバさに言葉を失うブリフだったが、ヘルはヘルで違う部分に引っ掛かっていた。
それはもちろん…

「“サケラレの呪い”だって!？」
「そうなんだってえ…こんな話をしてても信じてもらえないと思うけど…うちは人から避けられる呪いを受けてるんだってえ！」
「ひつく…えつく…可哀想なターヤ…あんな呪いさえなければターヤは…ターヤは…」

そこへ左目の下に泣きぼくろのある少女が泣きながらやってきて、ケバ女の独白を一時停止させた。

「サリイ…うちのために泣いてくれてありがとう…最初はみんながうちを避けてるみたいでちょっと寂しかったけど、あんたとカーミイがいてくれたから…うちはそれを乗り越えられたんだってえ！呪いを解く旅もあんたたちとだったからここまで来れた…本当に感謝してるんだってえ！」

「ひつく…えつく…ターヤ…」
「改まってどうしたんよ！ アイテムも残り3つ…3人で力を合わせて頑張るんよ！」

「ありがとう…サリイ！ カーミイ！」

例え距離は隔てられていても心は繋がっている女同士の温かい友情の図。

「さつきは“メンタルブロック”にいきなり入れたあんたを見てちよつと嫉妬してしまったんよ…ごめんなさい…とにかくうちらにはこういう事情があるんよ！ 嘘だと思ったんならそれでもええ…これ以上うちの事情に首を突っ込まんといてほしいんよ！」

田舎娘ことカーミィは目に涙をいっぱい浮かべながらヘルたちを突き離しにかかったが、ヘルがこんな話を聞いて黙っているハズがなかった。

「嘘だなんて思うかよ！」

「でも、こんな嘘みたいな話…」

「“ヘルニアの呪い”…これが俺にかけられた呪いの名だ…」

「!?!」

「だから、俺にもつと聞かせてくれ…その“サケラレの呪い”とやらについて！」

ヘルの衝撃の告白に互いに顔を見合せながら驚きを表現していた3人だが、やがて呪われた張本人がゆっくりと語り始めた。

「前兆はずつと前からあつたんだってえ…ある日から徐々にうちと仲良くしてくれる人が減ってきて、きつと何か嫌われるようなことをしたんだと落ち込む日々が続いたんだってえ…でも、そうじゃなかったんだってえ…ちょうど1年前のある日…そんなうちの元へ魔法使いを名乗る男がやって来て、うちにいきなりこう告げただってえ…『あなたは“サケラレの呪い”に侵されてしまっています！今すぐに呪いを解くアイテムを集めないとあなたの命が危ない！』と…」

「魔法使い！？ まさかアンナ・クリステイー又か！？」

「いや、確か名前はエドワルド・ジユノア…続けて彼はこうも言うてたんだってえ…『魔法界の掟でキミたちの旅をサポートすることはできないんだ…本当にすまない…我々が至らないばかりに…でも、いつか僕がこんな呪いのない世界に変えてみせる！』と…それで彼から呪いを解くアイテムを導くこの“サケラリン・ブーツ”を授かり、うちはカーミイとサリイと一緒に旅に出た…そして、3つめのアイテムを見つけたところで“メンタルブロック”が発現したんだってえ…」

「…魔法使い、エドワルド・ジユノアか…俺ん時はそんな奴出てこなかったけどな…出てきたのは胡散臭いばあさんだったけど、あいつもしかして魔女だったのか？ まあ、いいや…お前の持つてるその茶色いブーツみたいなのは俺の“ヘルニアン・ストーン”と同じ立ち位置と考えてよさそうだな！ そんでお前、もう一個何か武器みたいなのもらったろ？ ほら、例えば“サケラリアン・スピア”みたいなカンジのネーミングのさあ？」

「??…いや、うちはそんな武器になるようなもんはひとつももらってないんだってえ！」

「!？」

サラ救出大作戦

「…うちはそんな武器になるようなもんはひとつももらってないんだってえ！」

「マジか！？ ほら、こういう槍みたいなさあ？」

ヘルは腰に提げた“ヘルニアン・スピア”をケバ女の目の前に示したが、リアクションはいまひとつだった。

「いや、それに似たようなものも心当たりがないんだってえ…」

「そうか…俺たちの境遇は似てるようで相違点も結構あるみたいだな…」

「でも、ここまで同じなんて偶然とは思えないんだってえ！ きつと裏で何か繋がってるハズなんだってえ！」

そこまで話が進むと全員考え込んでしまったのか誰も喋らなくなつたが、しばらくして沈黙を破つたのは田舎娘カーミイであった。

「そんであんたらもここへアイテムを探しに来たん？」

「ん？…いや、俺たちはちよつと違うんだ…」

「我が愛しのサラちゃんをこの白馬の王子プリフ様が助けに参上したのさ！」

「???？」

「ああ…こいつは無視してやってくれ！ 実は…」

ヘルは当然ながら状況を把握していない3人娘に“シッターカンパニー”のことからここに至る経緯までを簡潔に説明した。

「…この式典の裏にはそんな事情が隠されていたんだってえ！」

「確かにさつき村の人たちがナリニウムがどうとか言ってたんよ！」
「ひつく…えつく…可哀想なサラちゃん…何の罪もないのによ
うに利用されて…」

ヘルの事情聴取を終えた3人は三者三様のリアクションを見せたが、
鋭く当面の問題も指摘した。

「でも、これじゃあ人が多すぎて式典の様子すら分かんないだつて
え！」

「それにサラちゃんにはきつと護衛がたくさん付いてるんよ！」

「ひつく…えつく…あたしたちも何か力になれることがあればいい
のよね…」

涙ぐむサリイのこの一言にブリーフが何かを閃いた。

「力になれるとも！ なあ、ケバ女…お前の周り5メートル以内に
は絶対に誰も入れないんだよな？」

「まあ、例外もあるみたいだけど…」

「でも、ヘルは入れるわけだ！」

「信じられんけど、そういうことみたいなんよ！」

「俺にいい考えがある…名付けて“サラちゃん救出大作戦”だ！！」
「??????」

またしてもはてなマークを点滅させる3人娘だったが、それはヘル
も同じだったらしく、

「ああ、こいつサラちゃんのことになると途端に馬鹿になるから気
にしないで！ 普段はこんな奴じゃないんだけどなあ…」

呆れた様子で弁解している。

しかし、カーミィはブリフの提案に乗った。

「ねえ、スカーフの人！ その作戦、うちに話してほしいんよ！ ひよっとしてターヤの呪いが役に立つかもしれないんよね！？」

「えっ…それならあたしも聞きたい！」

「うちのこんな厄介な呪いが役に??」

「よくぞ聞いてくれた！ 教えてしんぜよう…“サラちゃん救出大作戦”の全貌を！」

「どんだんブリフのキャラが崩壊していつてる気がする…」

サリィとケバ女の承諾も得たブリフはヘルのツッコミなどお構いなしに喜々として喋り始めた。

「うん！ それならいけるんよ！」

「ひつく…えつく…ターヤの呪いが初めて誰かの役に立つんだね…あたし嬉しい！」

「そういうことならうちも一肌脱ぐんだってえ！」

ブリフ発案の救出作戦のあらましを聞いた3人娘の反応は予想に反して上々であった。

そして、問題のヘルはというと、

「…どんな無茶苦茶なこと言い出すのか心配してたけどよ…まあ、お前にしては上出来じゃねえか！」

「だろ？ ヘル…お前はこの作戦の重要な力ギを握ってるんだ！

抜かるんじゃねえぞ！」

「分かってるよ！」

ヘルのお墨付きをもらって俄然やる気のブリフであった。

「うちの名前はバーシー・タヤヤ！」

「うちはタミホーク・カーミィ！　そこでこっちの泣き虫ちゃんが……」

「チーク・サリィっていいます…よ、よろしくお願いします！」

「ああ！　俺はヘル！　よろしくな！」

「そして、この俺こそが“サラちゃん救出大作戦”の指揮官、ブリフだ！　よろしく頼む！」

「…きつとこいつは元々こういう奴なんだ…記憶喪失で今まで忘れてた性格を思い出したんだ、きつと…」

互いの自己紹介も済ませ、作戦決行へと士気の高まる4人をよそに、不本意そうに小さく呟くヘルであった。

作戦決行

「みなさん、初めまして！ 私“マンガテイ帝国”第1王女、マーナ・デ・ラ・バンド・マンガテイと申します…本日はこんなに集まっていたいてありがとうございます…」

ヘルたちが作戦の細かい打ち合わせをしているうちにマーナ姫サラのスピーチが始まった。
作戦実行の刻である。

「よし、野郎共！」

「うちら全員女だつてえ！」

「あ？…まあ、細かいことは気にすんな！ 作戦通り抜かりなくやつてくれたまえよ！」

「おー…」

「おいおい…いきなりチームワークにヒビが入ったぞ…」

棒読みの鬨の音がヘルの心配を煽ったが、作戦実行のタイミングはとにかく今しかない。

「よしっ！ まずはヘルとケバ女…出撃…！」

ブリーフの号令によってタヤヤとヘルはマーナ姫サラがスピーチを行っている壇上に一直線。

当然、“メンタルブロック”の効果で群衆はモーゼの十戒のように二つに割れ、二人の通り道を作る。

「何なんだ、キミたちは！？ これ以上近付くと…なにっ！？」

それを制止しようと近付いてきた衛兵も“メンタルブロック”に吹き飛ばされた。

「…何やらオーディエンスたちが騒がしいようですね…」

会場の異変に気付いた水色スーツのイケメン男、ジンは危機を感じてマーナ姫をそばで警護しようと舞台裏から飛び出してきた。

「いかん！ 邪魔者が出てきたんよ！」

その様子を会場の離れた場所から監視していたカーミイは腰から提げた竹刀のうちの1本に手を掛けた。

「ほう…それでどうするつもりだ？」

隣にいた作戦参謀ブリアフの質問に自信たっぷりカーミイは答えた。

「あんたは指揮官なんやろ！ 指揮官なら指揮官らしく黙って見とくんよ！」

目にも留まらぬ早業で竹刀を抜くと、50メートル先のジン目掛けて地面に水平に軽く一太刀。

「いくんよ、瞬刀“春風”！…“裂風斬”！！」

すると、一陣の風が吹き抜け、凄まじい斬撃がジンを襲った。

「…！」

壇上のジンはいち早く身の危険を察知して間髪でカーミイの斬撃

をかわしたが、その一瞬の隙を突いてタヤヤ・ヘルペアが壇上の上陸。
マーナ姫と衛兵の間に割り込むことに成功した。

「うちの“裂風斬”をかわすとはあのスーツの男なかなかやるんよ！」

「よしっ！ とりあえずここまでは順調だ！ 次のステップに進むぞ！」

「了解なんよ！」

「うん…あたし頑張る！」

ブリフの指揮の下、カーミィ、サリィとともに移動を開始する。

「貴様、何者だ！？」

壇上では、舞台裏に控えていた“七色守護隊”（レインボーガードイアンズ）の幹部らしき面々があたふたしている。

「さてはマーナ姫を逃がしたサキクたちの仲間だな！？ ふざけんな！ あの魔女ん娘にあんな憎まれ口を叩かれんのはもう御免なんだよ！…なにっ！？」

青色キャップのつり目男ことゲーリーがいきり立ってタヤヤに襲いかかるが、

「ふふん！ うちの“メンタルブロック”内には立ち入り禁止なんだってえ！」

見えない壁にぶち当たってこれ以上前に進むことができない。

「おやおや…不思議な能力をお持ちのようですね…でも、これなら
どうです?」

ドオン！ ドオン！

それならばとジンは拳銃を構えて2発タヤヤにお見舞いする。
が、

「どうやらこれも効かないようですね…」

ゲーリーの突撃と同じく不可視壁に弾かれて無効化されてしまった。

「ターヤの“メンタルブロック”が弾くの人だけじゃないんよ！
人の手が加えられて3秒以内の物も弾くんよ！」

目的地へ向けて移動中のカーミィが嬉しそうに解説する。

「キャ！ あなた何をなさるの！ 触らないで下さい！」

一方、タヤヤの“メンタルブロック”内に潜伏して壇上に現れたヘ
ルはサラの救出を担当する予定だったが、マンドコントロールによ
ってマーナ姫になりきっているサラの必死の抵抗に遭い、平手打ち
までくらってしまった。

「ぐはっ…サラちゃん、俺だよ！ ヘルだよ！」

ヘルはそれでもめげずにサラの両肩を掴んで前後に揺らしながら必
死にサラとしての記憶を呼び覚まそうと試みた。
すると…

「ヘルぼん!?!」

逃げる

「ヘルぽん！？…ヘルぽんがなんでここに！？」

「サラちゃん！ 良かった！サラちゃんなんだね！？ 詳しいことはまた後で！ とにかく今は逃げて！」

「え、ええ！」

ヘルはなぜかマインドコントロールの解けたサラを引っ張ってステージを駆け下りた。

目の前の光景をただ啞然と眺めていた群衆は“メンタルブロック”を使わずともヘルとサラの逃げ道を作ってくれた。

「追え〜！ 奴らを追うんだあ！」

野生児ブッチャーの命令で衛兵たちは一斉にヘルの後を追ったが、

「おっと…ここから先は進入禁止なんだってえ！」

すぐさまタヤヤの“メンタルブロック”が立ちはだかった。

「ミュ…この壁は一体どこまで続いているミュか！？」

「クソつたれ！ これじゃあ、マーナ姫を追いかけらんねえじゃねえかよ！」

タヤヤが壇上に存在しているだけで追跡ルートを失う格好となった“七色守護隊”（レインボーガードイアンズ）幹部軍団はもはやお手上げの様相を呈していた。

そして、ステージ上での数分間の睨み合いの後、

「サラちゃんの安全は確保した！ お前も早く逃げろお！」
「言われなくても逃げるんだってえ！」

ブリフの叫びを聞いたタヤヤは強張った表情で一目散にステージを駆け下りていった。

「僕たちも行きましょう！ このままでは大変なことになります！」
そして、当然ながらジンたちもそれを追い掛けることとなった。

タヤヤの後を追うこと数十秒。

“七色守護隊”（レインボーガーディアンズ）幹部チームは驚愕の光景を目にすることになった。

「ぶ、ブッチャーさん…こ、こいつら化け物です…」

そこには先行してヘルたちを追い掛けていた数十人の兵士たちが一人残らず倒れていた。

そして、その中心には“ブリーフィング・ソード”を握ったブリフと竹刀を両手に持ったカーミィが平然とした表情で立っていたのである。

「おい、蟹娘…お前何人倒した？」

「さあ…生憎、倒した雑魚の数を数える趣味はうちにはないんよ！」

「お前ら、大勢の兵士を倒して疲弊し切ってるんじゃないのか！
げばばばば！」

「ふざけやがって！ この俺様が二人まとめて片付けてやんよ！」

「ゲリーさん…そう殺気立たずに！ よく考えてみて下さい…我々が4人で向こうは2人…集団戦でかかれればこちらに分があるのは明らかです！」

ブッチャーのささやかなダジャレをスルーし、殺気立つゲリーをなだめるジン。

その間にタヤヤはその場から逃げきることに成功した。そして、入れ替わりでやって来たのは…

「おいおい…お前ら数の勘定もできないのかよ…4vs2じゃなくて4vs4だろ？」

「ひつく…えつく…あたし頑張る！」

サラを連れて脱走したヘルと泣き虫サリイである。

「サラちゃんはケバ女に任せてきた！ 大丈夫、あいつが入口に立つてれば誰も洞窟には入って来ねえよ！」

「よし、ここまででは作戦通り！ なんだが…泣き虫ちゃん！ お前はケバ女と洞窟待機じゃなかったのか！？」

ヘルの報告に一点だけ作戦通りじゃない現象を見つけ、問い詰めるブリフ。

「ひつく…えつく…だって…あたしだってみんなの役に立ちたい…」
「役に立ちたい…つってもそんな泣きじゃくってちゃ…」

「大丈夫なんよ！ サリイはこう見えてもエニカ町一の道場の娘…空手の腕は折り紙つきなんよ！」

「…あたし頑張る！」

「ふっ…頑張れよ！」

真剣なまなざしに心を打たれたブリフが首を縦に振ったことよってサリイの参戦も決定。

4vs4の構図となった戦場で再びゲリーが騒ぎ始めた。

「2人だろうが4人だろうが関係ねえ！ やっぱ俺様が全員ぶつ殺してやんよ！」

「ゲーリーさん！」

「んだよ、ジン！ まだ団体戦をやれつつのかよ！？」

「いいえ…考えてみて下さい…我々と向こうの戦闘員の数は同数…それなら個人戦の方が個々の能力で勝る我々に有利なのは明らかです…」

「かゝかつかつかつ！ ジン…てめえにもようやく男気つてもんが分かってきたようだな！」

「俺たちもそれで構わねえぜ…なあ？」

「もちろん…」

「望むところなんよ！」

「あたし、頑張る！」

ジンの提案にブリフ監督が乗っかり、残る3人も承諾したことから、チーム・ブリフvs“七色守護隊”（レインボーガーディアンズ）幹部軍団のタイマン勝負×4が実現することとなった。

フルーティバトルスタイル

「ミュ！ あたしはこの泣き虫の子とやるミュ！ この子ならあたしでも楽勝だミュ！」

「えつと…よ、よろしくお願いします…」

泣き虫 チーク・サリィvs“青色部隊” 3番隊長 サティ・ミュ
ーのマッチアップはこのような経緯で決定した。

「あなたたち、よくもやってくれたミュね！ お陰でこっちはアンナ・クリスティー又様の大目玉確実だミュ！ 一刻も早くあなたを倒してマーナ姫様を返してもらおうミュ！」

「ひつく…えつく…そうは…させない…」

「ミュ！？ 台詞と表情が全然マッチしていないミュ！ そもそも女の涙なんてアテにならないミュ！ あたしは騙されないミュ！」

開戦と同時に大粒の涙を零すサリィを気にも留めず、ミューは謎のプラスチック容器とストローのセットをポシエットから取り出した。手順1、容器にストローを投入。

「これはあたしが長年の研究の末にやっと開発に成功した世界最強のシャボン液だミュ…」

手順2、ストローを通じてシャボン液に息を送風。

「…“シャボン・バブルス”だミュ！」

手順3、ストローの口から吹き出された大量の小さなシャボン玉はゆっくりと浮遊しながらサリィを包囲。

「ひつく…えつく…?」

手順4、涙とクエツションマークに溢れたサリイを軽やかに無視。

「…男なんてシャボン玉だミュ…」

手順5、謎の決め台詞。

パン、パン、パン、パアアアーン!!!!

「痛いっ!!!」

ミューの妙にノスタルジックな決め台詞を合図にサリイを包围していたシャボン玉が一斉に破裂。その爆風がサリイを襲った。

「これがあたしの開発したシャボンの威力だミュ！ 今までは泣ば許してもらえたかもしれないけど、あたしにはその手は通用しないミュ！ この勝負、あなたの負け確定だミュ！」
「ひつく…えつく…それでもあたしは…勝ちたい！」

なぜか僻みっぽいミューの勝利宣言に対抗して半泣きのサリイも何かポシエットから取り出そうとしている。

「ミュ…あなたそれ…グレープフルーツ??」

シャボン玉を見たサリイと同じくらいはてな顔のミュー。
サリイ、構わず丸かじり。

次の瞬間、ミューは目と耳を疑うことになる。

「あんださあ…そんなシヨボイ攻撃であたしに勝てるのか思っ
てんの!? 笑わせんな! てか、『男なんてシャボン玉』って、アレ
なに!? 全然、様になってないっつうの!」

驚くことなかれ。

コレ、サリイの台詞である。

その表情も今までとは明らかに違う。

目も眉も口角もすべて吊り上がっている印象だ。

「ミュ!?! いきなり強気になって…さっきまでの泣き虫はどうし
たんだミュ!? てか、あたしの決め台詞をバカにしないでほしい
ミュ! あたしにも色々あったんだミュ!」

「ふん…自分の男をよその女に泣き落されたとか、どうせそんなト
コでしょ!?!」

「ミュ…」

「図星ね! くだらない! てか、あたしがこの“フルーティバト
ルスタイル”を発動させたからには、あんだなんて瞬殺だから、マ
ジで!」

「うるさいミュ! ちょっと性格変わったからっていい気にならな
いでほしいミュ! …“シャボン・バブルス”だミュ!」

サリイのマシガントークに翻弄されるミューから吹き出されたシ
ヤボンが空中をふわふわと漂っている。

「ふん…芸がない女…」

サリイ、それを鬼の形相で握りつぶす。

「ミュ!?! あたしの“シャボン・バブルス”が素手で!?!」

動揺中のミューにすり足で接近し、

「 ゆずでっぽう ” ! 」

ポシエットから直輸入の果汁を両目にお見舞い。

「 ミュ ! ? 目が … そんなの反則だミュ ! 」

「 反則もクソもないんだよ … 今日のあたしはちよっぴり酸っぱいんだから、マジで ! … “ 柑橘系正拳突き ” ! ! ! 」

さらには、視界を失った敵のみぞおちに容赦なく拳を捻じ込んだ。

驚くことなかれ。

コレ、全部サリイの攻撃である。

「 ミュ … 」

重い一撃をくらったミューは膝から崩れ落ち、ここで決着がつくととなった。

「 ふん … 稽古にもならん … … ひつく … … えつく … 」

地面に突っ伏しているミューに背を向けたサリイの表情は戦闘中は明らかに違っていた。

目も眉も口角もすべて元通り。

そして、溜め込んだ分の恐怖が一気に降り懸かってきたのか封を切ったように大声で泣き叫び、その涙はしばらくの間、枯れることはなかった。

4本の竹刀

「それでは、僕はこちらの可憐なお嬢さんとお手合わせ願おうかな
…」

「あんだ、うちが女やからって甘く見ん方が身のためなんよ！」

田舎娘 タミホーク・カーミィvs“水色部隊” 3番隊長 ジンの
マッチアップはこのような経緯で決定した。

「あんたら一体どういつもりなんよ！ 罪もない女の子を誘拐し
て王女に仕立てて…最低やとは思わんの？」

「おやおや…いきなり物凄い剣幕だなあ…キレイな顔が台無しだよ
！」

「誤魔化さんとして！ あんだ、そんな澄ました顔して世界征服を
企む組織の一味らしいやないの！？ そんなん絶対にさせないんよ
！…“裂風斬”！！」

涼しげなジンとは対照的にのっけから正義感に燃えるカーミィは4
本の竹刀から1本を選択。式典の最中にも見せたように斬撃を放っ
た。

「…“アイスサーベル”！！」

ジンも同様に鞘に納めた透明な剣を抜き、直撃を防いだ。

「なるほど…先刻の式典での斬撃はお嬢さんでしたか…なかなかの
腕前ですね…」

「当たり前なんよ！ この瞬刀“春風”はうちの持つ4本の竹刀の
中で最軽量…斬撃にはもってこいなんよ！」

「素晴らしい…僕の“アイスサーベル”もこんな強敵と戦えて喜ん

でいますよ…」

依然、クールなスタンスを崩さないジンは斬撃を防いだ透明な剣を地面に思い切り突き刺した。

すると、その場所を中心に少しずつ地面が凍っていき、半径1メートルほどの氷たまりが完成したではないか。

「…氷の剣つてわけやね！ 少し掠っただけでも身体が凍って致命傷になる…とでも脅すつもりなん？」

「僕の台詞を取らないでほしいなあ…まったく！ とにかくお手柔らかにお願いしますよ！」

ジンは涼しげな笑みを浮かべると“アイスサーベル”を構えて、カーミイに斬りかかった。

「薫刀“紅花”！！…あんななんかの腕前じゃ、小さい頃から剣道一筋で鍛えられたうちに掠り傷ひとつ、つけられないんよ！」

カーミイは竹刀チェンジを行い、ジンの太刀を鮮やかに受け止めていく。

「確かに…この程度の太刀筋ではお嬢さんには通用しないみたいですね…」

「それにこの薫刀“紅花”はうちの竹刀の中で一番繊細で扱いやすい…これくらいの攻撃、受け切れて当然なんよ！」

言葉と刀を同時に交える二人。

ジンが攻めてカーミイが防ぐ。

そんな光景がしばらく続いたが、戦況の変化は突然訪れた。

「しまった！」

カーミイが不意にバランスを崩してしまったのだ。

彼女の足元には先ほどジンの“アイスサーベル”が作り出した氷の波紋。

「ふふっ…この時を待っていました… “フローズン・スラッシュ

”！」

ジンはこの勝機を逃すまじと氷の剣を大きく振りおろした。

「ぐはっ！」

体勢を崩していたカーミイはこの攻撃を避け切ることができなかった。

「咄嗟の反射神経で致命傷は逃れましたか…流石です…ですが、その様子だとお嬢さんの左腕はもう使い物にならないようですね…」

いつもの冷静さの中に微量の冷酷さを滲ませるジン。

「くっ…ちょうどいいハンデやね…あんたくらい右腕1本で十分なんよ…」

カーミイは凍った左肩を押さえながらも毅然としている。

「いいでしょう…ついでに最後の右腕も使えなくして差し上げましょっ…」

冷酷さの含量を若干アップさせたジンはカーミイにトドメを刺しに

かかる。

「湾刀“三日月”!!!」

対するカーミイは再び竹刀をチェンジして右腕オンリーで応戦。

「もう受け続けるなんてマネはしないんよ!」

若干湾曲した竹刀でジンの攻撃を受け止めてそのまま跳ね上げる。
ジンの手を離れ空中を舞う“アイスサーベル”。

「この湾刀“三日月”は最も長くて重い竹刀: 威力は抜群なんよ!
…そして…」

三度目の竹刀チェンジの後、カーミイはジンの喉元を強烈に突き上げた。

「ぐわあああ!!!」

「この鋭刀“百舌鳥”は最も鋭利な竹刀: 突き技にはもってこいな
んよ!」

1本、それまで。

カーミイはすべての竹刀を鞘に納め直すと去り際に一言。

「あんた口ばかり達者で…剣の技はさっぱりなんやね…」

High Water Pressure

「タイムン勝負なら俺様はこのスカーフ野郎を殺らせてくれ…この粹がった目が無性に腹立たしい！」

「心配すんな、俺は相手は選ばねえ…サラちゃんを酷い目に遭わせた奴なら誰でも喜んでぶっ飛ばしてやる！」

怒れる作戦参謀 ブリフvs“青色部隊”2番隊長 フランツ・ゲ
ーリーのマツチアップはこのような経緯で決定した。

「お前ら、よくもサラちゃんを…俺を怒らせたことを後悔してももう遅えからな！」

「怒ってんのはこつちだ！ てめえらの所為でこの俺様がどんだけ面倒な目に遭ってることか…てめえら全員ぶっ殺さねえと気が済まねえ！」

サディスティック全開で皆殺し宣言を行ったゲーリーは左右のポケットから1本ずつ青のゴムチューブを引っ張り出した。

「かゝかつかつかつ！ 俺様が“デビルチューブ”引っ張り出したが最後…てめえの地獄行きはたつた今、確定した！」

「地獄に行くのはお前の方だ、クソ野郎…」

静かな怒りに震えるブリフはゆっくり自らの黄色スカーフに手を掛け、いつもの動作で“ブリーフィング・ソード”を呼び出した。

「かゝかつかつかつ！ 俺様の圧力の前に死ねえ！ “HWP砲”！」

ブリフの不思議剣に全く興味を示さないゲーリーは青のキャップを

逆さにかぶり直すと、両側のポケットから繋がるゴムチューブの先を握って口を狭め、物凄い勢いで水を噴射させた。

「へっ…何だそのヘナチヨコ水鉄砲は！？ 赤ん坊のシヨンベンの方がまだ厄介だぜ！」

しかし、当然この程度の攻撃がヒットするブリフではない。

「かゝかつかつかつ！愉快、愉快！ だが、この“デビルチューブ”の先にはナリック様が開発した水生成のための永久機関が繋がってる！ てめえがいつまで逃げ回ってられるか見物だな！」

「俺がいつ攻撃しないって言ったよ？…“サラちゃんを誘拐するなんて絶対に許さない”斬り！！」

ゲリーの水噴射を交わしながら無駄に技名の長い攻撃を仕掛けるブリフ。

「かゝかつかつかつ！ この“HWP砲”にはこういう使い方もあるんだぜ！」

相変わらずの上から口調のゲリーは“デビルチューブ”の照準を自分の真下に合わせた。

「なるほど…水圧を利用して空中に浮くこともできるってわけか…」「かゝかつかつかつ！ どうだ…これでてめえは俺様に攻撃するとはできなくなった！ てめえは俺様から逃げ惑うことしかできねえんだよ！ “4MWP砲”！」

水を得た魚状態のゲリーは右チューブからの噴射で宙に浮いたまま、左チューブの先をつまんで水鉄砲を4枝に分離。

そのそれぞれが時間差でブリフを襲った。

「へっ…子供騙しが！」

しかし、この時間差攻撃もやはりブリフには通用しない。

「かゝかつかつかつ！ 俺様の攻撃から逃げ惑う姿を上から眺めるのはなかなかのエクスタシーだな！ まさに高見の見物ってわけだ！」

高笑い“4 MWP砲”の噴射を続けるゲリーとそれを軽やかに交わし続けるブリフ。

しかし、

「しまった！」

ブリフは不意にバランスを崩してしまった。

彼の足もとにはゲリーの噴射した水によって泥沼化した地面。

「おっ、ラッキー！ “HWP砲”！」

一瞬の間隙をついてゲリーの水鉄砲の攻撃。

「くっ！」

しかし、ゲリーの攻撃はブリフには当たらない。

“ブリーフィング・ソード”で間髪防いだようだ。

「危なかった…今度はこっちからいかせてもらっぜ！」
黄色風剣

…？」

ピンチの後にはチャンスあり。

ブリフはセレネを葬った必殺技を繰り出そうとして…気が付いた。

「あれっ… “ブリーフィング・ソード” の様子がオカしい!？」

本来ならば鋭利に光り輝いているハズが、今は萎びて頭を垂れている。

原因として思い当たるフシといえばひとつしかない。

「かゝかつかつかっ! どうやらてめえのその武器は水に濡れると使い物にならなくなるみてえだな! これでてめえは反撃の術を失った…観念しやがれ…地獄に落ちる覚悟はできたかよ?」

「くっ…」

弱点を克服せよ

「地獄に落ちる覚悟はできたかよ？」

「全然！ 生憎、俺は臆病者でね…まだまだ地獄へ行く気にはなれねえみたいだ…」

優越感メーターを振り切っているゲーリーに虚勢を張ってはみたものの、どうしたものかとセレネ戦同様、思考の海に沈みこむブリフ。

『完全に忘れてたな。』

いや、忘れてたっというか知らなかったんだけどさ。

でも、実際そうだったんだからそうなんだろうな。

どうやら“ブリーフィング・ソード”は水に弱いらしい。

とりあえずはひとつ勉強になった。

こうやってまた一つずつ思い出していくしかない。

だが、今回の件に関しては思い出すのは一つじゃマズイだろ。

この水鉄砲野郎を倒すためにはさ。

そう、その弱点を克服する方法。

ないハズがない。

と、思いたい。

記憶を失う前の俺はこんな致命的な弱点を放っておくようなバカじゃないハズ。

と、思いたい。

そうじゃないとこの状況は流石にマズイ。

身体に問いかける。

逆火の玉野郎との時はそれで思い出せた。

今は俺の身体の記憶力を信じるしかない。』

「かゝっかっかっ！ 打つ手もなくなっただ喋る気力も失ったか！

愉快、愉快！ お前にその気がなくても俺様が地獄へ連れてって
やんよ！…“4MWP砲”！」

ようやく内的海中から浮上してきたブリフの元にゲーリーの高笑い
と水鉄砲が届いた。

「クソがつ！ もう少し考える時間よこしやがれ！」

言葉がやや荒れ始めたブリフ。

ゲーリーの攻撃を避けるだけなら造作もないが、お陰で身体の記憶
を呼び覚ましている余裕がない。

「かゝかつかつかつ！ せいぜい逃げ惑え！ 俺様が飽きるまでそ
こで踊ってるがいいさ！」

極上のドS発言を繰り返すゲーリーの攻撃を避けるにはすでにブリ
フの体力と堪忍袋は限界を迎えていた。
そして、ブリフは決断した。

『このまま逃げ続けてもしょうがねえ。

一か八か防御を捨てて追憶作業に全霊を注ぐんだ。』

「かゝかつかつかつ！ とうとう観念したか！ 地獄へ落ちる覚悟
ができたとみえる！」

決断を即実行に移したブリフはゲーリーの“4MWP砲” 真正面
から受けた。

その代わりに精神は最大限まで集中力を高める。

「かゝかつかつかつ！ こりゃ、いつまで立ってられるか見物だな！」

ドS心に完全に火がついたゲリーは一切の容赦もなく、一層激しい水鉄砲を浴びせくる。

ブリフは水浸しになりながらここで猛烈なデジャヴ感に襲われた。

「あれっ…」

この感覚…いつかもこんなことがあった気がする。

水に全身が濡れて…力が入らなくて…

そうだ、そんな俺は一体どうした！？

思い出せ！

もちろん頭に命令してるんじゃない！

身体にだ！」

「かゝかつかつかつ！ そろそろ限界か！？」

悦に浸ったゲリーの高笑いをかすかに聴覚で捉えながら、ブリフはカッと目を開ける。

何をどうしたとかじゃない。

理屈で説明することはできないが、100%気合でという精神論的なことでもない。

ただ、事実としてブリフの握る“ブリーフィング・ソード”は鋭利に光り輝いていた。

「思い出したぜ…身体でな！」

「なにっ…元に戻っているだとお！？」

久々のゲリーの驚愕の音が鼓膜を震わせると同時に、ブリフは水鉄砲の発生源に向かって泥の中を猛ダッシュ。

復活したてのマイソードでゲーリーを浮遊させるために地面に噴射され続ける水流をせき止めた。

「かゝかつかつ！ 水はその剣の弱点なんだろ！？ せつかく元通りになったつてのに、何自分から水ん中突っ込んでるんだよ！ バカじゃ…なにっ!？」

“ブリーフィング・ソード”は萎れない。
代わりに浮力を失ったゲーリーはグチャグチャの地面に落下した。

「俺の相棒はそんな柔じゃねえよ!…イエローサイクロン“黄色嵐剣”!!!」

さっきまでの高慢な態度はどこへやら。

泥まみれになって意気消沈したゲーリーに向かってブリフは必殺技を繰り出し…

「ぐわっ!!!」

今度こそ成功した。

「ムカつく野郎だが、一応感謝しておく…これで俺はまたひとつ、昔の俺のピースを手に入れることができたからな…」

ブリフは自らの相棒をその労をねぎらうようにゆっくりと頭上で振り回し、首元に巻きなおした。

氷の巨人

「…あまり気は進まないが、わしはこの余り物のポーズとだな！
げばばば！」

「ダジャレのつもりならもうちよつと分かりやすいヤツを頼むぜ…
多分ほとんどの人が気付かねえぞ！ どうでもいいけど…」

“ヘルニアの呪い” ヘルvs“水色部隊” 2番隊長 チューソン・
ブッチャーのマッチアップはこのような経緯で決定した。

「どうだ、これでマーナ姫さんの代わりはいねえぜ…“シッターカ
ンパニー”さんよお？」

「なるほど…すべて知った上での抵抗というわけか…」

戦闘前の舌戦。

ヘルの得意げな先制攻撃に意外と理解力の高い野生児ブッチャー！。

「お前らの計画も止めてみせる！ でも、その前に…サラちゃんの
仇討ちだ！」

「サラちゃん…マーナ姫様のことか？」

「まあな…お前らはそう…」

「おいおい、おぬし…まさか『マーナ』と『まあな』をかけたんじ
ゃ…」

が、ここで流れがオカしくなった。

「あ？ 偶然だろ…てか、そんなこと俺の台詞遮ってまで言うこと
か!？」

「なにっ!?!? こんな巧妙なダジャレをこつみよ簡単に無意識で作

り出してしまつとは…師匠と呼ばせてくれ！」

「お前の師匠なんて願下げだよ！」

「わしが師匠と呼んでも支障なかるう？…げばばばば！」

「寒すぎる…」

「寒い？ そりゃ、そうだ！ なぜならわしは全身氷人間だからな…」

ここで更に話がこじれる。

「いや、そういう意味じゃなくて…」

「実際に氷できてるわけじゃないんだがな、ナリック様の技術によつてわしの体温は - 50 で常に保たれている…」

「低体温症にも程があるだろ…そんなんで生きていけんのかよ？」

「げばばば！ 全く問題はない…むしろ最近は体温が - 40 を超えると体調が悪くなるくらいだ！」

「へえ…」

半信半疑を言動で示すヘルにブツチャーが選択した行動は、

「嘘ではないぞ…その証拠に…“氷棒”！」

息を大きく吐くことだった。

なぜそれが自らの低体温の証明になるのかというと、

「なっ！？」

ブツチャーの吐息の道筋が氷の柱と変わり、ヘルを襲ったからである。

「げばばばば！ スマン、スマン…うっかり攻撃してしまった！」

しかし、咄嗟によく避けることができたな！ あれに貫通されてはただの凍傷では済まんところだったぞ！」

自身の脇をすり抜けて行つた氷の道筋を辿つたヘルの目線は、完全凍結の憂き目に遭つた大木に行き当たつた。

「なるほど… - 50 のお前の体内から吐き出される空気も当然、氷点下を下回るつてわけか…」

「げばばばば！ やつと信じてもらえたようだな！ これもわしの人並み外れた肺活量と低体温の成せる業… “氷柱銃”！」

ブツチャーは再び大きく吸息… からの小刻みな呼息。すると、氷の弾丸が複数、物凄いスピードでヘルを襲つた。

「ヘルニアン・スピアー／アイアンモデル”… “鉄の鎧”！」
アイアンコート

ヘルは得意の防護壁で応戦。しかし、

「ぐわっ！」

そのうちの1発がヘルの左足に命中。

そのわけは…

「げばばばばば！ いきなり鉄板が現れたからびっくりしたかな、そう同じ場所に何発も“氷柱銃”を受ければ穴も開くわ！」

「くっ… “リーフモデル”！… “つるのムチ”！」

ヘルは気を取り直すと、速やかなモデルチェンジでブツチャー目掛けて草の鞭を振り下ろす。

が、その巨体は想像を遙かに上回る俊敏性で攻撃を回避。

「くっ…パラメータ分布オカしいだろ、お前：“グリーンリボン”
！」

恨み節のヘルは草の槍を新体操のリボン様に性質変換させ、カウボ
ーイの投げ輪の要領でブッチャー捕獲を試みる。
その結果、

「…なぜ避けなかった？」

見事成功もブッチャーの無抵抗っぷりに疑念を抱くヘル。

「げばばばば！ 不満か？…理由ならすぐに教えてやる…“凍傷^{デスフ}
地獄^{ラッペ}”！！」

ブッチャーは自らを捕縛する緑の縄を両手で掴み精神を集中させた。
すると、

「ぐわあああ！」

ブッチャーの掴んだ部分から見る間に氷の侵食が始まり、最終的に
はヘル自身の右肩まで到達してしまったのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7311s/>

ヘルの大冒険

2011年8月2日19時30分発行